

藩印 大 喜

(一ノ分四 印朱)

藩印 龜 田

(一ノ分四 印朱)

藩印 庭 瀨

(一ノ分四 印朱)

藩印 飯 野

(一ノ分四 印朱)

藩印 守 山

(一ノ分四 印朱)

藩印 半 原

(一ノ分四 印朱)

藩印 綾 部

(一ノ分四 印朱)

藩印 與 板

(一ノ分四 印朱)

藩印 泉 之

(一ノ分四 印朱)

藩印 伊 勢 崎

(一ノ分四 印朱)

藩印 大 溝

(一ノ分四 印朱)

藩印 本 庄

(一ノ分四 印朱)

藩印 西 大 路

(一ノ分四 印朱)

藩印 栢 原

(一ノ分四 印朱)

藩印 赤 穂

(一ノ分四 印朱)

藩印 佐 伯

(一ノ分四 印朱)

藩印 小 幡

(一ノ分四 印朱)

藩印 常 陸 府 中

(一ノ分四 印朱)

藩印 新 見

(一ノ分四 印朱)

藩印 舉 母

(一ノ分四 印朱)

藩印 飯 山

(一ノ分四 印朱)

藩印 下 館

(一ノ分四 印朱)

藩印 長 嶋

(一ノ分四 印朱)

藩印 八 戸

(一ノ分四 印朱)

結城藩印

(一ノ分四 印朱)

茂木藩印

(一ノ分四 印朱)

黒羽藩印

(一ノ分四 印朱)

龍岡藩印

(一ノ分四 印朱)

佐貫藩印

(一ノ分四 印朱)

佐野藩印

(一ノ分四 印朱)

飯田藩印

(一ノ分四 印朱)

鶴牧藩印

(一ノ分四 印朱)

豊岡藩印

(一ノ分四 印朱)

三日月藩印

(一ノ分四 印朱)

神戸藩印

(一ノ分四 印朱)

小諸藩印

(一ノ分四 印朱)

岩村田藩之印

(一ノ分四 印朱)

湯長谷藩之印

(一ノ分四 印朱)

備前新田藩印

(一ノ分四 印朱)

伯太藩印

(一ノ分四 印朱)

山上藩印

(一ノ分四 印朱)

山中藩印

(一ノ分四 印朱)

宮川藩印

(一ノ分四 印朱)

一宮藩印

(一ノ分四 印朱)

五嶋藩印

(一ノ分四 印朱)

豊後森藩之印

(一ノ分四 印朱)

多古藩印

(一ノ分四 印朱)

田原藩印

(一ノ分四 印朱)

高富  
藩印

(一ノ分四 印朱)

新谷  
藩印

(一ノ分四 印朱)

山家  
藩印

(一ノ分四 印朱)

小松  
藩印

(一ノ分四 印朱)

平戸  
新田藩印

(一ノ分四 印朱)

須坂  
藩印

(一ノ分四 印朱)

黒川  
藩印

(一ノ分四 印朱)

山崎  
藩印

(一ノ分四 印朱)

苗木  
藩印

(一ノ分四 印朱)

相良  
藩印

(一ノ分四 印朱)

麻生  
藩印

(一ノ分四 印朱)

牛久  
藩印

(一ノ分四 印朱)

長瀨  
藩印

(一ノ分四 印朱)

峰山  
藩印

(一ノ分四 印朱)

三上  
藩印

(一ノ分四 印朱)

薦野  
藩印

(一ノ分四 印朱)

小泉  
藩印

(一ノ分四 印朱)

金澤  
藩印

(一ノ分四 印朱)

西端  
藩印

(一ノ分四 印朱)

足利  
藩印

(一ノ分四 印朱)

房州  
勝山藩印

(一ノ分四 印朱)

国田  
藩印

(一ノ分四 印朱)

三根山  
藩印

(一ノ分四 印朱)

大田原  
藩印

(一ノ分四 印朱)

丹南  
藩印

(一ノ分四 印朱)

三草  
藩印

(一ノ分四 印朱)

津輕  
藩印

(一ノ分四 印朱)

狹山  
藩印

(一ノ分四 印朱)

館山  
藩印

(一ノ分四 印朱)

播州  
小野  
藩印

(一ノ分四 印朱)

清末  
藩印

(一ノ分四 印朱)

大垣  
新田  
藩印

(一ノ分四 印朱)

柳本  
藩印

(一ノ分四 印朱)

雲州  
雲母里  
藩印

(一ノ分四 印朱)

吹上  
藩印

(一ノ分四 印朱)

淺尾  
藩印

(一ノ分四 印朱)

下手渡  
藩印

(一ノ分四 印朱)

小倉藩  
新田  
藩印

(一ノ分四 印朱)

多度  
津藩  
藩印

(一ノ分四 印朱)

糸魚川  
藩印

(一ノ分四 印朱)

生實  
藩印

(一ノ分四 印朱)

小嶋  
藩印

(一ノ分四 印朱)

芝村  
藩印

(一ノ分四 印朱)

西平  
藩印

(一ノ分四 印朱)

椎谷  
藩印

(一ノ分四 印朱)

柳生  
藩印

(一ノ分四 印朱)

高德  
藩印

(一ノ分四 印朱)

小見川  
藩印

(一ノ分四 印朱)

復古記 卷八十五 第一 終

復古記 卷八十五(第一) 明治元年五月十五日

○以上七官、七司、四府、二百三十六藩、七縣、此餘ハ之ヲ佚シ、或ハ之ヲ刻セス。



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)

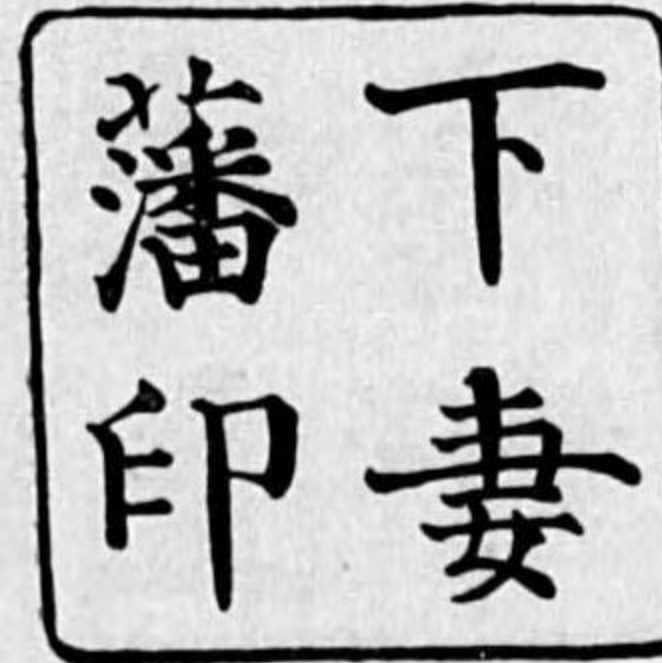
復古記 卷八十五(第一) 明治元年五月十五日



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)



(一ノ分四 印朱)

復古記 卷八十五 第二

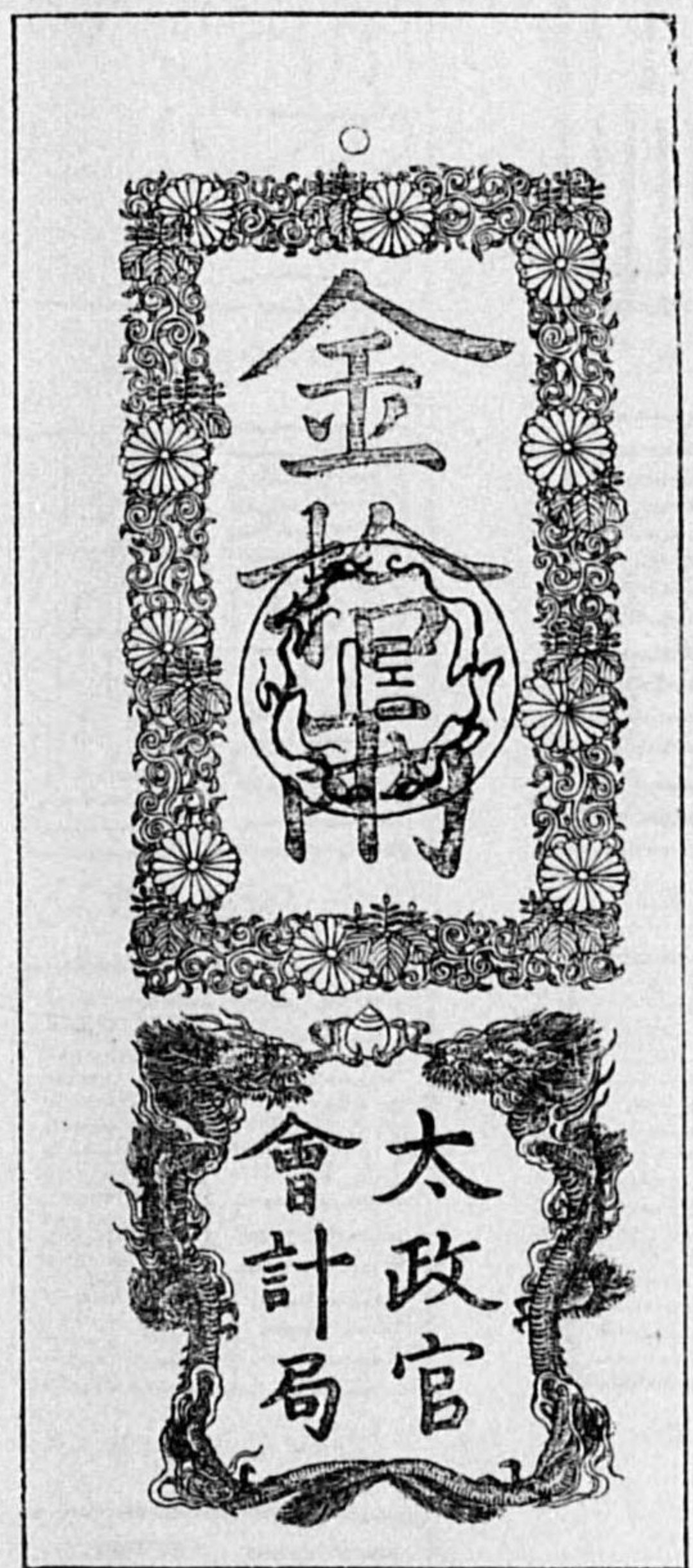
復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日

○新製ノ紙幣ヲ發行ス。

○九月達書

先達ヲ被 仰出候金札、來ル十五日ヨリ御發行相成候間、無滯取交通用可致候、尤見本札五品、兩替共へ掲置候様被 仰付候間、此旨向々不漏様可相觸モノ也。

五月 毛利元徳家記 有栖川宮家記



(印朱ハ影印ノ中央分三寸五縱寸原 厘五分二寸二横)

復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日



(印朱ハ影印ノ中央厘五分九寸四縱寸原 厘五分八寸一横)



(裏ノ札前)



(原寸三寸六分五厘 中央印ノ影八朱印)



(前札ノ裏)



(原寸四寸四分 中央印ノ影八朱印)



(前札ノ裏)



(印朱ハ影印ノ央中 厘五分九寸二縱寸原 分二寸一横)

○按スルニ、當時製造ノ數詳ナラス、二年二月五千兩増製ノ令アリ、尋テ之ヲ停メ、已製ノ現數三千二百五十萬兩ヲ限ルヲ布告ス、然レトモ十二年編纂ノ歲計決算書ニ據ルニ、太政官紙幣發行ノ總額ハ四千八百萬兩ナリ、蓋國用不贖ヲ以テ、更ニ之ヲ増製セシナリ、併録シテ參考ニ供ス。

○朝貴ノ名稱ヲ冒シテ、金銀ヲ貸與スルヲ禁スルヤ、負債者、往々口ニ藉キテ舊債ヲ償ハサルモノアリ、是日令シテ、其約ヲ愆ルコト勿ラシム。  
過日御布令ニ相成候宮、堂上方名目ニテ、貸附金ト稱シ候向ハ、取扱之儀被止候得共、右御布令ヲ口實ト致シ、借受返辨不

致者モ有之哉ニ相聞エ、以之外之事ニ候、向後心得違無之様、更ニ被 仰出候事。

但、從前取扱來候分ハ名目金ト雖モ、無故障返辨可致候事。官中日記 有栖川宮家記

○立花種恭ノ罪ヲ釋シ、士心ヲ一ニシテ王事ニ服セシメ、其封疆騷擾スルヲ以テ、歸藩ヲ命ス、適本宗立花鑑寬東下ノ命アリ、種恭乃チ之ニ隨屬セント請フ、之ヲ聽ス。

立花出雲守

其方儀、於舊幕府若年寄勤役中、徳川慶喜去冬大政返上以來、當正月三日後、大變動ニ及ヒ候形行、反逆顯然、其罪天下萬民俱ニ所知、終ニ恐多モ一旦 御親征 行幸被爲遊被爲惱 宸襟候、就テハ其方樞要之職務ヲ以、屹度取計振モ可有之處、兼テ在江戸、彼是ノ情實不相通、盡力難届次第モ有之由ニ候得共、如斯不容易時態ニ立至リ候テハ、全勤役中之落度難免、相當之御譴責ヲモ可被 仰付之處、出格之御寬典ヲ以被免謹慎候條、彌以國論一定シ、精々可勵忠勤旨 御沙汰候事。

五月 官中日記 立花種恭家記

立花出雲守

其方既往御赦宥被 仰出候ニ付テハ、即今奥羽邊不容易形勢ニ付、天機伺、御誓約等相濟候ハ、早々在所表へ引取、奥羽鎮撫使ノ指圖ヲ請、藩力相應出兵、格別勉勵、彌以勤 王ノ實効可相立旨 御沙汰候事。

五月 官中日記 立花種恭家記

○私儀先達テ中謹慎被 仰付置候處、今般出格之以 御寬典謹慎被免候段、重疊難有仕合奉存候、然處、當今奥羽邊形勢不容易儀ニ付、爰元ニテ 天機伺 御誓約等相濟候ハ、早々在所へ引取、奥羽鎮撫使之御差圖ヲ請、藩力相應出兵、格別勉勵、

復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日



彌以勤 王之實効相立可申旨 御沙汰之趣、最前以御請ハ奉申上置候得共、右出兵之儀ニ付テハ、先祖以來格定モ有之、其上是迄江戸定府罷在候家來トモ、不殘筑後領分の方へ爲引越候段、過日御届申上置候通ノ事ニテ、同所へハ家來共纒之人數而已差置、漸役人丈位ニ御坐候得ハ、譬へ何レニカ仕罷下候テモ、出兵等之儀ハ實難取計候ニ付、最前モ奉願候テ、非常進退、出兵等之儀ハ、立花飛驒守方ト俱ニ、中興之祖宗モ、直次兄弟以來、一家一體之心得ニテ動止一圖ニ忠勤罷在候家柄之儀御座候得ハ、右等兼々之志願ニ付、當二月中モ右俱ニ非常出兵一同仕度段奉願候處、早速願之通三月二日被 仰出、依之、神戸御警衛以來、關東へ出兵被 仰出候節モ、乍少人數一同ニ尙願之上出立モ爲仕置候次第御座候、就テハ此節モ飛驒守儀東下被 仰出候趣承知仕候ニ付、何卒右一同ニ罷越度志願ニ御座候間、此段奉願候、然上ハ先祖以來之赤心モ顯レ、忠孝兩儀ニモ相叶可申哉ト一向懇願之至奉存候、右願之通被 仰付被下候ハ、實以必至困難之勝手向ニハ有之候得共、飛驒守助力ヲ以勤 王寸忠之素意モ相立、難有奉存候ニ付、幾重ニモ古來ヨリ之格情以御賢察、願之通被 仰付被下候様、重疊奉願候、以上。

五月廿七日

立花出雲守

辨事 御中

○三十日批紙  
願之通候事。行政官記  
立花種恭家記

同姓出雲守儀、先達中謹慎被 仰付置候處、出格之以 思召謹慎被 免候段、於私モ重疊難有仕合奉存候、然處、同人儀今般在所へ引取、奥羽鎮撫使之以御差圖、藩力相應出兵之儀被 仰出候ニ付、一先御請ハ申上候由之處、委細之儀ハ從本人申上候通、私中興之祖宗茂以來非常之節出兵モ私人數へ相加リ、一纏ニ相成候テ進退致來候儀ニ御座候得ハ、猶更此節之儀ハ出雲守願之通御聞濟被成下候ハ、於私モ萬端之指揮モ行届、俱々今一層勉勵、勤 王之實効相立、無此上難有仕合奉存

候間、何卒本人數願之通被 仰付度、偏ニ奉願候、以上。

五月廿七日

柳河少將

辨事 御中

○三十日批紙  
願之通被 仰付候事。行政官記  
立花鑑寬家記

○種恭六月十七日京師ヲ發シ、大阪ニ淹留シ、九月九日東京ニ至ル。

○新宮藩ノ徵兵ヲ卻ク。

水野大炊頭徵兵

右御不審之儀有之候間、徵兵人數暫可差控旨被 仰付之。  
新宮藩記

○ 御不審之儀有之候ニ付、徵兵人數暫可指控旨、一昨十五日於軍務官、大炊頭へ以御書付被仰渡奉恐入候、依之、即刻旅宿へ爲引取申候、此段御届奉申上候、以上。

五月十七日

水野大炊頭家來  
細井八郎左衛門

辨事 御役所 新宮藩記

○ 去ル十五日大炊頭徵兵へ御不審之儀被爲在候ニ付、暫差扣可申旨、御書付ヲ以被 仰出、奉恐入、即刻引拂申候、右ハ大炊頭何等御不審之儀被爲 在候儀歟、可計知儀ハ勿論無御座候得共、去ル四月歸邑之御暇被 仰出罷下候以後、祖母大病、引續病死仕候ニ付、愁傷只管追善相營罷在候所、今般被 仰出候段奉拜承候者、嗚々恐懼可仕、且徵兵之人數ニ被加候段、面

目身ニ餘リ、一入憤發、往々御用立候様專心掛居候儀、殊ニ格別御手厚御賄等被下置候ニ付、實ニ奉感拜居候折柄、御指戻相成、奉恐入、悲歎申計モ無御座候、何卒右之段 御憐察被成下、徵兵被 召返候様、偏ニ奉歎願候、以上。

五月十九日

軍務官 御役所 新宮 藩記

水野大炊頭家來

細井八郎左衛門

先般大炊頭徵兵へ御不審之儀被爲在候ニ付、暫可差扣旨被 仰出、奉恐入、不取敢當 御役所へ書取ヲ以奉伺候所、一昨廿五日、於軍務官右御不審之次第柄、壬生左衛門權佐松委細被仰聞、難有仕合奉存候、依之、此段奉申上候、以上。

五月廿七日

辨事 御役所 新宮 藩記

水野大炊頭家來

細井八郎左衛門

○本件其故ヲ詳ニセス、後考ヲ俟ツ、按スルニ、八月ニ至リ再ヒ徵兵ヲ貢ス。

○舊高家交令寄合、及ヒ旗下士歸順者ノ家祿ヲ復ス。

○太政官日誌ニ云、五月十五日舊幕府高家、旗下在京之面々被 召出、本領安堵被 仰付、御書付左之通、  
高幾許 何 某

從前徳川氏附屬ヲ以令領知之處、慶喜反逆ニ不從、大義ヲ存シ、速ニ上京志願之趣達 叡聞、神妙之至、忠情不淺被 思召、依之、本領安堵、是迄之通被 仰付、今後分限相應 王事ニ勤勞可致旨被 仰出候事。

慶應四年戊辰五月 太 政 官 印  
別紙左之通御達、

一本領安堵被 仰付候ニ付、御請誓書、別紙案文之通相認、明日參 朝差出可申事、

一近日、日限被 仰出、一同 御誓約被 仰付候事、

一當春以來追々上京勤 王之志情ハ一同ニ有之候得共、其中實効之淺深等、先般銘々書上ニオヨヒ候趣、逐一被爲 聞食、追テ其品可被 仰付候事、

一格席稱呼、改テ可被 仰付品モ有之候得共、未々御取調中ニ付、少時は迄之稱呼ニテ、家席如故相心得可申、尤寄合以外、領知之高下ニ不拘、一列ト相定可申、是又追テ稱呼可被 仰付候事。

一元旗下之面々、從前徳川氏ニ附屬シ、秩祿ヲ請居候得ハ、君臣之分不可免、慶喜 朝敵ト相成候ニ於テハ、縱令大逆ニ與セストイヘトモ其御處分可被 仰付候處、一同追々上京、順逆ヲ明カニシ候志情神妙ニ被 思召、改テ御奉公被 仰付

候ニ付テハ、元祿三分之一、或ハ半減等被爲宛行候儀ニ候得共、方今之旗下之中、賊黨ニ與シ、大逆不道不可謂之醜類モ有之候處、其方共全ク方嚮ヲ不失、御一新之聖慮ヲ奉體認、追々身分相應之御用等奉願候趣ニ付テハ、減祿之御處置難被爲忍、格外之 叡旨ヲ以、所領是迄通被 仰付候段、莫大之 皇恩奉感戴、海内御一定之 聖業ヲ奉助、粉骨碎身、何分之御用向可相勤旨 御沙汰候事。

五月十五日

○誓書案文ハ之ヲ略ス。

○非藏人日記ニ云、五月十五日、元高家、元交代旗本等、春來上京之輩、知行高御調相濟分、依 召參 朝、御拜道廊下於龜摺戸内、辨官事兩人出坐、舊幕府ヨリ宛行處之本領安堵之御朱印紙賜之、別紙御沙汰書一通、高家已下一同拜見之上可致返上旨被申渡、第一へ被授、各拜見相濟之上、於同所不取敢御禮申上、猶自明日兩三日ニ割合、原註、依多 人數也 誓紙持參、御禮參朝可有之旨被申渡、各退出。

高壹萬千石 但込高共

山名主 水助

從前德川氏附屬ヲ以令領知之處、其方儀慶喜反逆ニ不從、大義ヲ存シ、速ニ上京志願之趣達 叡聞、神妙之至、忠情不淺被 思食、依之、本領安堵、是迄之通被 仰付、今後分限相應 王事ニ勤勞可致旨被 仰出候事。

慶應四年戊辰五月

御朱印

別紙、

御取調之節、夫々書上之通、新田込高共御書加へ被下置候得共、右邊之儀ハ猶御取調之上 御沙汰之次第モ可有之歟、其旨 爲心得申達置候事。 山名義 路家記

御請誓文、

朝政御一新之折柄、德川慶喜反逆顯然ニ付、大義ニ從ヒ速ニ上京、奉窺 天意候處、不圖モ今般莫大之皇 恩ヲ以、本領安 堵被 仰付、冥加至極難有仕合奉存候、今後 王事ニ盡力勤勢御誓文奉體、天地神明ニ誓、子孫永世違背無之、謹テ奉親書 如件。

慶應四年戊辰五月十六日

山名主 水助

太 政 官 山名義 路家記

義 濟

高壹萬五拾三石餘 込高共

池 田 彈 正

從前德川氏附屬ヲ以令領知候處、其方儀慶喜反逆ニ不從、大義ヲ存シ、上京志願之趣被 聞食届、依之、本領安堵、是迄之通 被 仰付候事。

六月八日 印 官中 日記

○官中日記ニ、右三月以後上京故、文意省略トアリ。

○高六百石

小 堀 數 馬

從前德川氏附屬ヲ以テ令領知候處、其方儀慶喜反逆ニ不從、大義ヲ存シ候段達 叡聞、神妙之至被 思召、依之、本領安堵、 是迄之通被 仰付候事。 官中 日記

○本件ノ達書、三條ヲ舉ケテ其例ヲ示シ、餘ハ祿額、姓名ノミヲ收録ス、又其申請書ノ辨事局記、辨事局叢書、行政官記ニ 散見スルモノヲ下ニ附録ス、但シ十月以後ハ行政官記ノ原書ヲ佚ス、按スルニ、本月二十五日、江戸鎮臺モ亦旗下士復祿 ノ事アリ、其餘ヲ參看スヘシ。

○本日宣達

高一萬二千七百四十六石餘込高共	山崎主稅助	高八千石	板倉小次郎
高七千七百九十七石餘込高共	三枝政三郎	高七千三百七十九石餘	石川 靱 負
高七千二百三十三石餘込高共	水野國之助	高七千二百三十三石餘込高共	永井 左 門
高七千三石餘	酒井富之助	高六千二百二十八石	花房助兵衛
高六千石	朽木和泉守	高六千石	齋 藤 宮 内
高五千七百八石餘込高共	上田錄次郎	高五千七百石	水野但馬守
高五千七百石込高共	大給 求 馬	高五千五百七十六石	船越柳之助
高五千五百石	青山 内 記	高五千五百石	柴田七九郎
高五千三百八十四石餘込高共	武田 兵 庫	高五千二百九十六石餘込高共	一柳信次郎

高五千二百四十三石餘込高共	小出主水	高五千二百三十二石餘込高共
高五千五百石餘込高共	青山主水	高五千五百二十二石餘
高五千十四石餘込高共	高木伊勢守	高五千三百石餘
高五千石	畠山前侍從	高五千石
高五千石	最上駿河守	高五千石
高五千石	松井信濃守	高五千石
高五千石	巨勢鑛之助	高五千石
高四千七百七十石餘	近藤利三郎	高四千八百十四石餘込高共
高四千五百三十一石餘込高共	朽木主計助	高四千七百石
高四千二百石	甲斐莊帶刀	高四千五百二十九石餘
高四千二十二石餘込高共	堀田主計	高四千四十九石餘
高四千石	瀧川斧太郎	高四千八百石餘
高三千五百五十八石餘込高共	八木但馬守	高三千八百石餘込高共
高三千五百石	水谷主水	高三千五百石
高三千四百八十七石餘	淺野友三郎	高三千五百石
高三千二百六十六石餘込高共	根來榮三郎	高三千三百二十二石餘込高共
高三千二百二十二石餘	大河内孫三郎	高三千二百石
高三千五十二石餘込高共	畠山侍從	高三千百十五石
	淺野隼人	高三千三十四石餘込高共

戶川捨次郎
松平與次郎
平野内藏助
戶川主馬助
小笠原加賀守
内藤加賀守
青木九十郎
大澤侍從
仙石右近
石河藏人
藤懸左京
能勢日向守
蒔田鑓太郎
一色丹後守
佐野豐太郎
片桐銀三郎
本多邦之助
長谷川都五郎
金森左京

高三千十五石	朽木勇太郎	高三千石
高三千石	池田右近將監	高三千石
高三千石	酒井鉄三郎	高三千石
高三千石	松平主稅	高三千石
高三千石	池田鎗三郎	高三千石
高二千七百石	知久左衛門五郎	高二千六百六十石込高共
高二千六百石	莊田八十之助	高二千五百石
高二千五百石	市橋傳七郎	高二千二百三十五石餘
高二千二百六石餘込高共	京極侍從	高二千二百石餘込高共
高二千二百石	京極要之助	高二千三十九石餘込高共
高二千二十八石餘込高共	青木寅之助	高二千三十二石餘込高共
高二千石	桑山舍人	高二千石
高二千石	松井伊織	高二千石
高千八百石	榊原越中守	高千七百三十九石餘
高千七百三十四石餘込高共	小出大和守	高千六百石
高千五百四十一石餘込高共	小出播磨守	高千五百三十三石餘
高千五百石餘	多羅尾織之助	高千五百石
高千五百石	松浦左京	高千五百石
高千五百石	安部政太郎	高千五百石

松井備中守
五島銃之丞
菅沼直七郎
酒井織部
秋月幾三郎
内藤甚郎
久留島修理
竹中萬壽藏
小出織部
内藤甚十郎
永井大之丞
谷藏人
伊東鑑之助
土方兼三郎
大島鐵太郎
日野大學
戶川志津摩
谷錄藏
島田新三郎

高千四百四十五石込高共	本多岩次郎	高千四百石	設樂帶刀
高千四百石	長澤内記	高千三百三十六石込高共	中條兵庫
高千三百石込高共	牧相模守	高千三百石	今井彦次郎
高千二百石	桑山修理	高千二百石	織田熊三郎
高千二百石	村越三十郎	高千五十石餘	安部主殿
高千四十二石餘	中島與五郎	高千石餘	角南哲三郎
高千石餘	小出助四郎	高千石	片桐内藏助
高千石	小笠原兵庫助	高千石	丹羽小左衛門
高千石	櫻井鏗之助	高千石	伊東常五郎
高千石	安部關次郎	高千石	武島顯之助
高千石	小堀權十郎	高千石	桑山録太郎
高千石	渡邊嘉一郎	高千石	渡邊鎮之丞
高八百石	雀部鍊之丞	高七百五十四石餘	根來道太郎
高七百二十五石餘込高共	青山内膳	高七百二十五石餘込高共	矢橋子之太郎
高七百石	山口藤五郎	高七百石	朽木五郎左衛門
高七百石	織田主計	高六百石	池田福次郎
高五百石餘	藤懸伊織	高五百石	織田平太郎
高五百石	安部留之丞	高五百石	藤懸源之助
高五百石	多羅尾左京	高五百石	梶野槌太郎

高四百四十四石餘  
高三百石

松平太郎左衛門 高三百二十一石餘  
榊原清記 無高

松平上總介  
米良主膳

○六月八日宣達

高九千七百九十八石餘込高共  
高三千七十七石餘込高共  
高二千石  
高千石餘  
高百四十四石

横田權之助 高五千石  
木下辰太郎 高二千三百六十石  
曾我勝太郎 高千五百七十六石餘込高共  
土方靱負 高五百石  
土岐玄又

關重二郎  
森宗兵衛  
半井大膳大夫  
曾我豐之丞

○諸家申請書

奉歎願候覺、

德川慶喜將軍辭職 御許容被 仰出候上ハ、御聖業被爲立候様、是迄之支配地所速可差上ハ勿論之義、然ルテ彼是延引罷在候テモ、寛大之 御所置可被 仰付之處、會桑ヲ先鋒トシ、闕下ヲ奉犯勢、大逆無道之次第巨細御書付之趣奉拜見、絶言語、何共奉恐入候、乍併譜代臣下之モノタリ共悔悟仕、朝廷之御用ニ盡忠之志有之輩ハ、寛大之 思食ニテ御採用モ可被爲在下之御義、冥加至極難有奉感佩候、就テハ私義乍身不肖元來 天下之御爲筋九牛一毛之御奉公成共仕度罷在候義、且是迄附屬之者共モ有之候之間、乍恐 朝廷奉仕、尙此上乍不及 皇國之御爲筋、如何様ニモ勉强仕度奉存候間、何卒御仁惠之以 思食、相應之御奉公被 仰付被下置候様、一向奉歎願候、此段宜御執成奉願候、誠恐誠惶敬白。

辰正月廿六日

丹後久美濱元縣令

宮崎達治郎

○本條批紙ヲ佚ス、後批紙ヲ載セサルモノハ皆之ニ倣フ。

復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日

○乍恐奉歡願候口上覺、

別紙之通主人駿河守奉言上候儀、誠ニ以不得止候次第、賤臣共始一家中之者共舉テ慨歎仕、奉恐入候、尤兼々申諭候趣モ御座候ニ付、今般賊徒共迫京圻候砌、不取敢乍恐以賤臣奉窺 天機、其後在京仕居候處、今般駿河守猶又申付越候ニ付、羸卒共召連上 京仕候間、身分相應犬馬之 御用被 仰付下度奉歡願候間、御指揮之程乍恐奉仰願候、以上。

二月 四日

最上駿河守家來

楯岡 小市郎

鳥越準左衛門

別紙、

今般 臣義連祖先之由緒被爲 聞食入、上 京可仕旨、舊冬廿一日被 仰出候段、誠以冥加至極難有仕合奉畏候、然ル處昨春來ヨリ病痾ニテ引籠居候得共、押候テ江戸出立、早々上 京可仕心得ニ御座候之處、不圖モ重病再發仕、何分ニモ急速出立モ無覺束、就中上 京及遲緩、御奉公モ不仕候テハ是迄赤心之志モ貫徹不仕、却テ重罪奉恐入候得共、不得止候次第、乍恐御垂憐奉願上候、依之、爲名代以 賤臣小市郎、準左衛門 當分之間御近衛爲仕度奉存候、不御容易御時節柄之御事ニ候得ハ、何卒小臣相應犬馬之御用被 仰下置候得ハ、乍病中御朝恩之程幾許難有奉存候、誠恐誠惶謹言。

正月 廿一日

最上駿河守

○義連四月二十二日京ニ至ル。

○私家之儀ハ鎮西八郎爲朝之末胤ニ御座候處、謂有之、永當國ニ住居仕、甲斐之武田信玄ニ屬、千五百貫之地頭ニ罷在候、同

家滅亡後暫潛伏罷在、其後徳川へ御國政御委任相成候頃、先祖丹後守徳川へ寄屬仕、三ヶ年一度宛幕府へ參勤、將軍一調後、直ニ在所へ引取來候、尤是迄於關東ハ交代寄合ト相唱候、總テ柳間外様大名竝之取扱ニテ、當國目代取締罷在候、然ル處御大政御回復ニ相成候ニ付、先般家來之者上京爲仕、奉伺 天機、其後早速私上京可仕之處、病氣ニ付不取敢悴益太郎儀上京爲仕候間、何卒寛洪之御趣意、以相當之御用被 仰付候様、可然御執奏奉願上候、以上。

信州伊奈那山吹 高千百十三石餘

座光寺 右京

二月 六日

○私先祖以來徳川家ニ從隨仕、江州甲賀郡之内ニテ高五千石ヲ賜リ、勤務罷在候處、私身ニ相成、長病相煩、萬一之報酬モ不仕候上、今般主人ト仰候慶喜奉犯逆罪、重々奉恐入候次第御座候、御追討使御東下被成候上ハ、慶喜同様罪ヲ 御軍門ニ奉待候儀奉存候得共、今度慶喜ヨリ近畿關西ニ知行所有之面々ハ、勝手次第引移可申、則謹慎之一効ニモ可相成トノ達シニ御座候間、愚昧之私儀、義理辨別不仕候得共、何分ニモ前件知行所へ引越申度奉存候、就テハ相應之 御用向被仰付、先祖血食仕候ハ、難有仕合奉存候、然ル處長病相煩候私、迺モ御奉公難仕、實子惠之助當辰之廿一歳ニ罷成候者御召仕被下置候様奉願候、右出格之 御仁惠ヲ以御評議被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段奉歡願候、以上。

二月 十五日

内藤加賀守

忠善花押

○批紙

○追テ何分之儀可被 仰出ニ付、差扣可罷居候事。

淺野隼人

淺野友三郎

右之者、此度江戸ヨリ罷登京著仕候旨、私迄申出候ニ付、不取敢御届仕、其後得ト心底相糺申候處、兼テ家來トモヨリ申出仕候通リ相違無御座、私へ附屬奉勤 王度段、兩人共別紙通リ夫々歎願仕候付、其儘差出申候、何卒歎願之通速ニ御許容相成候様、於私モ奉願候此段申上候、以上。

二月廿八日

安藝新少將

○批紙

淺野隼人、淺野友三郎歎願之趣、追テ可被及 御沙汰候間、其内差扣罷在候様被 仰付候事。

○別紙二通

不肖之私

御先祖 傳正院様竝 御代々様蒙御餘澤、先祖壹岐守長恒、赤穂ヨリ分地以來私迄七世之間、家族並家來共扶助仕罷在候處、今般天下之御政典御一新、朝政復古之御場合臨、當正月以來徳川慶喜之次第、於微臣モ謝罪可仕様無之、深奉恐入候、勿論普天之下、億兆之人民、非 王臣者無御座、卑賤之私共元來奉背 朝廷候存心秋毫モ無御座、早速登京謝罪、奉伺御用途度奉存候得トモ、遠境隔絶之儀不任志念、依之、知行所詰家來共ヨリ不取敢赤心言上爲仕置候通御座候、今般上京仕奉願上候趣旨ハ、朝廷奉戴御奉公仕度候得共、不才之賤身、辻モ一己之微力ヲ以 朝廷御用途難奉勤奉存候間、何卒 御本家附屬、奉盡報 國之微忠志願ニ御座候、此段御許容被成下、 朝廷可然様被 仰上、祖先ヨリ血食之采地没收、家名廢潰不仕様御取成被下度、泣涕奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年二月

淺野隼人印

長發書判

淺 紀伊守様

○ 故赤穂 長直公 御代播磨國加東郡之内、高三千五百石、先祖佐兵衛長賢ニ初テ御分知被成下、其以來 御屋形様以御餘光、私迄八代之間、聯綿相續仕、雖有仕合奉存候、然處今般 御政典御一新之折柄、當春以來徳川慶喜之次第、於私モ深奉恐入候、依之、早速上京謝罪可仕處、遠隔之儀故不取敢知行所詰家來共ヨリ、先頃歎願爲仕候通聊相違無御座候、乍併微少之私故 御屋形様へ附屬相願、身分相應之勤 王仕度志願ニ御座候、右赤心之情實、何卒 御憐察之上可然御執成被下度、伏テ奉歎願候、以上。

私家筋之儀ハ

慶應四戊辰二月

淺野友三郎印

書判

淺 紀伊守様

○ 乍恐奉歎願候口上覺、

一乍恐奉歎願候、賤臣之綱祖先ハ、人皇五十九代宇多天皇第七 皇子敦實親王八世孫、近江國ニ住シ、佐々木源三秀義ト稱候、嫡男定綱、四男信綱ヨリ四世之孫義綱、始テ在名ヲ以族稱ニ仕候、其後十七世兵部少輔宣綱迄、世々勤 王仕、奉蒙敍爵難有仕合奉仰上候、然ルニ徳川氏被 任大將軍候後、武臣之面々朝覲被廢候儀、先人智綱忿恚仕、居邑朽木ニ退、徒ニ被準萬石以上、隔年幕府へ交代仕候得共、祖先以來勤 王之遺志不失様、於居邑 皇都御爲山中關門相守罷在候故、敍爵ニ不被加候義ハ固ヨリ、二百餘年之間近畿乍在不奉拜天日、空ク庶流之輩ヨリ下等ニ列候段、世世多年宿鬱之賤情、乍恐 御垂憐被成下候様奉伏願候、然ルニ何之幸歟、天運今日王政御復古被仰出、斗筭之賤臣近ク 帝京ニ到候儀、祖先之輩へ對シ、泣血之情不可忍候間、此上乍恐微力之賤臣ニ候得共、奴隸之 御用途ニ被 召出、親ク奉昇 禁闕候様被 仰

付下候ハ、祖先以降累世之父祖ニ對シ如何計難有奉存候、右奉歎願候寸情 御恩免被成下候ハ、纔采邑之小民等迄奮起  
仕、奉仰 王化、水火之 御用途ニ奉應候様、千々萬々奉伏願候書餘泣血之臣情御垂憐被成下候ハ、生死ヲ替難有奉仰上  
候、誠恐誠惶頓首百拜。

二月廿九日

源之綱 朽木主

私家之儀ハ

宇多天皇五代後胤佐々木左近將監成頼六代孫、佐々木左衛門佐定綱五男、馬淵左衛門尉廣貞三男、堀部左近大夫成綱八代  
孫、堀部左門親真嫡子曲直瀬正盛、永正四丁卯年九月十八日山城國ニテ誕生、足利學校ニテ大明ヨリ歸朝之與山人導道ニ  
醫術學ヒ、年月不相知、足利將軍義輝ヲ療治、平愈ニ付拜領物仕、永祿九年毛利元就ヲ療治、平愈仕、同人依奏聞、天正二甲  
戌年十一月十七日 禁中へ被爲 召、拜 龍顏、拜診 天脉被爲 仰付、度々御療治、無類之効驗 勅定ニテ每度御褒美被  
成下、桐之 御紋、朱傘拜領仕、今以相用申候、其後三代目兵部大輔親清儀、文祿元壬辰年、後陽成院様累代之舊勳ヲ被爲  
遊 寂感、橘姓今大路氏ヲ賜リ候、

一本朝屠蘇之儀ハ、嵯峨天皇様御時、弘仁二年ヨリ相初リ、其後兵亂ニテ應仁年中ヨリ終ニ相止候處、正親町院様ヨリ  
正盛へ屠蘇之法式秘授蒙勅許、夫ヨリ毎年屠蘇白散唯今以年々獻上仕來候ニ付、私家代替ニテ始テ屠蘇白散獻上仕候節  
ハ、禁裏ヨリ御卷物拜領仕候代々家格ニ付、私儀モ去ル安政六未年十二月家督、初テ獻上仕候節、紅白御卷物拜領仕候、  
一年月不相知、山城國乙訓郡灰谷村、灰方村、長峯村、愛宕郡松ヶ崎村、市原村之内ニテ知行五百石拜領、京地拜領屋敷新町  
通り中立賣下ル仕丁町ニ御座候、

一年月不相知、二代將軍供ニテ關東へ罷下リ、京、江戸、隔年交代參勤仕候處、寛永六巳年ヨリ京都へ之交代 御免、私家代  
替ニテ典藥頭被 仰付候處、爲御禮代々上京仕來候ニ付、去ル文化十四丑年三月、中務大輔正庸上京、拜 龍顏、奉診

天脉、先格之通綾三卷拜領仕候、其後二代多病ニテ上京不仕候得共、私儀ハ今般 朝政御一新、御變革被 仰出、御寛大  
之御旨趣難有奉拜承候ニ付、上京、身分相應之御奉公、勤 王奉命仕度赤心ニ御座候、

一慶長十三申年上總國武射郡烏喰村、中臺村之内ニテ知行七百石頂戴、都合千貳百石拜領仕居候處、今般山城國拜領、村々  
上地被 仰出候哉之趣承リ、奉驚入候、同勤半井大膳大夫儀モ山城國ニテ知行五百石拜領仕居、京都拜領屋敷モ同様御  
座候、舊來同勤之典藥頭ニ御座候得ハ、中務大輔知行モ大膳大夫同様上地御差許被下置候共、替地ニテ被下置候共、本領  
安堵仕候様伏テ奉歎願候、此段宜御執成之程偏奉願上候、以上。

典藥頭

今大路中務大輔

慶應四辰年二月

辨事 御役所

○二月二十九日批紙

山城國上知之儀 御停廢ニ付、所持之分是迄之通ニ候事。

乍恐奉歎願候、

先祖和氣朝臣清麿微忠ヲ以奉蒙殊恩、洛北大原郷之功田ヲ子孫ニ相傳、代々御堂上相勤居候儀ニ付、多端之次第、且關東へ  
移住被仰付候後モ毎々上京相勤候儀等ハ、粗先達テ奉申上候、抑今度之御時宜ニ就テハ奉伺 天機、隨身之御用相勤度、直  
様參上可仕、然ル處昨年十一月中ヨリ持病相惱、荏苒心外及遲參、誠ニ以恐入不堪遺憾候、此中始テ得微愈候ニ付急參上仕  
候儀ニ御座候、不肖之私微弱之至候得共、何卒赤心祖宗來之微衷相襲度、今般御一新之折柄何等相應之 御用被 仰付被  
下候者、難有仕合奉存候、依テ此段奉願上候、以上。

辰 二月

半井大膳大夫



○二月二十四日批紙

追テ何分可被及 御沙汰候條、其内差控罷在候様被 仰付候事。

私末家要之助儀兼テ江戸表へ住居罷在候得共、此度 大政御一新ニ付江戸表爲引拂、去ル三日發足、昨日上著仕候、同人儀小身且不肖之者ニ御座候得共、相應之 御用被 仰付、如何様ニモ御使用被成下候様仕度、此段奉願候、以上。

三月十二日

京 極 飛 驒 守

○ 今般 王政御一新被 仰出候ニ付、朝命之趣謹テ遵奉仕候、殊ニ私系譜之儀者別記之通清和源氏六孫王經基ヨリ、顯然トシテ累代永續仕、且又中興 尹良親王之御由緒モ有之候ニ付、別テ勤 王之儀從來家來共ヘモ精々教諭仕來候處、尙更朝命之趣彌以遵奉仕度赤心ニ罷在、已ニ先般鎮撫 御總督 岩倉殿へ大垣表迄家來ヲ以奉伺 御機嫌、且在所ヨリ人數差出、御供爲仕度、重役共へ申付置、尙又信州伊那郡浪合、帶川、心川、小野川四箇所關門以來、從 朝廷改被 立置候 御關所ト相心得、嚴重ニ守衛可仕旨 御總督様ヨリ 御沙汰之儀モ御座候ニ付、是又人撰加番等申付置、私儀者中津川宿 御本陣ニオイテ自身 御機嫌相伺、夫ヨリ爲伺 天機上京仕罷在候處、在所表ヨリ申越候者御總督様御發行ニ付、以重役於鹽尻宿奉伺御用向願書差上、尙又諏訪表 御本陣へ人數拾七人召連重役罷出、御供仕度段精々奉懇願候處、前件四口 御關所手厚ニ守衛仕候上者、人數差出候ニ不及旨蒙 仰候ニ付、御沙汰ニ隨人數召連歸邑仕、別段人撰之上猶又加番差出、一際嚴重警衛仕候儀御座候、全體急速上京可仕之處病氣罷在、心外運引仕候段奉恐入候、實以小身微力之私、不行届之儀ニ者御座候得共、身分相應之御奉公可仕、且 尹良親王御陵今般相改御造營被 仰付竝 御靈社御修復等仕度奉存候、此段御採用宜執奏奉願上候、誠恐誠惶謹言。

信州伊那郡阿島

慶應四戊辰年二月十三日

知久左衛門五郎

辨事傳達所 御役所

○批紙

被 聞食置、追テ何分之儀可被 仰出候ニ付、差控可罷居候事。

○系譜略傳、

私先祖之儀者 六孫王經基公五男從五位下相模守滿快ヨリ相續仕、代々信州知久神峰居城罷在候、六代之孫知久左衛門五郎信貞、正嘉二年正月六日將軍 宗尊親王御的初等相勤、五代之孫知久四郎左衛門入道祐超奉屬南朝、南帝 御授與之錦之母衣竝車御紋之 御旗、將軍宮 尹良親王ヨリ拜領仕、家之紋車輪ニ改、唯今ニ相用、錦之 御母衣モ今以寶物ニ御座候、浪合關所勤番被 仰付、此關ヨリ八町東ニテ 崩御被遊、御所平ト相唱、尹良親王御靈社奉造營、今ニ三月十五日御祭禮仕候、七代之孫從五位下大和守頼元、弘治二年武田信玄ト合戰仕、防戰之術盡テ知久神峰城沒落、駿州へ罷越、今川義元寓居、其後織田信長へ附屬、次男從四位下大和守頼氏信州へ罷越、徳川家ヨリ天正十年七月廿六日本領之内六十九ヶ村賜之、知久神峰居城仕、同十一年六月朔日領分文永寺安養寺之事、後花園院御宇、御由緒他ニ異リ候旨ヲ以再興神妙被 思食、理性院法流可爲相續、彌御馳走肝要之旨被 仰出候、爲別忠則四品之事被成下候口宣竝萬里小路大納言意房卿書翰、上卿中山中納言殿宣旨、藏人左中辨藤原光房奉、右之通頂戴之、同十三酉年十一月遠州於濱松頼氏四十五歳不慮生害仕、嫡子萬龜信州本領之内三千石賜之、阿島ニ居邑、慶長十九寅年大阪陣之節信州浪合關之警固被申付、元和六年九月交代寄合、浪合、小野川、帶川、心川四口之關所支配竝要害爲手廻、預所二拾二箇村支配可仕旨被申達、關所勤番人荷物扶持米附送リ人足三役免除、木曾助郷除役、知行所同様ニ被申付、猶又在所役場之儀相心得候様達シ有之候、右交代寄合之儀者私筆頭ニテ、小笠原兵庫介、座光寺右京同列ニ罷在、二ヶ年ニ一度四月參府、柳ノ間大名之取扱、一調之上同月暇賜リ直ニ

歸邑仕候、依之家内不殘往古ヨリ在所住居ニ御座候テ、四口關所警衛、信州取締心得罷在候、然ル處小身之儀ニ付、古來ヨリ關所用荷物往來運送人足預所、村々知行所同様用辨相勤來候處、去ル嘉永度内輪混雜之儀有之、預所高八千石餘支配引上相成候、右四口之内浪合關之儀者 尹良親王御陵鎮座之御場所柄、殊ニ伊奈街道尾州ヨリ京都へ之要路ニ付、大切ニ相心得罷在候得共、方今之形勢手薄ニテ御要害ニ相拘リ心配仕候、乍併精々盡力守衛仕候儀ニ御座候、以上。

信州伊奈郡阿島 高三千石

知久左衛門五郎源頼謙拜

慶應四戊辰年三月十三日

辨事傳達所 御役所

高二十十石

青木寅之助

私儀

積年江戸住居罷在候處、乍恐 大政御復古御一新之御時節到來仕、恐悅至極ニ奉存候、右ニ付速ニ爲報國 上京仕、聊奉盡微忠度、舊臘以來憤發罷在候得共、爲奸徒故障被致、何分出足不任心、漸去月十五日江戸表出立仕候處、東海道筋川々差支有之、當十三日著仕候、是迄賊徒隨從罷在候様可奉蒙 御疑惑哉ト奉恐入候得共、素ヨリ勤 王之志ハ勿論、縱令徳川氏何様之下知有之候共、斯迄心願相立候上ハ毛頭他念無御座候、且又奸徒共暴動異變有之節ハ、微力ニハ御座候得共、誠義之諸侯ニ相屬、一途ニ奉抽誠忠度心願ニ御座候間、是迄運延之罪乍恐寛大之 思召ヲ以御宥恕被成下置、此上如何様之御奉公ニテモ被爲 仰付候様、伏テ奉歎願候、爲後證書奉差上候處仍如件。

辰三月十七日

青木寅之助

藤原義權花押

一高二千二百三十五石餘攝津河内之内

近江

養祖父 竹中大學 實祖父 花房數馬  
父 竹中主水 實父 花房大膳

竹中萬壽藏

辰三十四歲

今般御復古被 仰出候ニ付テハ、家祖以來累代奉蒙 天恩不奉堪報勿論、勤王盡忠之愚衷ニテ急速上京、昨十七日參著仕候、意中 御憐察被成下、身分相應之御用被 仰付被下置候様奉懇願候、宜御執成奉願候、以上。

辰三月十八日

竹中萬壽藏

○批紙

追テ可被及 御沙汰候間、差扣可罷在候事。

○奉願口上書、

一 主人都五郎儀去十六日夕大津驛迄罷登候得共、直様上京仕候儀恐多、大津驛ニ相扣ヘ罷在候、主人家之儀ハ北條家頃ヨリ聯綿相續仕、元ハ壹萬石餘之所領ニ御座候得共、何分微力ニテ被相奪、漸々三千百十五石領來リ、右乍舊家小身者之儀ニ付、其以來時之權家ニ相屬シ來リ、殊ニ慶長以來 御規定ニテ 朝廷へ直ニ御奉公仕候儀不相成、又徳川家相屬シ居候得共、今般 御一新之折柄、實本懐之時機ニ相成候ニ付、何卒御奉公仕、乍微力小身本志之通飽迄モ粉骨忠勤仕度奉歎願候、何卒速ニ 御沙汰被成下、本懐之通リ御奉公被 仰付被成下度、只管奉懇願候、以上。

長谷川都五郎家來

三月十九日

土方善四郎印

吉田與三右衛門印

○批紙

復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日

追テ何分之儀被 仰出候ニ付、都五郎上京之上差扣居候様被 仰付候事。

左京大夫分知 是迄交代寄合

高貳千石

伊東 鑿之助

鑿之助分知

高千石

伊東 常五郎

右兩末家兼テ奉願候通入京聞食被置下、則昨廿一日上著仕、清水下左京大夫抱屋敷ニ罷在候、何卒身分相應御奉公被仰付被下置候様仕度、此段御執 奏奉願候、以上。

伊東左京大夫家來

長 倉 德 助

三月 廿二日

○批紙

追テ何分可被 仰渡候間、其内差扣可罷在候事。

私分家 高五千石

小 出 主 水

右主水儀今般私家來之者附屬、從江戸表罷登、於駿府 大總督様へ勤 王赤心奉歎願候處、被成下 御聞届、奉窺 天氣、猶亦入京 御免之御印鑑御下ケ被成下、以 御蔭上京仕、主水始私モ冥加至極難有仕合奉存候、就テハ乍小身 尊王爲國家如何體ニモ身分相應之御奉公勉勵仕度段、主水只管奉願候、依之、乍恐何卒急速奉蒙 御沙汰候様仕度、此段偏奉願上候、以上。

三月 二十三日

小 出 伊 勢 守

○批紙

申出之趣被 聞食置候、追テ何分之儀可被 仰出候ニ付、其内差扣可罷居段、 御沙汰相成候條、此段可相心得候事。

今般私儀本家伊勢守家來之者附屬罷登、於駿府 大御總督様へ勤 王赤心奉歎願候處、被成下 御聞届、奉伺 天機、入京御免之、 御印鑑御下ケ被成下、以御蔭上京仕、冥加至極難有仕合ニ奉存候、就テハ乍小身、爲國家如何體ニモ身分相應之御奉公盡力仕度、只管奉願候、何卒急速奉蒙 御沙汰候様仕度、此段偏ニ奉願上候、以上。

三月

小 出 主 水

○批紙

申出之趣被 聞食置候、追テ何分之儀可被 仰出ニ付、其中差扣可罷居候事。

今般 王政御復古被 仰出候ニ付テハ、私儀累代奉蒙 天恩候儀、勤 王之外他念無御座、彌 朝命遵奉仕度赤心ニ御座候テ、此度上京仕候、何卒身分相應之御用向被 仰付被下置候様奉願候、右之趣幾重ニモ御憐察御許容被成下候者、難有仕合奉存候、此段宜敷御執 奏被成下候様奉願候、以上。

三月 廿三日

武 島 顯 之 助

○批紙

追テ何分之儀可被 仰出ニ付、差扣可罷居候事。

私知行所近江國中賀郡下駒月村、高五百石、相模國大住郡三ノ宮村高五百石御座候處、近江國知行所之儀、去ル正月中山内

土佐守殿、當分御預所ニ相成候趣、同所村役之者ヨリ申越候儀ニ御座候、誠ニ以奉恐入候儀ニ御座候得共、御憐愍ヲ以知行所之儀ハ是迄之通被成置、相應之御用被 仰付被下置候者難有仕合奉存候、此段奉歎願候、宜御執成之程 奉願候、以上。

三月 廿三日

武島 顯之助

○批紙

取締被 仰付置事ニテ被召上候譯柄ニハ無之、總テ知行所之儀ハ追テ何分可被 仰出候事。

○

先般御布告相成候 御趣意奉謹承候ニ付、家元主計助ヲ以 朝觀之儀奉願、不取敢去月四日江戸出立、同廿三日京著仕、翌廿四日乍恐奉伺 天機度段奉願候處、追テ 御沙汰可被 仰出旨、蒙御付紙候ニ付、奉待候處、近江國徳川旗下知行所取調土藩へ御委任相成候ニ付、私采地同國村々共同藩支配ニ相成候ニ付テハ、弊身住地モ無御座切迫仕候ニ付、私相應之御用モ被 仰付候ハ、盡微力 朝勤勉勵仕度奉懇願候、就テハ出格之以 御憐愍采地之儀モ前々之通被下置候者、難有仕合奉存候、此段御許容被成下候様、伏テ奉歎願候、以上。

三月 廿四日

朽木 勇太郎

○三月二十九日批紙

采地之儀ハ追テ何分之趣、可被 仰出候事。

○

積年來向陽ノ微衷ヲ懷キ、涓埃之報效仕度素願御座候處、先般歸邑仕候者早々上京可仕旨奉蒙 御沙汰、冥加至極感銘仕候、甚以寡少之人數ニテ何共奉恐入候得共、在所表ニ罷在候人數召連上京仕候間、何卒如何様之御場所ニテモ身分相應之御用被爲 仰付候者、乍不及粉骨勉勵仕、御鴻恩之萬一ヲモ奉報效、歸順之實效ヲ相顯候様仕度、何卒寛大之 御仁徳ヲ以

私儀

御聞届被成下候者、難有仕合奉存候、誠恐誠惶謹言。

慶應四戊辰年三月廿四日

堀田五郎左衛門印

○批紙

追テ何分可被及 御沙汰候間、其内差扣可罷在被 仰付候事。

○

奉歎願候口上覺、

私儀

近江國蒲生、野洲、栗太三郡之内ニテ高六千石知行仕居候儀ハ、全 天朝之高恩ニ御座候儀今更奉申上候迄モ無御座候處前幕府從前之醜令トハ乍申、是迄奉對 天朝寸効微忠ヲモ奉盡罷在候儀、誠ニ以無冥加、奉恐入候儀ニ御座候處、就中去年十二月 御政令 御一新被爲 在候 御盛典ヲ始、去ル正月三日逆賊 九重ヲ奉襲候御變動之儀ニ付テモ、關東ニ罷在、不得止儀トハ乍申、迅速走登リ 御警衛之寸忠ヲモ奉盡候處、今迄賊地ニ因循罷在候儀ハ、臣子之名分不相立而已不成、不埒千萬多罪深奉恐入候得共、何事モ既往之儀ハ御咎不被爲在 御寛典ニ取籠リ奉歎願候、何卒登 京運滯、臣子之節義取失、天朝ヲ度外ニ奉置候次第ニ落入候罪狀之儀、出格寛大之 御仁恕ヲ以 御宥免被成下置候様、泣血奉歎願候、然ル上ハ賤拙軟弱之小身者ニハ御座候得共、數千歳ノ 朝恩萬分一ヲモ奉報謝度、殊ニ近古御慶典被爲在候 御親征 御行幸之 一大御美事 御復古被爲在候折柄、一時半刻モ安閑罷在候テハ聊之臣節モ不相立儀ニ御座候得ハ、假令如何體之御用蒙 仰候共、必死ヲ以相勤申度奉存候ニ付、何分御用之程速ニ被 仰付被下置候様、重々奉懇願候、恐惶謹言。

辰三月廿五日

朽木 和泉守

綱美花押

辨事局 御役所

復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日

○三月二十八日批紙

申出之趣被 聞食置候、追テ何分之儀可被 仰出候ニ付、其中差扣可罷居候事。

○再請書

奉御届申上候口上覺、

去二月廿四日江戸發足、興津川出水ニテ滯留、猶又大井川満水ニ付藤枝宿近村ニ逗留罷在候内、大總督宮様駿府迄 御進發被爲在候趣傳承仕候間引返、以誓書 御本陣へ推參仕、乍恐 天氣奉相窺候處、迅速登京可仕 御沙汰ヲ蒙リ、通行御差許之御印鑑頂戴、重々難有仕合奉存候、右印鑑早速可奉返納處、遲引之段奉恐入候、右 御印鑑壹通並誓書之寫相添奉差上候、就テハ誓書面之通盡力御奉公仕度候間、以 御憐愍是迄之通知行所支配被 仰付候様、一向奉歎願候、以上。

辰 四月 二日

朽木 和 泉 守

綱 美 花 押

辦事 御役所

○批紙

追テ何分之儀可被 仰出ニ付、其内先差扣罷居候様被 仰出候事。

○誓書寫ハ之ヲ略ス。

奉願上口上覺、

微臣儀

去ル二月十九日以書付歎願、且所勞ニ付登京延引ニ相成候儀奉言上置、同廿五日江戸出立仕、東海道小田原宿へ著仕候處、官軍 御進發先ニテ人馬繼立ハ不及申、隣驛等迄繁雜致居候ニ付、容易ニ通行モ難仕、不得止立歸、品川驛ヨリ乗船仕、三

月十八日志州鳥羽浦へ上陸仕、去ル廿二日上著仕、不取敢御届奉申上候事ニ御座候、百般 御一新ヲ始、千歳ニ稀成 御機會ヲ奉傳承候ニ付テハ、單騎西上、速ニ驅付、臣節取失罷在候罪狀可奉謝處、斯遲滯仕候段、今更奉御詫候ニ一言無御座、何卒出格之以寬太 御仁恕前文之罪狀幾重ニモ御宥免被成下置候様奉歎願候、然ル上ハ兼テ奉願置候通、御親兵隊ニ御差加被下置候様仕度候、左候ハ、是迄組立置候銃卒竝ニ知行所拾五ヶ村、高五千石内之農民ヲ以、私始家來之者必死ヲ窮メ、數千歳之 天恩萬分一ヲモ奉謝度、此段只管奉懇願候、何卒小臣之微忠御採用被成下、速ニ 御許容被成下候様奉願上候、以上。

辰 三月 廿五日

大 給 求 馬

○覺、

一銃隊 貳拾人

一足輕銃隊 貳拾人

一夫人 拾人

一小銃 四拾挺

右之通召連登 京罷在候、此段御届奉申上候。

大 給 求 馬

歸順之儀奉歎願候處、願之通被 仰付、冥加至極難有仕合奉存候、依之、不取敢上京、昨廿六日著京仕候付、此段御届奉申上候、此上ハ隨身之 御用被 仰付候ハ、抽忠節、幾重ニモ 王事ニ奉盡務度奉存候間、乍恐猶宜御執 奏奉願上候、誠惶誠恐謹言百拜。

三月 廿七日

多 羅 尾 左 京

○批紙

復古記 卷八十五(第二) 明治元年五月十五日

被聞食置候、追テ何分之儀可被 仰出ニ付、先差扣罷居候事。

乍恐奉歎願候口上書、

今般御一新之折柄、當主宮内若年且病氣罷在候ニ付、不取敢私儀上京、尊 王忠勤仕度、去月廿八日江戸表出立、於府中驛大總督宮様へ歎願仕、兼テ家來ヨリ太政官へ奉願候通、聊無異心 朝覲盡力仕度段御請奉申上候處、通行 御免之御證鑑頂戴、去ル十六日江州陣屋表へ著仕、即日入京之儀奉伺候處、上京之上歸順實効相立、御沙汰可奉伺旨以御附紙被 仰渡奉畏、去ル廿二日京著仕候、未熟不肖之身ニハ御座候得共、何様ニモ勉勵勤務仕度候間、相應之御用被爲 仰付被下置候様奉懇願候、當今之御時節、偷安忘情罷在候テハ、深奉恐縮候間、何卒志願之趣 御憐察 御聞届被成下置候様、幾重ニモ奉歎願候、以上。

齋藤 悟 驩印

慶應四戊辰年三月廿八日

○三月二十九日批紙

追テ何分 御沙汰可有之候ニ付、其内差扣罷在候様被 仰付候事。

○

在所播磨國 神東郡屋形村

池田 鎗三 郎

一高三千石

右ハ信濃守末家ニテ徳川家譜代之臣下ニハ無御坐候得共、兼テ勤 王之素志相違無御坐候、此度御一新ニ付テハ領地不殘弊藩へ預ケ候段ハ、先達御届申上候儀ニ御坐候、且早速上京仕度志願ニ御坐候處、昨年來病氣ニテ引籠リ、長途之旅行難仕、彼是遲延仕候中、信濃守用途之便船御坐候ニ付、右船ニテ當月二日江戸表出立仕、播州明石へ上陸仕、乍病中押テ上京仕候、此段御届申上候、何卒追々全快仕候上ハ、小身之儀ニ御坐候得共、相應之御用被 仰付候得ハ難有仕合奉存候、此段奉願上

候様、信濃守申付候、宜奉希上候、以上。

備前侍從留守居

澤井 宇兵衛

三月廿九日

○批紙

本文鎗三郎儀追テ何分可被 仰渡候間、其内差扣罷在候様可申聞候、領地之儀ハ、即今之處其藩へ取締被 仰付候事。

一高六千貳百貳拾八石七斗餘備中國加陽郡都宇郡之内

花房 助兵衛

辰十七歲

今般御復古被 仰出候ニ付テハ、家祖以來累代奉蒙 天恩、不奉堪報勿論、勤 王盡忠之愚意ニテ急速上京可仕筈之處、所勞ニ付延引、漸廿八日參著仕候、尤先般備中國松山表御追討之節、勤 王爲實効池田備前守手ニ附屬、知行所家來共乍少人數差出申候、猶身分相應之御用被仰付被下置候様奉懇願候、此段宜御執成奉願候、以上。

花房 助兵衛

○四月二日批紙

追テ何分 御沙汰有之迄之間、差扣罷在候様被 仰付候事。

今般 御大政御一新、諸事御寛大之御趣意謹テ奉拜服、感憤不過之、難有仕合奉存候、就テハ速ニ登京可奉窺 御用素願ニ御座候處、遲緩ニ打過候條、如何様御嚴烈之奉蒙 御沙汰候共恐悚伏罪之儀勿論ニ候得共、何卒出格之以御寛典、罪科 御宥免之儀俯伏奉歎願候、然ル上ハ當今之御時勢、輦下ニ罷出、徒然座視可仕儀ニハ無御座候得ハ、何分螻蟻之私、一身之

微力ニテハ聊之御用モ難相勤心痛奉恐懼候、依之、向來本家聳千代方へ隨從仕、一心戮力、數千載之奉謝天恩、勤勞 王事仕度寸分之惻誠ニ御座候間、何卒江海之御量ヲ以微志之程 御涵容之上、速ニ奉蒙 御用度、幾重ニモ此段奉祈願候、誠恐誠恐謹言。

三月廿九日

土方 靱 負

○四月二日批紙

追テ之 御沙汰可奉待候事。

○

乍恐口上書、

當正月中旬山陰道鎮撫御總督 御勅使西園寺權中納言殿、丹州福知山御巡行之節、土著家來共ヨリ愚父相模守平素之志願申付置候ニ付、仰テ奉歸 御聖化、朝命遵奉仕度段彼地於御本營嘆願書奉差上置候ニ付、急速上京可仕之處、折節病氣ニ付、爲名代不取敢私西上仕候處、於姫路拜謁被仰付、即前顯之素願奉申上候處、直ニ御守衛御人數へ御加へ、被成下、既ニ此間御歸洛ニ相成、私儀御供仕、一昨廿七日京著仕居申候、委曲 御總督ヨリ可被仰上候條、何卒御寛大之御沙汰御座候様、宜鋪御執成之程只管奉懇願候、以上。

牧相模守 悴

牧 又 太郎 印

慶應四戊辰歲三月廿九日

辨事 御役 所

○ 今般 御大政御一新ニ相成、誠ニ以恐悅之至、百般大御變革被爲 仰出、都テ御寛典之御旨趣難有奉拜承候、疾ヨリ上京可仕之處、持病之脚氣症ニ罷在、心外運引仕候段奉恐入候處、此度爲可奉窺 天氣、病氣ヲ押候テ登京仕候、極微力之儀ニテ

萬端不行届ニハ御座候得共、薄力相應之御奉公仕度奉存候、兼テ勤 王之赤心、私者勿論家來共へモ精々教諭仕候儀ニ御座候間、此段宜御執奏被下度奉懇願候、誠恐誠恐頓首謹言。

信濃國伊奈郡伊豆木

小笠原 兵庫 介

慶應四戊辰年三月

○三月十七日批紙

追テ何分之儀可被 仰出ニ付、先差控可罷居候事。

○ 私家之儀者 清和天皇七代新羅三郎義光五代之孫、加賀美小治郎源長清、應保二壬午年三月五日生于甲州小笠原館、右長清代從高倉帝始テ詔賜小笠原姓、任從四位上甲斐守、建久六年源賴朝入洛之時、長清相供、賴朝造營東大寺命諸將、令刻四天王像、長清亦彫刻其一像、以其餘材自奏 朝廷、洛陽東山創寺號長清寺、承久兵亂之時勵武勇、依有忠功蒙宣旨、爲阿波國守護、家傳云、昔 神功皇后被平三韓之時、以王之字爲旗紋、今之松皮是也、後冷泉院御宇康平年中 勅源賴義誅安部貞任、宗任之時、送年月未能平之、新羅三郎義光奉 勅發向之時、從 帝賜松皮之旗於義光、趣奥州兄與義家相議、得大勝利、從義光相傳至長清故以松皮爲小笠原家紋、右長清七代信濃守源貞宗、永仁二甲午年生于信州伊奈郡松尾城、上洛仕、于 後醍醐天皇之朝弓馬之御師範相勤、依之、位至三品候、於信州伊賀良庄島田村建立八幡宮、且右社地之内へ後年ニ至リ 尹良大權現ヲモ安置仕、兩社共今以年々春秋二度宛祭禮爲執行申候、同伊賀良上川路村へ創禪刹、號開善寺、以大鑑禪師爲開山祖師、右開善寺于今相續、代々菩提寺ニ御座候、貞宗四代兵庫助長秀 御所之掟三議一統之撰者也、貞宗十一代信濃守信貴之次男靱負尉源長巨、天文二十壬子年生于信州伊奈郡松尾城、天正十壬午年六月十四日於駿河府中兄信嶺與長巨東照權現へ附屬仕、同十八庚寅年九月依台命兄弟共從信州松尾城移武州兒玉郡本庄城、慶長五子年十二月東照權現ヨリ口達ヲ以、信州伊奈郡之内ハ父信濃守迄數代知行仕候間、松尾庄之内伊豆木一ヶ所爲秣料被給之、追テ知行可給旨被申達候而已

ニテ、其儘別段知行不被給之、信濃國非常取締爲役場伊豆木ニ居邑仕候、依之、領分之者木曾驛傳馬役等不動來候、于時信州伊奈郡城主地頭未定、長巨儀先祖舊地之儀ニ候得ハ、伊奈郡之内高拾萬四百九十五石八斗餘預地被申達、長巨一代相勤候、慶長十九寅年冬東照權現父子大阪へ進發之節ハ、相州箱根關所固被申達、長巨父子箱根在陣仕、元和元卯年夏出陣之節ハ、牧方關所固トシテ、父子共在陣仕候、其後慶安年中德川家ヨリ信濃國爲檢地被差出候朝日受永ト申者、私之意趣ヲ以右伊豆木村之内ヨリ高二百七拾石餘打出シ候テ、當時松平範次郎領分ニ相成居申候、從來伊豆木ト申ハ極僻地小邑ニテ、禿山、溪澗多ク、田畑甚少ク、收納高微少之處、右二百七十石餘相減居候間、彌以薄微困窮、家士等モ甚手薄ク、領民モ難澁仕候故、是迄モ度々貧民へハ聊宛之救米等爲取之、漸爲取續居申候仕合ニテ、上下誠ニ以困惑仕候、右極微勢之中ニハ候得共、今般 岩倉殿東征先鋒兼鎮撫總督トシテ、御下向ニ付テハ、兼テ勤王之志、實効之赤心ヲ以、於信州諏訪乍聊家士五人陪從之儀懇願仕候様、在所役人共へ堅ク申付置候儀ニ御座候、德川家へ附屬以來是迄三ツケ年ニ一度宛關東へ參府、將軍一調後直ニ歸邑仕候、依之、家族不殘往古ヨリ在所住居ニ御座候、是迄於關東ハ交替寄合ト唱、都テ柳之間大名之取扱ニ御座候、右ハ乍恐私家之荒増相認奉汚御覽候、頓首敬白。

信濃國伊奈郡伊豆木 高千石

小笠原兵庫介源長裕

三月

願書、

私儀先般於駿河國府中驛 有栖川宮様 御在 城へ心底書奉差上候處、首尾能 御聞濟被爲成下置、通行御差免相成、難有仕合奉存候、尤一心決定之儀ハ毛頭相違無御座候、依之私相應之 御用向相勤申度心底御座候間、偏奉願上候、且又先祖累代莫大之奉蒙 朝恩、難有仕合奉存候、就テハ爲冥加金何程歎奉獻仕度心願御座候、依テ此段御伺奉申上候、宜奉蒙 御沙汰度奉存候、以上。

慶應四戊辰年三月

甲斐莊帶 刀印

上

心底書、

私家之儀ハ元弘建武之比奉從 勅命、先祖正成三代共莫大之奉蒙 朝恩候處、其後河内國處士ニ罷在候處、從元龜年中德川家へ仕、相勤罷在候處、今般從 朝廷被 仰出候御趣意柄之御儀、乍恐難有奉恐服候、早速ニモ罷登奉從 王命、如何様之御用向モ奉 同上、相勤可申之處、折節病氣罷在、時日延引仕候次第、重々奉恐入候、一旦德川家屬麾下候共、朝恩之儀聊忘却不仕、罷登奉願候上ハ、素貳心無御座候、今般之御趣意ニテハ累代之 朝恩、不肖之身ニテ 御座候得共奉 報候心底、毛頭相違無御座候、向後如何様之 御用筋被 仰付候共、決テ違背不仕候、何卒前件之次第被爲 聞召、首尾能 御聞濟相成候様偏奉願上候、依之、心底書奉差上候處、誠恐謹言。

慶應四戊辰年三月

甲斐莊帶 刀印

上

方今 王政御復古ニ付私義急速上京可仕心得御座候處、去秋以來持病之癩氣相募難罷仕、引籠療養罷在候ニ付、無據遅々ニ相成、元ヨリ勤 王之儀ハ從來之念願ニ付、無二念尊奉 朝命可仕段ハ兼テ家來へ申付置候ニ付、其段備前少將殿へ申立、既ニ爲 勤王實効作州福渡へ出兵仕候次第ニテ、飽迄盡精忠度奉存候、私儀兎角本復仕兼候ニ付、追々出立延引ニ相成、何分 御大政御一新之御場合、迅速上京不仕テハ、此上實効難相顯ニ付、押テ江戸表出立、同所ヨリ乗船上京仕候間、此段不取敢以使者御届申上候、私分家志津摩儀ニ同様奉願勤 王候ニ付、是亦急速上京可仕處、兼テ多病之生質、近來眩暈相發、平臥罷在候ニ付、不取敢同人爲名代弟右近召連上京仕候間、右兩様被爲聞召置、可然 御沙汰伏テ奉願上候、以上。

三月

戸川主馬助

復古記 卷八十五 第二終



# 復古記 卷八十五 第三

○ 今般 大政御一新ニ付、追討使東下被爲在候趣、於江戸表遙奉承知、賊地ニ罷在候テハ奉恐入候ニ付、二月十日彼地脫走同様ニテ罷出候處、甲州路ニテ關東之歩兵ニ道路被相妨、無餘儀間道ヲ相廻リ、同十五日知行所陣屋へ著仕、不取敢中山道御總督御本陣濃州大垣表へ、以使者相應之御用被 仰付被下候様奉願候處、先陣屋ニ罷在候様御沙汰之趣、立歸申間候、猶又同月廿六日、中津川驛御本陣へ、以使者別紙之通奉願候處、右願之内、清内路關所之儀ハ、如元内藤若狹守へ守衛被仰付、分知平格儀ニ付申上候儀ハ、書面之通ニテ宣敷、其餘之儀ハ私直勤之上御沙汰有之へク旨、御達之趣立歸申間候ニ付、三月二日下諏訪驛御本陣へ參上仕相伺候處、信濃國之儀ハ從 朝廷尾張殿へ御委任相成候間、諸事尾張殿へ可申立旨御沙汰ニ付、去ル十四日名古屋表へ罷越、同廿日大納言殿へ相調、夫ヨリ上京仕候、右ニ付彼是延引仕候段ハ奉恐入候得共、何卒寛大之以御所置、相應之御用被 仰付被下置候ハ、抛身命、微衷相貫候様、赤心御奉公可仕候間、宜御執奏被下候様偏奉懇願候、付テハ 御總督並尾張殿へ差上候書面之寫相添、此段奉願上候、誠恐誠惶謹言。

信州伊奈郡山本陣屋 高五千石

四月二日

近藤利三郎

辦事御傳達所 御役所

○批紙

追テ御沙汰可被 仰付候事。

○別紙ハ之ヲ略ス。

○

先臣出雲守通貞

宗家ヨリ分家仕故、幕府麾下ニ罷在候、天和年間ニハ 禁裏御附被 仰付 御恩遇ヲモ奉蒙候得共、其後時勢ニ依リ、二百年來關東へ罷在候、萬事進退宗家へ任セ居申候、此度 大政御一新之折柄、且去冬伊豫守上京仕候ニ付テハ、早々上京可仕心得之處、不快ニテ旅行難仕、一旦采地上州萱野村へ引取保養仕、先月十八日發途、昨日京著仕候、伊豫守本陣へ差扣罷在候、何卒遷延遲滯之罪御寛容被下、相當之御用被 仰付候様奉願候、家來共トテハ聊モ無之、御用ニハ相立申間敷候得共、精々盡力仕度奉存候、此段奉歎願候、以上。

四月二日

久留島修理

通孝

○四月五日批紙

追テ何分之儀可被 仰出候付、先差扣可罷在候事。

○

乍恐以書附奉願上候、

私

先祖根來長筭儀ハ、則同姓榮三郎先祖右京之進兄弟ニ罷在候、根來寺愛染院住職仕居、爲豐臣氏被攻破候後、彼是浮沈仕候得共、徳川氏之時ニ至リ、於和州宇智郡、右京之進、長筭兩人へ千五百石餘被賜、則七百五十石宛分領仕候、以來歷代相應之役儀勤居候處、近世不容易之形勢ニ相趣、何卒爲 國恩報謝、勤 王正義之御奉公相勤度赤心ニ罷在候得共、小臣之微力、爲指御用モ難相勤、慷慨歎息罷居候處、去冬以來萬機 御一新之御布令被仰出候ニ付、身分相應之御用相勤度奉存候、然ル處當正月中 鷺尾侍從様和州へ御出陣被爲遊候節、地役人共御用相勤罷在、其後上京御歎願申上、猶三月五日、家來志

賀久司不取敢京著爲致置候、父五左衛門義多病ニ付、御用モ難相勤奉存候ニ付、私三月上旬江戸表出立、同廿七日參著、御届申上置候事ニ御座候、右之段奉歎願候間、小臣殊ニ不才之私故、同姓榮三郎ト申合、御奉公相勤度奉存候、何卒御憐愍ヲ以分限相應之御用被爲 仰付被成下候得ハ、難有仕合奉存候、何分 御寛恕之御處置被爲下置候様、御執奏奉願上候、誠惶誠懼謹言。

辰 四月二日

根來道太郎

辦事御役所 御役人 御取次中

○四月五日批紙

追テ何分之 御沙汰可奉侍候事。

○ 私末家蒔田鑓太郎儀、勤 王之志願私同様之儀ニ御座候處、先般御時變之砌モ、私人數ハ鑓太郎人數差加、官軍池田備前守手ハ相加候事ニ御座候、殊ニ私家之義ハ徳川三代目迄ハ外藩ニ御座候處、鑓太郎家祖數馬介ハ分知仕候儀ニ御座候、右鑓太郎徳川家麾下ニハ御座候得共、外藩之家筋ニモ有之、殊ニ無勤引込罷在候由ニ付、被爲 召候趣ヲ以、早々呼寄、高三千七百石、私高ヘ結込、内分ニ仕、右高竝之御奉公被 仰付被下置候歟、亦ハ 御料所御取締、私手傳被 仰付被下置候歟、奉歎願候處、鑓太郎歸順之實効相立、上京之上歎願仕候得ハ、何分之儀可被 仰出候ニ付、別段被召候様ニハ不相成候趣、以御下ケ札被 仰渡、且亦鑓太郎爲迎家來之者東下爲仕度奉存候ニ付、旅中差支無之様御印鑑頂戴奉願候處、御下ケ被下、依之鑓太郎儀御當所ヘ著仕、難有仕合奉存候、此上何卒右願之趣、出格之 御沙汰ヲ被下置候様、偏ニ奉歎願候、以上。

四月三日

蒔田相模守

○批紙

鑓太郎上著之段被 聞食置候、追テ何分之儀可被 仰出候ニ付、其内先差扣居候様可致事。

○ 本家蒔田相模守ヨリ御届奉申上候通、去月十五日江戸表出立仕、同廿日旅中於沼津驛橋本左少將殿迄奉伺 天機、難有仕合奉存候、今般御當所ヘ著仕候ニ付、乍恐奉伺 天機度奉存候、此段御内慮奉伺候、以上。

四月三日

蒔田鑓太郎

○四月四日批紙

追テ何分之御沙汰可被 仰出候ニ付、差控罷在候様被 仰付候事。

○ 覺、

士分 拾七人 足輕 七人 小者 八人 總人數三十拾貳人

右之通私儀召連上京仕居候、此段御届申上候、以上。

蒔田鑓太郎

○ 私共事交代寄合之家格ニテ、時勢之儀、舊幕恩顧之列ニハ御座候得共、祖先之繼志、積年勤王之素志ヲ抱、切齒憤發仕居候得共、小身微力、無致方鬱居仕候處、今般 王政御一新之 淑慮奉承知、別テ難有感佩仕候、此上ハ 朝命奉戴仕候テ、粉骨碎身相勤申度奉懇願、從在所昨二日上京仕、謹テ 御沙汰奉侍候、此段宜御執奏奉願候、以上。

四月三日

米良主膳  
米良龜之助

辦事御役所

復古記 卷八十五(第三) 明治元年五月十五日

○四月五日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、先差扣候様被 仰付候事。

○ 乍恐以書附奉願上候、

先祖之儀ハ、清和天皇之後胤、本姓仁木ニ御座候處、伊勢國壹志郡榊原郷ニ居住仕、榊原次郎四郎儀始テ家名榊原ト相改、其後退勢州、三河國安祥ヘ立越、閑居仕罷在候處、松平長親ヘ初テ附屬仕候ニ付、閑居仕居候土地三河國幡豆郡ニオキテ、其儘二百三十七石餘所領仕候後、榊原六右衛門之子榊原一郎右衛門儀、寛永之頃、新院御所附被 仰附、被敍從五位下、被任淡路守、其砌出格之譯ヲ以、蒙 朝恩、長ク在京被爲 仰付、冥加相叶、規模無此上事、雖有儀ニ奉存候、其上ニ新ニ山城國相樂郡相樂村ニオキテ五百石御加増被 下置、猶上野國百石知行御座候ニ付、右返知仕、於山城國一所六百石下賜、都合高八百二十七石餘罷成候、在京中奉願、私家之儀ハ淡路守次男榊原左平太ヘ、右之内三百石分知仕候、然ル處私儀大番ニテ度々上京、兼々國學執心、是迄和學所出勤仕、遵奉勤 王之志且夕ニ御座候處、此度萬機 御一新之御布令被 仰出候ニ付テハ、彌以勤 王正義之御奉公相勤度決志奉歎願度赤心ニ御座候、依之、此程上京仕候間、御届旁右之段歎願仕候、小身微力之儀ニテ奉恐入候得共、何卒前件 新院御所附被 仰付候御由緒モ御座候付、御憐察被爲成下、相應之御用モ被爲 仰付被下候ハ、廣大之儀、難有奉存候、何分御寛恕之御處置被爲成下候様、御執奏奉願上候、誠恐誠惶頓首謹言。

四月四日

辨事御役所 御役人 御取次中

○四月五日批紙

榊原清記

追テ 御沙汰之旨奉待、差控罷在候様被 仰付候事。

○ 今般神以愈勤 王ニ決心奮發仕候處、幸ニ赤心貫徹及、區々之微忠モ相顯、於道中大總督様ヨリ御印鑑頂戴、加之大和國御總督様ヨリモ御直筆之御添翰頂戴、鄭重難有仕合奉存候、伏テ冀クハ普天之御憐愍被爲感戴、於如此小身深奉恐入候得共、爲國家如何體ニモ盡力仕度候間、相應之 御用被爲 仰付候御沙汰而已、只管ニ奉仰願候、誠恐誠恐謹言。

慶應四辰年四月四日

石河藏人

貞昭花押

○四月五日批紙

追テ何分之儀可被 仰出候付、先差控可罷在候事。

○ 此度 御大政御一新ニ付、二月廿三日辭關東、一昨夕上京仕候、當今之御時世相應之御用被 仰付候様仕度、此段奉願候、以上。

四月四日

辨事御役所

織田主計

○四月五日批紙

追テ何分之儀可被 仰出候付、先差控可罷在候事。

○ 乍恐奉歎願候、

私知行所之内、近江國野洲郡服部村始外六ヶ村、高四千石餘、皇都近ニ有之候ニ付、非常御用等被 仰付候節ハ、地方

役人共如何様共仕盡力、奉命可仕様、私先祖ヨリ代々申付置候處、今般 朝政御一新、大御變革被 仰出、御寛大之御旨趣難有奉拜承候ニ付、勤 王遵奉之儀奉願度赤心御座候間、幼少ニハ御座候得共、相應之御奉公相勤、可抽忠誠様仕度、且家來並前文地方役人百姓共一同奮發、微力ヲ盡、勤 王仕度候ニ付、當二月廿八日江戸表出立、一日モ早ク上京仕度罷登リ候處、於途中 大總督様 御下向之趣奉承知、御差支ニ相成候テハ恐入候ニ付、宿々ニテ見合居、段々延著ニ相成申候得共、前條之次第ニ付、當今如何様之御奉公ニテモ被 仰付被下置候様、偏ニ奉願上候、誠恐謹言。

慶應四年辰四月五日

上田 錄 次郎

辦事傳達 御役所

○四月八日批紙

追テ何分之 御沙汰奉待候様被 仰出候事。

在所備中國後月郡井原村

一高六百石

池田 福 次郎

右福次郎儀信濃守末家ニテ、兼テ勤 王之素志相違無御座候、此度 御一新ニ付領地不殘弊藩へ相預候段ハ、先達テ御届申上候儀ニ御座候、同人儀去月廿一日江戸出立、陸路旅行仕、昨七日上京仕候、此段御届申上候、小身之儀ニハ御座候得共、何卒身分相應之御用被 仰付候得ハ、難有仕合奉存候、此段宜奉願上候様信濃守申付越候、以上。

備前侍從内

澤井 權 次郎

四月八日

辦事 御役所

○四月十三日批紙

福次郎上京之段被 聞召届候、追テ何分之儀可被 仰出ニ付、先差控可罷在様可相達候事。

○乍恐奉願上口上覺、

今般就 御改政、御一新被爲 仰出候御沙汰之趣、誠以難有奉拜承候、依之、私儀早速上京仕、奉遂勤 王度念願ニ罷居候處、暫所勞延引仕、且道中隙取遲滯仕候段、深ク奉恐入候、則去月廿八日京著仕、翌廿九日參著御届書奉差上候、且從 有栖川宮様 御印鑑於駿府頂戴仕候儀モ御届奉申上置候、何卒相應之御用勤被爲 仰付被下置候様、奉厚願候、併小知、人少之儀ニ候得ハ、自然不行届之程モ重々奉恐入候間、何卒 御憐愍ヲ以何レカ之御警衛へ御召加被爲成下置候様、奉願上候、且ハ本家片桐主膳正相勤居候御警衛之廉へ被爲召加候様被爲 仰付被下置候ハ、冥加至極難有仕合可奉存候、此段格別之以 御慈悲、右願之通 御許容被爲成下候様偏宜奉願上候、以上。

慶應四年四月八日

片桐 内 藏 助印

辦事 御役所

○批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

○ 戸川捨次郎儀、徳川家臣下ニテ御座候得共、兼テ勤 王之素志相違無御座候、既ニ此度 御一新ニ付、去就相糺候處、爲實効領地不殘弊藩へ預ケ候段ハ其御御届申上候義ニ御座候、且急速上京仕度志願ニ御座候處、病氣ニ付旅行難仕、依之、同人弟隼人義爲名代此程上京仕候、則隼人ヨリ之願書壹通指出申候、何卒身分相應之御用被 仰付候得ハ難有奉存候、此段宜奉願上候様信濃守申付越候、以上。

備前侍從内

澤井 權 次郎

四月九日

復古記 卷八十五(第三) 明治元年五月十五日

辨事 御役所

○四月十三日批紙

捨次郎上京之儀被 聞食届候、追テ何分之儀可被 仰出ニ付、其中差控可罷在旨、可相達候事。

乍恐奉敷願候、

戸川捨次郎儀

從來徳川之小臣ニハ御座候得共、尊 王之大義聊相辨ヘ罷在候、此度 大政御一新奉拜承、不堪欣抔、其砌爲實効隣國池田備前守ヘ領地不殘相預、證書相添差出置候儀ニ御座候、其節速ニ 天恩之萬一ヲ奉報度志願ニ御座候得共、持病之疝癩ニテ引込罷在、急々快復之目途無御座、依之私爲名代上京仕候、元來微力小身之者ニ御座候得共、何卒身分相應之御用被爲 仰付候様奉希上候、恐惶謹言。

右捨次郎弟

戸川 隼 人

慶應四戊辰年三月廿日

辨事 御役所

○四月十三日批紙

追テ何分之御沙汰可被 仰付候、其中差控可罷在候事。

奉願候口上書、

今般 王政御復古被 仰出候ニ付、私儀兼テ勤 王赤心之志願御座候間、去月十日江戸表發足仕、中山道筋罷登、同廿九日 大津驛ヘ著仕、入京之儀當御役所ヘ窺之上ニテ、去ル七日著京仕候、私竝家來知行所之者ニ至迄、同様累代奉蒙 天恩候儀、

素ヨリ勤 王之外他念無御座、彌 朝命遵奉奉仕度志願御座候、何卒身分相應之御用被 仰付被下置候様奉願上候、以上。

丹波國桑田郡川原尻村 寄合

武 田 兵 庫 印

花 押

慶應四戊辰年四月十日

辨事 御役所

○四月十二日批紙

追テ何分之御沙汰被 仰出候ニ付、差控罷在候様被 仰出候事。

由緒書、

祖 父 和 泉 守  
兵 庫

武 田 兵 庫

當辰廿四歲

高五千三百拾八石 丹波國桑田郡川原尻村  
外四郡之内拾五ヶ村

右私知行所之儀ハ丹波國五郡之内ニ御座候、家譜祖先之儀ハ 清和天皇之後胤、新羅三郎義光十六代之孫、武田信玄弟同姓兵庫頭信實之嫡子川窪與左衛門信俊儀、徳川家康公御代、笹ヶ瀬ト申侍、背命甲州ヘ罷越、武田兵庫頭信實方ニ罷在、經年テ後其咎ヲ赦免、三州ヘ罷越候節、信實鷹ニ雙笹ヶ瀬ニ與ヘ差上之可致御目見、笹ヶ瀬三州ヘ歸リ、右之様子申上、依之、信實末葉被爲尋、其時信俊甲州川窪之地ニ罷在、十九歳之時始テ被召出、天正十年御目見仕候、翌天正十一年四月廿四日甲斐國之内三百八十二貫八百文拜領仕候、其後同十二年二千石餘拜領、寛永十四年上總國之内ニテ七百石拜領、寛永十六卯年兵庫頭信貞家督後、依願上總之國七百石武田與左衛門ヘ分知仕候、寛文四辰十二月廿五日千石拜領、都合五千七

百拾八石ニ罷成、不殘丹波國之内五郡へ替地相成申候、寶永七寅年四月廿六日、依願高五千七百十八石之内、四百石川窪友之助へ分知仕候儀ニ御座候、此段申上候、以上。

四月十日

武田兵庫

○

一 柳信次郎

右家筋之儀ハ私本家故西條城主直盛嫡子直重之ニ男直照之末葉ニテ、則直重領知之内播磨國美囊郡之内高五千石分知差遣候處、本國豫州へハ遠隔之儀故、私領分近隣之儀、旁以内外之政令依頼御座候處、直重嫡男直興、故有テ寛文年中徳川氏ヨリ絶家申付候、其節直興ヨリ遺頼之儀御座候テ、本末之建議誓約仕候儀ニ御座候、素ヨリ微祿者ニ御座候故、定在府仕候處、今般 御政典御一新被 仰出候付、歸邑之儀申遣置候處、幸ニ渡海船之便宜御座候テ、上著仕候段申出候付、不取敢家來ヲ以御届申上候儀御座候、尤 朝命遵奉之素願ハ是迄申上不仕候得共、私迄ハ度々申出仕居候、然ルニ未タ上京前ニ御座候間、態ト相控罷在候處、風波之大難相凌上著仕候付、呼寄篤ト心底相糺候處、 皇國ニ生育仕候へハ、何等之儀御座候共 朝命遵奉之儀ニオキテハ更ニ他念無御座ハ、勿論之儀御座候間、如何體之御奉公ヲモ相勤度素願ニハ御座候得共、何分微少薄祿之者ニテ、不任心底奉恐入候間、私へ附屬仕、身分相應之奉勤 王度、別紙之通哀訴數願申出候付、本紙之儘差上申候、書面之次第ハ聊以相違之儀毛頭無御座候、此段於私モ哀哭奉懇願候、何卒右之願情乍憚 御憐察被成下、信次郎上下土地人民ニ至迄安堵仕候様、速ニ 御沙汰之程千祈萬禱伏テ奉歎願候、以上。

四月十日

一 柳對馬守

辨事 御役所

○ 四月十四日批紙

一 柳信次郎勤王志願之儀ハ被爲 聞召置候、土地、人民之儀ハ先是迄之通ニ心得可申、追テ何分之 御沙汰可被 仰出旨

可相達候事。

○

私家筋之儀ハ

故西條城主 直重様御代、播磨國美囊郡之内高五千石、先祖半彌直照へ始テ御分知被成下候處、本國へハ道路遠隔ニテ萬事不都合ニモ御座候付、御尊藩ハ故 直盛様御直末且御領分續之儀、旁以御隨從仕候様ト之御儀御座候處、其後 直興様御故障之儀有之、御絶家相成候砌、御尊藩ヲ以本國ト相心得候様蒙御遺令、私迄八代永々聯綿相續仕候モ、全御厚憐被成下候故之儀ニテ、重疊難有奉存候、然處、今般 御政令御一新被 仰出候折柄、去ル正月三日以來不容易御時變動仕候段、於私モ深恐入奉存候、依之、早々罷登可申旨被仰下奉畏、神速上京仕度心得ニテ、知行所へ申遣候儀モ御座候處、私在府罷在候故哉、高木陣屋詰家來之者へ 官軍御執事薩州御藩御役々ヨリ、別紙寫之通御書取ヲ以御沙汰御座候段、右家來共ヨリ申越、出立用途モ調兼、驚愕悲歎、如何トモ進退可仕様無御座、必至當惑、心痛苦慮罷在候處、内外御配慮モ被下候ニ付、今般程能廻便船御座候間、家族共引纏、乘組仕、去月十日江戸表出帆仕候處、折節大難風雨急起ニテ、豆州沖漂流、尙又遠州沖ニテモ難風激浪強、九死之場合、幸ニ一生ヲ得、同廿二日漸攝州兵庫津へ著岸仕候付、直様上京可仕本意之處、前條之通度々之難苦ニテ身心腦亂、起居モ不安御座候付、暫保養差加、今般上著仕候、抑 皇國へ生ヲ相請候者、 朝命遵奉仕候ハ申迄モ無御座候、私始家來末々迄毛頭異存無御座候ハ兼々申上候通、誓神明更ニ相違無御座候、既ニ先般知行所へ前顯之儀御沙汰御座候節、 官軍御命令奉請、出兵モ可仕本意御座候得共、微臣之儀、可差出人數無御座候ニ付、有合候金子ヲ以御軍途之御一端ニモ被成下度段、右御執事中心へ家來共ヲ以願出候處、御入用之節迄御封印之上、尙又家來共へ御預ケ相成申候、右ハ聊モ不奉違背、實効トモ可相成哉、則其節之願面御預書共寫、別紙之通御座候、何分微少薄力之私、 御尊藩へ附屬相願、身分相應之奉勤 王度、素ヨリ之志願ニ御座候、何卒赤心之情實 御憐察被成、微志貫徹、上下安堵仕候様、偏宜

御執成被成下度、伏テ奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年四月

一 對馬守様

別紙、

舊一柳信次郎領地陣屋並家來共、追テ

朝廷ヨリ

御沙汰有之迄之間、是迄之通召置、諸村仕置、其方ヨリ令指揮、土民一

揆亂妨之企等無之様鎮撫可致モノ也。

辰正月

舊一柳信次郎家來

丹田貞治へ

覺、

一金千兩

舊信次郎領知去卯年收納  
殘米拂代銀當三月取立之内

右ハ舊信次郎陣屋詰家來共、此度 御官軍御人數御手先之内ニモ 御召加へ願上度奉存候得共、何分小家無人之儀、不任

心底、依テ爲冥加乍聊前書之金子御軍用片端ニモ御用被爲成下候ハ、於信次郎モ難有仕合奉存候、此段御聞濟之程偏奉願

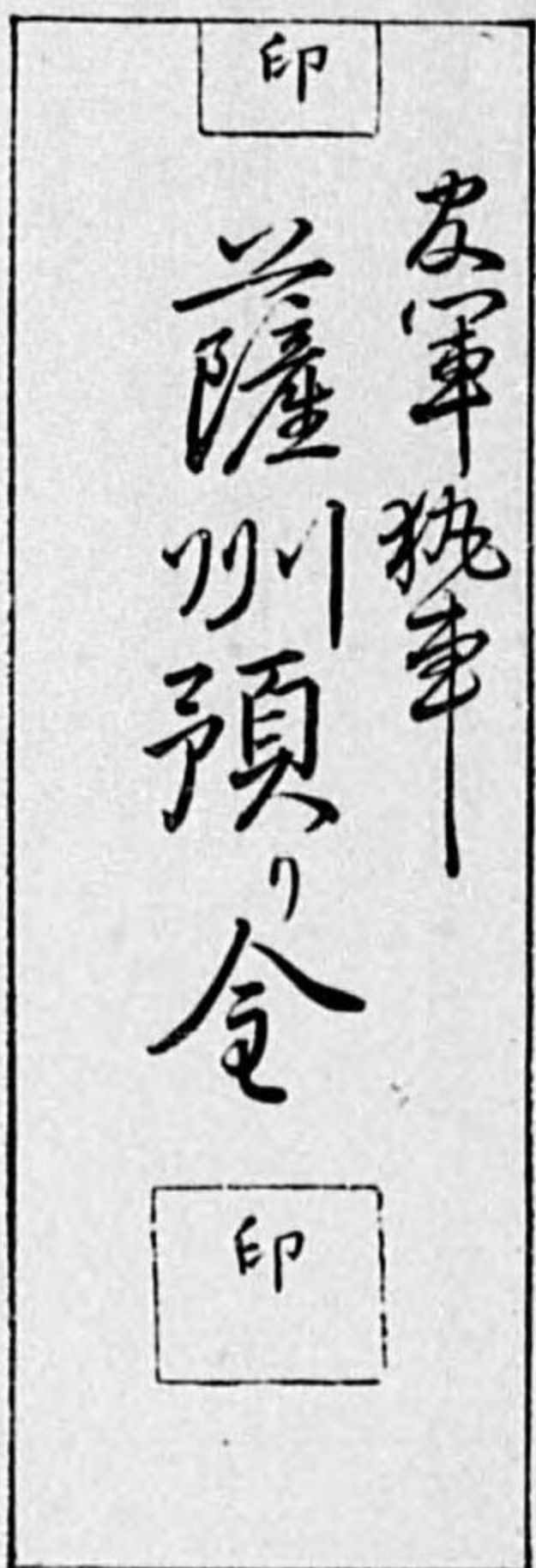
上候、以上。

舊一柳家來

丹田貞治印

辰三月

上



○ 私家之儀ハ、同性多羅尾織之助先祖近衛家基公十五代孫、多羅尾四郎右衛門光俊三男、藤左衛門光孝事光廣儀、始名主膳  
ト申頃、江州三井寺於勸學院文學罷在候内、織田信長公同寺へ參詣之砌、勸學院へ立寄、主膳ヲ見掛、誰悴之旨尋ニ付、右  
四郎右衛門三男之由申答、同人子供多ニ有之間、主膳ヲ山口甚助養子ニ可遣旨、木下藤吉郎へ被申付、則同人烏帽子子ニ  
相成、山口藤左衛門ト改名、山城國宇治田原郷野口之城主甚助養子ニ相成、

本文山口甚助先祖並其節之領分高等相分不申候、

養父一所ニ罷在、其後太閤秀吉公天下ニ一統之後ハ、秀吉公ニ屬罷在候處、慶長元年申年關白秀次公生害之事ニ坐セラレ、光  
俊一族被改易、

本文光俊一族改易之節、山口家之儀モ同様浪人仕候儀ト相見へ申候、

其後右藤左衛門光廣儀、徳川祖先へ隨身、江州信樂之莊朝宮村桃原下村ニテ高五百石、上總國殿臺村山中村ニテ高貳百  
石、都合高七百石知行仕、相續仕來候儀ニ御座候、然ル處、今般 王政御復古之隆際ニ遭遇仕、誠以難有御儀ニ付、速決心  
仕、家族一同江戸表立拂、幾重ニモ勤 王之奉歎願度心底ニテ上京仕候、格別之以御憐愍、私身分相應之御用相勤、知行

安堵被 仰付候様仕度、此段奉歡願候、以上。

辰 四月 十日

山口 藤五郎

○四月十三日批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候事。

○今度 朝政御一新ニ付、歸京勤 王精忠相勵度志願ニ付、辭關東、三月廿四日江戸屋敷引拂、家族並家來共召連出立上京仕候道路、三月廿七日於小田原表 御先鋒橋本少將殿奉行逢、上京之趣意書付差出候處、尤之儀御聞濟有之、稻津真四郎ヲ以關所並固場所、通行之印鑑御渡、於箱根添鑑請、四月朔日於駿府 大總督宮へ罷出、前條之次第申上候處、心底印紙差出候様御沙汰ニ付、則無一心勤 王相勵度旨證書差出候處、御落手御聞濟有之、河田精之丞ヲ以、通行方印鑑御引替相成且伺、天機之儀ハ上京可相願旨御沙汰御座候付、猶又於大津表裁判所長谷殿へ上京之次第御届之上通行、一昨十日夕京著仕候、依之、速奉伺 天機度、此段宜御沙汰奉願候、以上。

四月 十二日

日野家庶流 高家

日野 大學

資訓

○批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候事。

乍恐以書付奉願上候、

私先祖儀、寛永寅年 東福門院御醫師被 仰付候節、大和國平群郡信貴畑村高貳百石拜領仕來罷在候處、今般之御事件ニ付、

畿内之知行所有之向ハ、京都ヨリ御沙汰之儀御座候ニ付、御用地ニ相成候様承知仕候ニ付、江府ニ罷在候テハ采地ニ離レ難罷仕候間、今般上京仕候間、何卒以御慈悲是迄通醫業ニテ御奉公奉願上度心得ニ御座候間、以醫業御奉公被 仰付候様奉願上候、以上。

慶應四辰年四月十三日

土 岐 玄 又

辨事 御役所

○四月十五日批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候事。

○先達テ御届申上候通、主馬助分家志津磨名代弟右近上京仕候ニ付テハ、此度別紙之通歡願書差出候間、宜 御沙汰奉願上候、以上。

戸川主馬助家來

石 黒 清 之 進

岡 田 織 衛

四月 十三日

辨事 御役所

○四月十五日批紙

分家志津磨名代弟右近へ御附紙ヲ以被 仰渡候通、相心得可申候事。

私儀

先般本家主馬助ヲ以奉願上置候通、爲兄志津磨名代上京仕候ニ付、謹テ奉歡願候、私祖先之儀ハ本家土佐守正安ニ男助七



郎安成、寛文九己酉年七月土佐守ヨリ高之内千五百石、備中都宇郡妹尾ニテ分知仕、子孫相續、徳川旗下ニ相屬候得共、皇國之爲人臣者奉仕 天朝者至當之大義奉存然ル處、慶長以來御大政徳川家ニ御委任 被爲在候ニ付、徳川政府ニ奉公仕候ハ、全以奉酬 天恩、到底勤 王之儀奉存候處、舊臘 王政御復古、引續徳川慶喜 朝敵ト相成、御征東被 仰出候ニ付テハ、速ニ去逆歸順申度奉存、殊ニ勤 王之儀ハ從來之念願ニ付、何卒奉戴 朝命、乍少身相當之御奉公奉願度奉存候折柄、備前少將殿ヨリ情實糾問御座候ニ付、其段申立、只管勤 王之儀奉願置、志津磨儀モ早速上京可奉懇願心得ニ御座候處、兼テ多病之生質、殊ニ近來眩暈相發、病瘳ニ打臥罷在候ニ付、不本意遅延仕、何分上京不仕テハ勤 王之素願貫徹難仕ニ付、不取敢私儀爲名代上京奉懇願候間、何卒右願之趣被爲 聞召譯、寛大之 御仁恩ヲ以、本領安堵、相當之御奉公被爲 仰付候ハ難有仕合奉存候、此段偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶謹言。

四月十三日

戸川 右近

辨事 御役所

○四月十五日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

乍恐奉歎願口上書、

矢橋子之太郎

私儀

近畿近江國栗太郡蜂屋村采地並ニ同郡矢橋村ニ、先祖歷代之墳墓有之、膳所領之内除地ニ相成居、猶下野國安蘇郡免鳥村新里村共都合七百石采地安堵仕候ハ、全以至渥之 天恩ト平生感戴仕候、尤徳川政府ニ隨從精勤仕候者、則 天恩奉酬筋ト相心得候處、即今翻覆逆黨ニ陥リ、實以恐惑仕居候折柄、復古之 御鴻業被爲建、諸般寛典之 御諭令之趣奉拜承、

從來勤 王盡忠之志願ニ付、速ニ上 京、其段可奉仰願候處、春來道路梗塞、且時々所勞ニテ意外之遅延ニ相成、實以奉恐悚候故、病中勉強仕、漸去月中旬江戸表發足、於駿府 大總督様御衆へ奉願、道中通行御印鑑頂戴、本月五日大津驛到著仕、於同所 御裁判所へ御届、歎願書共差上置候後、再所勞ニ付數日滯留、漸今十四日上 京仕候、尤前件奉願候通、小身之私殊ニ不才之至ニ御座候得共、弓箭、兵隊等之御用筋ヲ以勤 王盡忠之素志相遂度奉存候、依之、到著御届旁此段奉仰願候、何卒格別之 御憐憫、願意之趣被爲 聞食被下置候様奉千望萬祈候、恐惶謹言。

慶應四年戊辰四月十四日

矢橋子之太郎

辨事 御役所

○四月十五日批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

奉願候口上覺、

銚次郎附屬分地酒井銚三郎儀、家來末々迄勤 王之外他念無御座候ニ付、如何様之 御用ニテモ被 仰付被下置候様奉歎願候、何卒銚三郎へ出格之 御憐憫ヲ以 御用 仰付被下置候様御執成之程、於銚次郎モ偏奉歎願候、以上。

酒井銚次郎家來

窪田 音藏

四月十五日

辨事 御役所

○四月十九日批紙

銚三郎願書へ御附紙之通相心得候様被 仰付候事。

奉歎願候口上覺、

私儀先祖以來莫大之奉蒙 御國恩、冥加至極難有仕合奉存候、今般御一新之折柄、猶以家來末々ニ至迄、勤 王之外他念無御座候、何卒寛大之御沙汰ヲ以、如何様之 御用ニテモ被爲 仰付被下置候様、伏テ奉歎願候、依テ御憐愍之御沙汰奉願上候、以上。

四月十五日

酒井鉄三郎

○四月十九日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

由緒、  
高三千石武藏國之内  
安房國之内

酒井鉄三郎

辰拾四歳

天和年中初代酒井大和守ヨリ高三千石、安房國平群郡之内ニテ十ヶ村分知、天保十四年中高貳千七百八拾三石餘取上ニ相成、同年中武藏國埼玉郡之内ニテ高貳千拾五石餘代知相渡リ、慶應三年八月中埼玉郡之内羽生町場村高四百拾九石餘取上ニ相成、代知追テ可相渡管ニテ、未々相渡リ不申候。

一初代

寄合 酒井新次郎

一二代目

同 酒井大藏

一三代目

同 酒井多門

一四代目

中奥小性 酒井筑前守  
相勤申候

一五代目

浦賀奉行  
相勤申候

酒井長門守

一六代目

寄合 酒井舍人

一七代目

但當時隱  
居罷在候

寄合 酒井新三郎

一八代目

慶應二寅年三  
月中家督仕候 寄合 酒井鉄三郎

右之通御座候、委細之儀ハ取調之上、追テ可奉申上候、以上。

四月十五日

酒井鉄三郎

○

私先祖民部少輔忠容儀、本家三代目伊賀守忠周持高之内五千石分知被 仰付候以來、私迄七代、徳川家隨從罷在候處、先般御大政御一新御布告之儀謹承仕、本家共ニ勤 王勉勵仕度志願ニテ、今般伊賀守へ附屬上京仕候、兼テ同人ヨリ奉願置候通、御用之節ハ乍微力身分相應之御奉公被 仰付被下置候様奉懇願候、此段宜御執成被成下度奉願候、以上。

松平伊賀守分知

四月十七日

松平欽二郎

辨事御役所

○四月十九日批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候事。

○

今般王政御復古被 仰出候ニ付テハ、私儀本家右京大夫同様累代奉蒙 天恩候儀、固勤 王之外他念無御座候ニ付、身分相應之御用被 仰付被下置候様、幼少殊ニ病氣罷在候ニ付、先般不取敢重臣之者爲差登奉願候得共、此度押テ江戸表發足仕、去ル十四日於天津驛御裁判所へ別紙之通奉願候處、願書御取置ニテ勝手ニ通行可仕旨御差圖ニ付、一昨十五日著京仕候、猶又宜御差圖之程奉願候、此段御届申上候、以上。

四月十七日

酒井富之助

辨事御役所

○別紙ハ之ヲ略ス。

乍恐奉歎願候口上、覺、

微臣儀

此度御一新之御趣意奉傳承、早速登京仕、抛身命勤 王仕度覺悟ニ御座候處、昨冬以來持病疝癩相發シ、平臥仕罷在候事故、不得止事は迄遲延仕候處、餘リ延引仕候テハ、奉恐入候ニ付、押テ出立仕、東海道罷登リ、駿府ニテ 大總督宮様 御參謀方ニ奉歎願、御印鑑頂戴仕、誠ニ以難有仕合ニ奉存候、何卒出格之 御仁惠ヲ以小臣之微忠 御採用被爲 在、相應之御用被 仰付被下候ハ、數千載之 天恩、萬分一ヲモ奉報度赤心ニ御座候間、右願之通り御許容伏テ奉懇願候、以上。

慶應四戊辰年四月廿日

柴田七九郎

辨事 御役所

○四月二十二日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

○歎願書、

私儀先祖以來莫大之奉蒙 御國恩、冥加至極難有仕合奉存候、今般御一新之折柄、猶以家來末々ニ至迄、勤 王之外他念無御座候、何卒寛大之御沙汰ヲ以、身分相應之御用被 仰付被下置候様、伏テ奉願上候、以上。

元寄合

本多邦之輔

四月廿二日

辨事 御役所

○批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰出候事。

○松井備中守儀、徳川之臣下ニハ御座候得共、兼テ勤 王之素志相違無御座候、既ニ此度御一新ニ付、去就相糺候處、爲實効領地不殘弊藩へ預候段ハ、其砌御届申上候儀ニ御座候、且急速上京仕度志願ニ御座候處、病氣ニテ旅行難仕、彼是遅延仕候依之、嫡子爲三郎爲名代二月廿九日江戸出立、直ニ上京可仕筈ニ御座候處、最初之運ヒヲ以先歸邑仕、備中守へ相談仕候處、速ニ上京可奉待 御沙汰旨申聞候ニ付、急速上京可仕心得ニ御座候處、同人儀モ不快ニテ出立難仕、彼是延引仕候内、追々快方ニ趣候ニ付、押テ來ル廿八日頃在所出立上京爲仕候間、則同人ヨリ之願書一通差出申候、何卒願之通身分相應之御用被 仰付候ハ、難有奉存候、此段宜奉願候様、信濃守申付候、以上。

備前侍從内

澤井權次郎

四月二十二日

○四月二十四日批紙

爲三郎願書面へ付札之趣相心得、同人へ可申通候事。

同苗備中守儀

從來徳川之小臣ニ御座候得共、尊 王之大義聊相辨へ罷在候處、此度 大政御一新奉拜承、不堪欣然之至、其砌爲實効隣國池田備前守へ領分不殘相預テ、證書相添差出候儀ニ御座候、其節速ニ西上 天恩之萬一ヲ奉報度志願ニ御座候處、持病之疝癩、其上腰通ニテ引籠罷在、彼是遅延ニ相成候ニ付、爲名代私儀去ル二月廿九日江戸表出立、直ニ上京仕度心底ニモ御座候得共、餘リ憚多奉存候ニ付、一先歸邑仕、最初之運ヒヲ以備中守へ相談仕候處、何分速ニ上京御沙汰相待候様申聞候ニ付、來ル廿八日頃在所出立上京之心得ニ御座候、元來小身微力之者ニハ御座候得共、寸衷 御憫察被爲下、相應之 御用被 仰付候様只管歎願仕候、宜様奉希上候、誠恐誠惶頓首謹言。

復古記 卷八十五(第三) 明治元年五月十五日

備中守嫡子

松井爲三郎

慶應四辰年四月

辨事 御役所

○四月廿四日批紙

上京之上何分之 御沙汰可被 仰付候事。

○誠恐謹惶奉懇願候、

皇國且夕戴朝祿、多年盡忠報國之志願不斷候得共、空移光陰居候處、此度 御一新被 仰出難有仕合奉存候ニ付、不取敢家來共ヲ以前々月奉歎願候處、御採用被成下難有仕合奉存、依之、江戸屋敷引拂、於駿州府中大總督様へ、知行所へ罷越、夫ヨリ上京仕度段奉願上候處、近江國へ歸邑 御免之御印紙頂戴被 仰付、難有仕合奉存候、右ニ付近江國宮部へ歸邑仕、今般上京仕候、何卒寛大之 御沙汰被成下、賤士相應之御用被爲 仰付下置候ハ、實願相立、抛身命盡力勤 王仕度赤心ニ御座候、此段被爲 聞食譯、早行公明之御沙汰相成候様、誠忠伏テ奉歎願候、頓首敬百。

江州宮部

瀧川 斧太郎印

慶應四辰年四月廿三日

辨事 御役所

○四月廿五日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰付候間、差扣罷在候様被 仰出候事。

○誠恐誠心奉歎願候、

私儀

元來於幕府願立隱居仕候處、皇國舊復之御一新御建替奉感服、斧太郎儀江戸屋敷引拂、於駿州府中 大總督府様へ奉願上候處、舊領近江國へ歸邑御免被 仰付、難有仕合奉存候、依之、宮部陣屋へ引取、今般 上京仕候ニ付、私儀モ附添登京仕、忤斧太郎同様勤 王仕度赤心ニ御座候、何卒被爲垂 御憐愍寛仁之御沙汰被成下候様、於私誠恐頓首奉懇願候、以上。

江州宮部

瀧川 穆 堂印

慶應四辰年四月廿三日

辨事 御役所

○四月二十五日批紙

斧太郎願面へ附札之趣、同様相心得候様被 仰出候事。

○養父同氏内記儀、兼テ勤 王之志願、私儀家來共、迄同様罷在候處、今度家元日野大納言、外山宮内大輔ヨリモ右同様厚申越候ニ付、彌速ニ罷登、奉願於 朝廷何様之御奉公之筋ニテモ粉骨仕、及身命候限リ誠意相盡申度、依之、上京可仕ト東海道平塚迄罷越候處、持病之癩氣差發、其上足痛強、押テモ旅行難仕、無據同驛ヨリ領知へ歸邑仕候、少々モ快御座候ハ、押テモ上京可仕ト奉存、私儀上京仕候、宜御沙汰奉願候、以上。

日野家一門、外山家庶流 高家

長澤 内藏 助

花押

四月廿四日

○四月二十五日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰付候間、差扣罷在候様被 仰出候事。

復古記 卷八十五(第三) 明治元年五月十五日

○松井信濃守儀、德川之臣下ニハ、御座候得共、勤 王之素志相違無御座候、既ニ此度 御一新ニ付、去就相糺候處、爲實効領地不殘弊藩へ預ケ候段ハ、其砌御届申上候義ニ御座候、且急速上京仕度志願ニ御座候處、病氣ニテ旅行難仕遲延仕候内、少々快方ニ趣、押テ當月十一日江戸表出立、去ル十三日於程ヶ谷驛 大御總督様へ伺 天機等相濟、一昨廿三日上京仕候、則同人ヨリ之願書一通指出申候、何卒願之通身分相應之御用被 仰付候ハ、難有奉存候、此段宜奉願候様信濃守申付越候、以上。

備前侍徒内

澤井權次郎

四月廿四日

辨事 御役所

○四月二十八日批紙

松井信濃守願面へ付札之趣相心得候様、可被申通候事。

私儀

從來德川之小臣ニハ御座候得共、兼テ勤 王之大義聊相辨へ罷在候處、此度 大政御一新奉拜承、不堪欣然之至、其砌爲實効隣國池田備前守へ領地不殘相預、證書相添差出置候儀ニ御座候、其節速ニ上京、天恩之萬一ヲ奉報度志願ニ御座候處、兼テ之持病差起リ、出立難仕、追々上京延引仕奉忍入候、然ル處、少々快方ニ趣候ニ付、押テ當月十一日江戸表出立仕、同十三日於程ヶ谷驛 大御總督府様伺 御機嫌無滞相濟、一昨廿三日上京仕候、元來微力小身者ニ御座候得共、何卒身分相應之御用被 仰付候様奉希上候、恐惶謹言。

四月二十五日

松井信濃守

辨事 御役所

○四月二十八日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰付候間、差扣罷在候様、被 仰出候事。

○私家之儀、近衛關白家基公嫡男經平公、近江國甲賀郡信樂莊依爲領知、正安之頃ヨリ居住仕、右經平公嫡男師俊病身ニ付、庶人ニ下シ、近衛家之儀ハ次男基嗣公相續、家領之内高四千六百石同家ヨリ師俊へ讓與有之、初テ多羅尾之家號ヲ立、信樂之莊領知居住仕、畏多モ勤 王之家筋ニテ、師俊ヨリ十四代多羅尾四郎右衛門光俊代ニ至、本知ハ不退ニ領知仕、且其砌戰國ニ付、武勇ヲ以大和、山城、伊賀國之内數郡領知仕、伊賀亂之砌戰功有之、織田信長公ヨリ二萬石加恩請、本知之外江州田上之莊三千石餘、同國金ヶ森三千石、城州和束之莊三千石、和州井戸跡三千石餘、河州中之黒山三千石餘、伊州阿拜郡、名張郡二郡ニテ六萬石、都合八萬石餘都テ領知仕、多羅尾村、小川村、和束之別所村、田上之里村、四ヶ所ニ構城郭居住仕、其後太閤秀吉公ニ屬罷在候處、關白秀次公生害之事ニ被坐、光俊一族被改易、慶長之度同人嫡男多羅尾久右衛門光太へ、徳川家康公ヨリ本知安堵之申渡有之、

判物之寫、

甲賀郡之内信樂其方本地如前々返被下候、以此旨可抽忠節者也、仍如件。

慶長五年七月廿九日 家康判

多羅尾久右衛門とのへ

其以來幕府ニ隨從、古昔近衛家ヨリ讓請候信樂之莊領知高四千六百石之内、一族へ配分、私家之儀ハ高千五百石知行仕、師俊ヨリ私迄二十四代不退ニ多羅尾村ニ居住、右久右衛門光太ヨリ代々預地支配仕、交代寄合竝ニテ相勤、十六代久右衛門光好代ニ至、寛永度自餘之縣令竝代々引續相勤罷在候處、今般 王政御復古之隆際ニ遭遇仕、誠以難有御儀ニ奉存、

復古記 卷八十五(第三) 明治元年五月十五日

二五七

然ル處當正月中東海道御先鋒御總督橋本少將殿、柳原侍從殿大津御本陣へ被爲召、同月十一日勤 王之儀奉願候處被爲聞食、從前支配之國々是迄之通可相心得旨被仰渡、尙其後御總督方御賄御用被仰付、勢州桑名宿迄支配向之者共召連、相勤罷在候處、御賄御用之儀ハ支配向之者共ニ爲相勤、私儀ハ同宿御宿陣先ヨリ急速上京可仕旨被仰渡、出京仕候處、三月朔日於 太政官代、先是迄之通民政租稅取建方等可相勤旨、被仰渡、重々難有仕合奉存候、前書ニモ奉申上候通、近衛家庶流ニテ從往昔數代信樂莊多羅尾村ニ居住仕候儀ニ付、格別之以 御憐愍信樂莊高千五百石餘知行安堵被仰付被下置候様仕度、依之、知行高書付相添此段奉歎願候、以上。

辰四月十九日

多羅尾織之助

辦事御役所

○四月二十二日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、其旨相心得、御用向精々相勤候様、被 仰付候事。

近江國甲賀郡

信樂莊

一高七百八拾五石三斗四升

多羅尾村

一高貳百五拾三石貳斗三升七合

杉山村

一高貳百石四斗

中野村

一高四拾壹石六升三合

下野村

一高八拾貳石壹斗四升

畑村

一高百三拾八石壹斗八升八合

長野村

高合千五百石八合

右之通御座候、以上。

辰四月

多羅尾織之助

辦事御役所

○ 江州甲賀郡之内

高千石 櫻井鏗之助

右之者私分家御座候處、勤 王素志有之、去六日江戸表發足、昨日御當地到著仕候、就テハ分限相應勤勞 王事爲仕度存候、宜鋪 御執成被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段御届旁奉願上候、以上。

四月廿日

櫻井遠江守

○四月二十二日批紙

願文之旨趣被 聞食置、追テ何分之儀可被 仰出ニ付、先差扣可罷在旨、可相達候事。

○ 奉願上口上書、

私儀兼テ

勤王志願ニ付、家來之者ヨリ 朝廷御用相勤、私素志相遠度段々奉願上候處、御容受被成下、銘肝難有奉存候、早速上京可仕處、内外不如意、彼是延引奉恐入候、此度上京仕候ニ付、此段參上御届奉申上候、何卒宿願之通身分相當御用被爲仰付候ハ、私儀ハ不申上及、血盟家來之者ニ至迄、誠ニ難有奉存候、於旅宿 御沙汰奉相待候、將又 大總督様沼津宿御本陣ニオイテ御印鑑頂戴、私赤心誓書別紙之通差上候處、御容受ニ相成難有奉存候、其砌頂戴之御印鑑持參上納仕候、誠惶頓首。

慶應四辰年四月廿日

辦事御役所

櫻井遠江守分家

櫻井鏗之助

○四月二十二日批紙

追テ何分之儀可被 仰出ニ付、先差扣可罷在候事。

○別紙ハ之ヲ略ス。

○奉歎願候口上覺、

御政典御一新被 仰出候ニ付、分家九十郎上京之儀、速ニ申遣候處、病氣ニテ平臥之折柄ニ付、精々療養差加、乍延引二月廿八日押テ江戸表出立仕、於駿府 大御總督府様へ相願、遵奉之誓紙差上、御間濟之上 御印鑑頂戴仕、尾州名古屋迄罷登候處、舊病再發仕、旅行難相成、不得止事同所ニ滞留養生仕候折柄、先達テ別紙歎願申上候節、以御附札被 仰渡候儀速ニ申遣候ニ付、押テ同所發足仕、去四日上著仕候段申出候ニ付、不取敢以家來共御届申上候儀ニ御座候、尤 朝命遵奉之素願私迄度々申出居候ニ付、猶呼寄、篤ト心底相糺候處、皇國ニ生育仕候へハ、何等之儀御座候共、朝命於遵奉之儀ハ更他念御無座、如何體之御奉公ヲモ相勤度段吳々モ申出候、然ル上ハ私ト少モ不異候間、當人ヨリモ別紙之通爲奉歎願候、乍去何分微薄祿之者ニテ不任心底奉恐入候間、何卒私へ附屬仕、身分相應爲奉勤 王度奉存候、勿論心中聊以相違之儀無御座、只々勤 王之道素ヨリ之志願ニ御座候間、何卒赤心之情實御憐察被成下、九十郎上下、土地人民ニ至迄安堵仕候様、速ニ 御沙汰之程千祈萬禱、伏テ奉歎願候、以上。

四月廿七日

辦事 御役所

青木民部少輔

○四月二十九日批紙

同姓九十郎願面へ付札之趣、同様相心得候様被 仰出候事。

奉歎願口上覺、

御政典御一新被 仰出候ニ付、東山道鎮撫 御總督府様ヨリ被 仰渡候御趣意、竝本家民部少輔ヨリ奉歎願候節、御附札ヲ以歸順之道相立、上京仕奉歎願候節、何分之儀可被仰出段被 仰渡候御儀モ御座候間、私儀早々上京之上奉歎願候様、右同人ヨリ申越候ニ付、急速上京可仕候處、去秋家督以前ヨリ病氣平臥罷在、上京延引仕奉恐入候ニ付、不取敢東山道 御總督府様へ、乍微少御軍用御片端ニモ被成下候様奉願、金穀奉 獻納置、精々療養差加、乍延引二月廿八日江戸表出立仕、於駿府 大御總督府様へ相願、遵奉之誓書差上、御用濟之上御印鑑頂戴仕、尾州名古屋表迄罷越候之處、舊病再發仕、旅行難相成、不得止事同所ニ滞留養生候處、東山道 御總督府様へ出兵可仕候様、尾州藩荒川彌五右衛門ヨリ被相達候ニ付、召連候人數之内殘置、三月晦日同所出立、去ル四日上著仕、其節御届申上候儀ニ御座候、尤私儀是迄先祖ヨリ之規則相守、朝命遵奉之志繼續仕候儀ニ付、更ニ他念無御座候ハ、勿論之儀ニ御座候間、如何體之御奉公ヲモ相勤度素願ニ御座候得共、何分微薄祿之者ニテ不任心底、奉恐入候間、本家民部少輔へ附屬仕、身分相應之奉勤 王度奉懇願候、右赤心之條々御憐察、微忠御採用被成下置候様奉蒙 御沙汰度奉願上候、以上。

四月廿七日

辦事 御役所

青木九十郎

○四月二十九日批紙

獻金、出兵等之儀被爲 聞食置候、追テ何分之 御沙汰可奉待候様、被 仰出候事。

○乍恐以書付奉願上候、

方今 朝廷御一新御改政ニ付、私儀急速上京仕、勤王志願之趣、去三月家來之モノ御當地 辦事御役所へ奉懇願候處、追テ何分之儀可被 仰出候事、

復古記 卷八十五(第三) 明治元年五月十五日

右之通御掛紙頂戴仕、直様江戸表へ家來罷歸申間候間、急速私並罷籠次郎共板橋宿ニテ 御總督様へ御掛紙之次第ヲ以相  
伺候處、右志願ニハ甚々延引仕候間、一刻モ早ク上京可仕旨被 仰付候ニ付、御機嫌御伺之上、道中通行之御印鑑頂戴  
仕度段奉願候處、其儀ニ不及、前書之次第申立、通行不苦旨、赤松森之助、柳田竹槌太郎、被申間候ニ付、中山道筋旅行、  
無滯元知行所近江國坂田郡長澤村迄罷越候處、近若御裁判トシテ 御總督様大津驛へ御出張之趣奉拜承候間、前書之趣  
申立、入京之儀奉伺候處、御間濟被成下置候ニ付、同驛出立、一昨廿五日御當地富小路四條下ル帶屋源之助方旅宿ニテ、  
謹慎罷在候間、御憐愍之御沙汰被成下置候様、偏ニ奉願上候、以上。

四月廿七日

内藤 甚 郎

辨事 御役所

○ 御大政御一新ニ付、私儀速上京仕、相應之御用ヲモ奉願度御座候處、久々病氣罷在候ニ付、不得止去二月爲名代家來上京爲  
仕、赤心之程以書附 參與 御役所へ奉建白候處、御落手ニ相成、冥加至極難有仕合奉存候、然ル處此節病氣追々快御座候  
間、不取敢上京仕候、何卒格別之以 御憐愍、私相應之御奉公被 仰付被下置候様仕度、依之由緒書相添、此段只管奉歎願  
候、恐惶謹言。

慶應四戊辰年四月二十七日

水谷 主 水 勝昌 花押

辨事 御役所

○ 四月二十九日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰出候事。

○ 由緒書ハ之ヲ佚ス。

太郎左衛門儀勤 王盡力仕度志願ニ御座候間、早速上京、相應之御用被 仰付候様可奉懇願心底ニ御座候處、去冬ヨリ持  
病之疝痛差起、春以來拘攣甚敷、種々療養仕候得共、當節ニ至疲勞相募、病床ニ困臥罷在候ニ付、隱居之私不取敢罷出候儀  
ニ御座候、尤快氣次第早々罷登候儀ニ御座候間、何卒高大之 御仁慈ヲ以、快氣仕候迄 御恩貸被成下、此程御達申上候通  
リ、先私へ何分之 御用被 仰付被下置候様仕度、只管奉哀訴候。

四月廿八日

松平 勘 解 由

辨事 御役所

○ 四月二十九日批紙

申出之趣被 聞食置候、追テ何分之 御沙汰可奉待候事。

私知行所之内河内國交野郡坂村陣屋へ家來差置候處、當正月事件之後、長州藩第二中隊嚮導三人罷越、此度 勅命ニ付  
御味方可仕様被申達、恐入奉畏候旨御請仕、血判狀差出、右之趣江戸表へモ申達、 御沙汰奉待候様演達之旨承知仕、早速  
罷登可申之處、舊冬中ヨリ病苦罷在、押テ旅行モ難仕、就テハ未男子無御座候ニ付、去ル丑年中井主水次男乙次郎儀養子ニ  
約定仕置候處、當時幼年ニハ御座候得共、右陣屋へ引取、御用之端ニテモ可奉歎願、私儀ハ快方次第早々上京可仕旨、家來  
共迄申遣候處、前件歎願之次第、河州御取締北條相模守へ取絶候趣ニテ、同人家來ヨリ添書ヲ以右願書辨事御役所へ進達  
仕、無滯御落手相成候由、然ル處右添書へ御附札ヲ以、歸順之道相立、上京歎願仕候ハ、何分之 御沙汰可被 仰出、其  
内相續之儀ハ不被及御沙汰旨被 仰渡候趣、且又前件歎願之廉モ御座候哉、今般 行幸之節右陣屋 御小休所ニ被 仰付  
候段、永々之規模ト冥加至極難有仕合奉存候、尤私儀ハ去寅年以來中奥小性廢止後、勤仕竝寄合被申付候得共、前ニモ申  
上候通、舊冬中病床罷在候儀ニテ、春來事件以後、於關東兵隊壹人モ不差出、勿論役義等モ一切相勤不申、無油斷加療養、此  
節漸快方御座候ニ付、武州池上於本門寺先鋒 御總督府様へ申上、今般上京仕候儀ニ御座候、依之、何卒前條之次第 御憐



察被成下、如何様ニモ寛大之 御所置被 仰付被下置候様、只管奉歎願候、此段御執成之程偏奉願上候、以上。

四月廿八日

水野但馬守

辨事御役所

○四月二十九日批紙  
先達テ附紙之趣可致承知候、猶近々被 仰付候儀可有之ニ付、差扣罷在候様被 仰出候事。

○

私分知同姓加賀守儀、今般粹雅次郎一同上京仕、最前奉歎願候通、勤 王之素志相違申度旨依頼申出候、尤當三月九州鎮臺所へ同姓豊千代丸家來御呼出シニテ、加賀守領知、當分豊千代丸御預ケ被置候條、高辻殘殺等取調可申出旨被 仰渡候趣御座候間、豊千代丸ヨリモ猶又願出可申、可相成儀ニ御座候ハ、此度當人ヨリ願出之通分限ニ應シ候御奉公爲仕度奉存候間、願之通被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段奉願候、以上。

四月廿九日

小笠原幸松丸

辨事御役所

○閏四月二日批紙

申出之趣被 聞食置候、追テ何分之儀可被 仰出候付、其内差扣罷在候様、加賀守へ可相達候事。

○

私儀 朝命違奉他念無御座候間、最前奉歎願候處、歸順之實効相立、上京之上願出候得ハ、何分之儀可被 仰出、陣屋向之儀ハ九州鎮臺所へ可伺出旨被 仰渡、奉畏候、先達御届申上候通、粹雅次郎召連上京仕候、尤小身之儀ニ付、家元同姓豊千代丸へ附屬仕、應分限候御奉公仕度奉存候間、何分之儀被 仰付候様奉願候、將又陣屋向之儀ハ九州鎮臺所へ可伺出候様、家來へ申付置候、然ル處其以前同國隣境之儀ニ付、豊千代丸方へ依頼仕、鎮臺所へ伺之上、同人家來差越取締罷在候、其後

同人家來鎮臺所へ被 召出、私領地當分豊千代丸へ御預ケ被置候條、高辻殘殺等取調可申出旨被 仰渡候ニ付、取調委細書付差出候旨申越候間、此段モ申上候、何卒本領安堵之御沙汰偏ニ奉懇願候、以上。

四月廿九日

小笠原加賀守

○閏四月二日批紙

追テ何分之儀可被 仰出候ニ付、其内差扣罷在候事。

○豊千代丸ノ申請書ハ之ヲ略ス。

青山内記 青山主水 青山内膳 青山釦之丞

私分家右四人之者、當二月同人共家來ヨリ奉申上候通、彌以私同様違奉 王事仕候テ、分限相應之御用筋被 仰付被下度奉願候、尤知行之儀ハ恐入候申上方ニハ御座候得共、是迄之通被 仰付被下候様奉千禱萬祈候、左候得ハ擢精忠奉 命爲仕候間、以 御憐恤御寛洪之 御廟議ニ被爲 處被下候得ハ、厚感戴、俱共永久可奉報 御高恩候、誠恐誠惶敬白。

四月

青山峯之助

○四月九日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰付候間、先差扣罷在候様被 仰出候事。

○

一右知行所攝津國河邊郡武庫郡之内ニテ貳千五百石、下總國海上郡香取郡之内ニテ三千石、是迄相領居候事、  
一當三日京著仕候ニ付、本書之通分限相應之奉蒙 御用度奉存候事、  
高五千五百石 青山内記  
高五千石 青山主水

一右知行所攝津國河邊郡武庫郡之内貳千石、三河國加茂郡之内貳千石、上野國山田郡邑樂郡之内千石、是迄相領居候事、  
一去年十月十日江戸表出立、上京之心得ニテ旅行仕、兼テ所勞之處、押テ出立仕候故歟、途中ヨリ猶更相勝不申候之間、一ト先  
三州知行所へ立寄、療養仕候得共、兎角同篇ニ付、今以同所ニ滞留罷在候間、少々ニテモ快方ニ相向候得ハ、不日上京仕  
度旨申越候間、京著之上内記同様奉蒙 御用度奉存候事、  
高七百石 青山内膳

一右知行所攝津國河邊郡武庫郡之内ニテ相領居申候事、  
一去年御届申上候通、内膳儀ハ兼テ所勞ニ付、悴吉次郎爲名代去月廿九日京著仕候、尤小身者之義ニ御座候得ハ、相應ニ被  
爲召使被下度奉存候事、  
高三百石 青山釧之丞

一右知行所攝津國武庫郡之内ニテ相領居申候事、  
一同人儀ハ早速上京可仕之處、幼稚之者ニハ御座候得共、此節江戸表出立仕候趣ニ付、不遠上京モ可仕ト奉存候、尤小身且  
幼少之儀ニ付、成長迄之處私厄介ニ仕置、小身相應ニ御軍役爲相勤、一己之進退相成候上ハ、相應ニ被爲 召使被下候様  
仕度奉存候事、  
右夫々厚被爲 聞食、品能 御沙汰被成下候様奉願上候、以上。  
青山峯之助

四月

○ 奉歎願候書付、  
今般 王政御一新之砌私知行所ニ差置候郷士竝家來ヨリ、勤 王御用奉歎願候處、御許容被成下、右歎願書へ 御附  
札ヲ以 御達之趣奉拜承、迅速上京可仕之處、所勞ニテ延引相成、漸去月十四日江戸發足仕、同廿二日於駿府表 大總督

宮様へ猶又勤 王御用奉歎願候處、御許容被爲成下、即今日上納仕候、  
御印章頂戴仕、上京之上勤 王御用奉歎願候條ハ、別紙之通ニ御座候、然ルニ差急之旅行ニ付、由緒書、家譜等持參不仕  
候、依之、急速取寄可申候間、夫迄之處御宥容被成下候様仕度奉願候乍去勤 王御用之儀ハ、當今專務ニ心得罷在候ニ付、  
何卒以 御憐愍相應之御用被 仰付被下度奉存候、依之、別紙ニ通相添、猶又奉懇願候、偏ニ 御執成 御執奏之程奉願  
候、以上。

慶應四戊辰年四月

船越柳之助

辨事傳達 御役所

○四月十九日批紙

別紙歎願之趣被爲 聞食置候、追テ何分之 御沙汰被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

○別紙二通

乍恐以書付奉懇願候、

私先祖儀ハ

駿河國有度郡船越村之郷士ニテ、其國之國司へ致奉職、代々罷在候處鎌倉之右幕府創業之頃ヨリ旗下ニ被召出、已ニ文治  
二年梶原父子叛逆之節、追討戰功ニ寄、采地加増、淡路國須本ニ居城仕、時之政府ニ仕罷在候、爾來豐太閣四國出師之砌ヨ  
リ追々替地ニ相成、別紙高附之通御座候、然ル所其頃徳川内府ニ親有之、慶長五年關ヶ原之役ニ從、戰功有之ニ付、和州  
宇智郡異安寺村外四ヶ村ニテ千五百石餘加増、都合六千貳百七拾六石餘、内七百石次男へ分知仕、爾後五千五百七拾六  
石餘ニテ高祖父實ハ實父駿河守迄相應役義相勤候得共、曾祖父實兄左門以來病身或ハ天死等、養父實ハ兄久五郎病身ニテ寄合ニ  
御座候、私儀相續間モ無御座候間、何之役義モ相勤不申、然ル處今般當徳川叛罪ニテ奉蒙 御譴責、當時上野ニ引籠謹慎  
罷在候條、於私モ重々奉恐入候、然ルニ私儀小身不肖ニ御座候得共、兼々普天下率土濱之意味、知行所差置候郷士家來共

末々ニ至迄服膺爲仕置候處今般 王政御一新ニ付、右之者共當正月中勤 王奉歎願候次第ニ御座候、然ル處 御許容被成下、右歎願書へ 御附札ヲ以 御達之趣奉拜承、迅速上京可仕之處、所勞ニテ延引相成、漸去月十四日江戸發足仕、廿二日於駿府表 大總督宮様へ猶又勤 王御用相勤度志願之趣奉歎願候處、即別紙寫之通 御印章頂戴仕、同晦日上著仕、翌朔日右之段御届奉申上置候、依之、少人數ニテ奉懇願候ハ甚以恐多御座候得共、何卒勤 王相應之御用被 仰付被下度志願ニ御座候、此段 御許容被 成下候ハ、廣大之 御恩澤ニ奉存候、何卒以 御懽懽 御執成 御執奏之程奉懇願候、誠恐誠惶謹言。

○ 奉歎願候覺、

今般 王 政御一新ニ付、私知行所ニ差置候郷士並家來共ヨリ、勤 王御用奉歎願候處、御許容被成下、右歎願書へ以御附札御達之趣奉拜承、上京仕候、然ル處知行所左之次第ニ御座候、  
攝州川邊郡 上坂部村 森 村 七松村 下河原村  
同州豐島郡 岡山村 西市場村 神田村  
河州交野郡 禁野村 楠葉村  
右拾ヶ村、當時長州ヨリ封印附候由ニ御座候。  
大和國宇智郡 御山村 靈安寺村 島野村 瀧 村 車谷村  
右五ヶ村、當時 久我殿御支配ニ相成候由ニ御座候、  
右之外攝河村々ニ預置候金穀竝大坂船越町藏屋鋪壹ヶ所、其餘諸道具共長州ヨリ取調ニ相成候ニ付、其掛同藩堀官三方へ左之通差出申候由、  
三月十六日差出候 攝州川邊郡上坂部村ニ差置候家來 廣田權左衛門  
一金五百拾七兩三朱ト錢四拾八文

同十七日ニ差出候 右 同 斷 廣田利右衛門  
一同五百兩壹朱ト錢五百五拾二文  
一米九拾石 攝州川邊郡 上坂部村 一同七拾石 同州同郡 七松村  
一同拾四石 同州同郡 森 村 一同八石 同州豐島郡 岡山村  
右之通村々ヨリ直ニ差出申候。

覺、

一青銅大砲 但玉目貳百目 壹挺 一鎗 貳筋 一陣太鼓 壹ツ 一馬印 壹基 一武器長持 壹棹  
内 ゲヘル筒 四挺 和筒 貳挺 幕 壹張 手錠 拾四挺  
一三ツ道具 壹組 一手銃臺 壹ツ 一切棒駕籠 壹挺  
右之通御座候、然ルニ勤 王御用可相勤手當ニ御座候處、豈圖、書面之通ニテ差向御用途ニ差支、殆當惑仕候、乍去長藩御取調被下、相違モ無御座候ハ、何卒格段之以 御懽懽、右大坂藏屋鋪竝金穀諸道具トモ夫々差戻候様、同藩へ 御沙汰被下置候様仕度奉存候、尤右金穀ヲ以勤 王御用相勤候ハ、廣大之 御恩澤ト奉存候、此段只管奉歎願候、偏ニ御執成之程奉願候、以上。

慶應四戊辰年四月

辦事傳達 御役所

船越柳之助

復古記 卷八十五 第三 終

# 復古記 卷八十五 第四

○今般別紙歎願書ヲ以、大和國鎮撫御總督久我大納言様へ願出候處、早々上京、太政官代へ出願可仕候様御達御座候ニ付、時之助召連罷出申候、何卒歎願之情實厚 御垂憐被成下、相應之御用被 仰付被下候様奉懇願候。

織田出雲守家來  
岡田與三右衛門

辰 閏四月二日

○ 辨事 御役所

○ 閏四月三日批紙

別紙時之助願面、附紙之通相心得、其段同人へ可相達候事。

○ 當春本家織田出雲守並對馬守家來共ヨリ歎願仕候通、對馬守儀早々上京、勤 王之實効相立可申旨、精々申越候得共、對馬守儀病氣罷在、被是遷延奉恐入候ニ付、私儀爲名代上京可仕旨申聞候間、去ル三月廿三日江戸品川驛ヨリ乘船仕候處、折節屢難風ニテ、漸去月廿日大阪表著岸仕候、然ル處船中ヨリ少々病氣罷在、精々療用差加快復仕候間、和州御總督府へ出雲守ヨリ之願書差出候處、別紙之通以御附札上京仕、哀訴仕候様被 仰出候付、一昨廿九日著京仕候、何卒出雲守ヨリ願出候通御座候間、鄙情 御憐察被爲垂、相應之御用向被爲 仰付被下置候得ハ、一際粉骨碎身仕、奉報 天恩度赤心御座候間、偏ニ歎願之通 御許容被成下候様、泣血奉懇願候、以上。

織田時之助

閏 四月二日

○ 辨事 御役所

○ 閏四月三日批紙

追テ何分之儀可被 仰出ニ付、其中差控可罷在候事。

○ 大和鎮撫總督ニ上リシ書ハ之ヲ略ス。

○ 再請書

乍恐再奉歎願候口上書、

當正月中對馬守勤 王之儀、本家織田出雲守並對馬守土著家來共ヨリ願書奉差上候處、御採用被爲成下、同人義早々上京歸順實効相立候上、相當之 御沙汰可被爲 在候條、以御附札被仰出、雖有仕合奉存候、尤於對馬守モ方今形勢考察仕、始祖信長勤 王之志ヲ繼續シ、何時上京可仕哉モ難計、在所家來共ニモ兼テ其心得可罷在旨、昨年來申付置候儀ニ御座候、然處對馬守儀早春來病氣罷在、追々上京遷延奉恐入候ニ付控、相續人實弟時之助罷登、 王事勤勞可仕旨申聞候間、當三月廿三日江戸品川驛乘船、海上難風ニテ漸四月廿日大阪表著岸、同月廿七日大和國 御總督府へ御届申上、依御差圖同廿九日著京、本家出雲守家來同伴、 太政官へ罷出、歎願書奉差上候處、御留置相成、閏四月四日被 召出、追テ何分之儀可被 仰出旨、以御附札被 仰渡、難有謹慎罷在候、引續就御沙汰、家系奉差上候、然ル處本月中旬比萬石以下之面々、舊領安堵被 仰出候趣傳承仕候、何卒私儀出格之被爲垂 御慈憐被 召出、相應之御用向被 仰付被下置候様、乍恐再奉歎願候、右 御許容被爲成下候ハ、難有仕合奉存候、以上。

元高家席

織田時之助

辰 五月廿九日

○ 辨事 御役所

私分家 高七千石 永井左門

右左門、大之丞儀、今般於江戸表 御先鋒御總督様、大御總督様へ勤 王赤心之趣、並兼テ附屬奉願差出置候人數爲取締、上京仕度奉歎願候處、御許容被成下、入京 御免之御印鑑御下ケ被下置、上京仕、左門、大之丞始、於私モ冥加至極、雖有仕合奉存候、就テハ乍小身 尊王、爲國家此上如何體ニモ身分相應之 御奉公勉勵仕度段、右兩人只管奉願候、依之、乍恐何卒奉蒙 御沙汰候様仕度、此段偏奉願上候、以上。

閏 四月 三日

永井信濃守

辨事 御役所

○閏四月四日批紙

追テ何分之 御沙汰被 仰付候間、差控罷在候様、左門、大之丞兩人へ可申間旨被 仰出候事。

歎願書、

私共儀本家永井信濃守へ附屬仕、當辰二月十三日 朝廷へ遵奉、知行所在合之人數差出、御用相勤申度段、信濃守ヨリ奉願候處、三月五日以 御附紙、願之通被 仰付候間、同十九日ヨリ人數京地へ差出置申候處、四月十日於聖護院村銃隊調練御見分有之候旨、被 仰出候ニ付、人數差出、無滞相濟申候、其後二七之日同所へ罷出調練仕候、私共儀ハ於江戸御先鋒 御總督様へ上京之儀奉歎願候處、即日御聞濟被成下候ニ付、同日 御印鑑頂戴仕、江戸出立、於天津驛長谷様へ上京之儀奉願、御聞濟被成下、閏四月朔日京著仕、於御池屋敷左門儀ハ眞野永之助方、大之丞儀ハ佐伯要藏方へ旅宿仕、依之、即日 岩倉様へ御届申上、同日辨事御役所へ京著竝旅宿之爲御届、私共出勤仕候、同三日 大御總督様ヨリ頂戴之 御印鑑辨事御役所へ返上仕、同日信濃守ヨリ私共勤 王之歎願書差出申候處、同五日以 御附紙、追テ何分之 御沙汰有之候迄、差控罷在候様被 仰出候旨、奉畏罷在候處、中條左衛門督、朽木主計助ヨリ知行所高附竝由緒書等差出可申

段達ニ付、早速取調、左衛門督へ差出置申候、同十八日於聖護院村調練之節、私共出席仕候テモ不苦候哉之段、信濃守ヨリ奉伺候處、以 御附紙伺之通不苦旨被 仰渡候、右前件之内、勤 王歎願之儀ニ付差扣可罷在旨、奉敬承候儀ニハ御座候得共、何卒出格之以 御仁惠、相應之御用被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、依之、此段奉歎願候、以上。

五月 九日

永井大之丞  
永井左門

辨事 御役所

○私采地能登國內ニ御座候ニ付、今度北陸道御總督様御改之上、加州藩竝在住家來之者へ御達之趣ニ付、直様出京仕、直ニ御届申上候儀モ奉恐入候ニ付、一往加州藩ヨリ申達相伺、御沙汰之趣同藩ヨリ相達、奉敬承候、依之、別紙奉歎願候間、宜 御沙汰被成下候様奉願候、以上。

閏 四月 七日

徳川家來

土方兼三郎

辨事 御役所

私儀今度上京仕候ニ付テハ、御一新之折柄、王事勤勞仕度、何様之 御用被 仰付候共、粉骨碎身實踐相顯シ相勤申度、只管奉歎願候、此段宜 御執奏、御沙汰被成下候様奉伏願候、以上。

閏 四月 七日

徳川家來

土方兼三郎

辨事 御役所

○閏四月十五日批紙

追テ何分之 御沙汰可被 仰出候間、差扣罷在候様被 仰付候事。

○ 今般 王政復古被 仰出、雖有奉敬承候、素ヨリ 朝觀之底意御座候處、小身之儀故不任心底、空時日ヲ送罷在候處、不圖當二月東海道御先鋒 御兩卿様ヨリ重臣之者被爲 召、段々 御指揮被成下、從者末々ニ至迄誠以難有、雀躍奉拜承候、聊以二念無御座候段、重役之證書、引續自己之印紙奉差上置、早々江戸發足仕、於旅中 大總督 宮様へ奉伺 天機、御先鋒 御兩卿様へモ拜謁仕、萬端無滞相勤在著仕候付、何卒上京被 仰付、諸候同様之 御用向被 仰付被下置候様、去月十四日奉歎願候處、本人上京之上ニ無之テハ何分之 御沙汰不被爲及旨、御附札ヲ以被 仰出、敬畏奉恭承候、則去月廿七日在所表發足、去ル四日京著仕候段御届奉申上候、私家之儀ハ本姓新田ヲ唱候儀ニテ、其祖宗ヲ相尋候へハ、乍恐清和天皇之後胤、新田大炊助義重十二代、松平和泉守信光長男松平左京亮守家、三州竹谷村築城仕、累代若干之地ヲ鎮撫仕居候處、其後徳川家之執政至種々之浮沈御座候テ、則玄蕃頭清昌代ヨリ萬石以下之高ニハ衰微仕候得共、今以私代ニ至候テモ、諸候之列ニ加リ罷在候、方今往昔之 御制度ニ被爲復、從來之弊風ヲ被爲除候御儀ト雖有仕合奉存候、斯 御一新之折柄ニ御座候へハ、國恩爲可奉報謝戮力勉勵仕度志願御座候間、微祿ニハ御座候得共、諸候竝之 御用向被爲 仰付被下置候様、奉懇願度、然ル上ハ祖宗之轍ヲ踏候儀ニテ、多年之底意乍恐相違、難有仕合奉存候、何卒先願之趣御比按被成下置、宣鋪御裁判拜戴仕度奉仰候、只管前條之件々御採用被成下候様仕度、此段幾重ニモ奉歎願候、以上。

閏 四月 十日  
辦事 御役 所

奉願上口上覺、

私共儀

乍恐幼年且病氣ニテ引籠奉恐入候得共、押テ上京仕度候ニ付、去四月十四日發足仕、於品川宿 大總督宮様へ奉御機嫌候處、勤 王赤心之筋相立候ニ付テハ、 御印鑑奉頂戴、在所表へ罷越候旨蒙 御沙汰、冥加至極、難有仕合奉存候、去月廿七日在所表へ歸村仕候處、薩州四番除石紙新五右衛門様ヨリ地領藏口假封被爲附、恐入當惑難罷仕、直様上京仕、御印鑑竝上京届書、伺書迄奉差上候處、御許容被 成下、冥加至極、難有仕合奉存候、乍恐身分相應之御用向奉相勤度心願ニ御座候間、何卒御憐愍ヲ以 御用被 仰付候様、偏ニ奉願上候、就テハ河内地領藏假封之儀、厚 御沙汰ヲ以是迄之通歸村可相成様被 仰渡候へハ、廣大之御慈悲、如何計難有仕合奉存候、右乍恐御沙汰之程偏ニ奉願候、以上。

閏 四月 十日

河内國河内郡水走村  
會 我 勝 太郎  
同州同郡同村  
會 我 豐 之丞

辦事 御役 所

○批紙

追テ之可奉待 御沙汰候、尤河内國領地ニオイテ、藏假封之儀ハ封放渡方イタシ候様、薩州へ相達置候間、彼方へ掛合可申候事。

○ 高四千石 播州加東郡穗積陣屋  
八木但馬守義、舊疾痼症兎角博々敷無御坐難罷仕候、仍テ旅行難仕、此上遲延仕候テハ深奉恐入候ニ付、同姓十三郎爲名代、今般上京仕候、元ヨリ勤 王之素志相違無御座義ハ、兼テ奉申上候、何卒身分相應之御用被 仰付被下候へハ、難有奉存候、此段宜奉願候様、備前守申付越候、何分宜様奉願上候、以上。

復古記 卷八十五(第四) 明治元年五月十五日

二七五

備前侍從内

澤井權次郎

閏四月十日

○ 奉歎願候口上覺、

今般 御一新御改革被 仰出候ニ付テハ、急速上京、勤 王可仕志願ニ御座候處、兼テ奉申上候通、持病之痼症追々脛孿差募、押テ旅行モ難仕、誠以奉恐入候、付テハ彌上京不仕候テハ難相成候得共、前條之趣病床ニ罷在候次第ニ付、無據不取敢爲名代悴十三郎、今般上京爲仕候、何分相應之御用向被 仰付候様、只管奉懇願候、誠恐謹言。

八木但馬守

補職 花押

辰閏四月朔日

○ 奉歎願候口上覺、

當春來知行所陣屋詰家來之者共ヨリ奉願候通、父但馬守儀、早速上京仕、隨身之 御用奉窺度志願ニ御座候處、兼テ申上置候持病之痼症追々脛孿差募、押テ旅行モ難仕、段々延引相成奉恐入候ニ付、不取敢私儀當月朔日江戸表發足仕、同二日横濱英國蒸氣船乗組、同四日神戸へ著、翌五日同所出立、去ル六日參著仕候、此段御届申上候、何分相當之御用被 仰付候ハ、難有仕合奉存候、此旨宜敷御執成之程、偏ニ奉懇願候、以上。

八木十三郎

補政

辰閏四月九日

○ 辦事御役所

先般私家來共ヨリ森對馬守殿家來衆へ相手寄候テ、勤 王赤心之始末、備前御藩姫路表鎮撫之砌奉懇願置候處、同藩ヨリ右之次第 太政官代へ早々御達被下候趣、且於江戸表モ私義上京仕度段、徳川家へ出願仕候處、其節下ケ書ヲ以許容ニ相成、依之、去ル三月十五日江戸高輪浦ヨリ乗船仕、差急候得共海路不都合多ニテ、漸本月七日京著仕候間、兼テ家來共ヨリ奉願上候次第柄、御垂憐被爲成下度奉願上候、此段御届奉申上候、以上。

松井伊織

閏四月十二日

○ 辦事御役所

當二月橋本少將殿、柳原侍從殿御雜掌ヨリ御出陣先へ私家來重役之者御呼出ニ付、早々差出候處、御參謀方ヨリ私竝家來之心底御尋問御座候間、即重役之者ヨリ御答申上、御請書モ差上、其節尾州表ヨリモ 朝命之趣ヲ以重役之家來御呼出ニテ御達相成候御請書、是又重役之者ヨリ差上、猶勤 王遵奉之證書、尾張大納言殿迄差出、御 奏達相成候段御達御座候間、早速上京仕度奉存候處、其頃暫胸痛ニテ不相勝罷在候折柄、官軍御通行之節、東海道江尻宿ヨリ蒲原宿迄兵食取計、宿々御警衛、人馬繼立等世話御用被 仰付、御引續 大總督宮様駿府 御著城ニ付、病氣押テ右 御城へ罷出、乍恐奉伺 天機、難有仕合奉存候、且又三月廿日私儀駿府於 御城、久能山海岸御警衛被 仰付、是迄廟所警衛渡有之兵器竝附屬之者、當分被成御預、御警衛手當ニ仕候様 大總督宮様被 仰出候段御達相成、誠以難有仕合奉存候、然ル處上京段々延引罷成候ニ付、右御警衛之儀、家來竝附屬之者共へ申付置、爲窺 天機上京之儀、於駿府伺之通相濟候後、四月八日駿府 御城 大總督宮様御出立ニ付、宿々御用、追々無滯相勤候得共、何分小高之儀ニテ人少、行届兼、萬端心配仕候故、別テ前症耽ト不仕、彼是ニテ上京運延罷成候段ハ奉恐入候得共、右之次第幾重ニモ 御憐察被成下置候様仕度、奉歎願候、以上。

柳原越中守

慶應四辰年閏四月十四日

○閏四月十五日批紙  
申出之趣被 聞食置候事。

○私儀舊來長病罷在候得共、大政御一新被 仰出候ニ付、勤 王之實効相立、爲報 國勉勵仕度志願ニテ、押テ出京ハ仕候得共、出勤出來兼、歎息之至、深奉恐入候得共、滯京中御用筋家來共ヲ以爲奉伺度、何卒一片之赤心御諒察被成下置、前文之趣御聞届被成下候ハ、億萬難有仕合奉存候、此段只管奉懇願候、以上。

慶應四戊辰年閏四月十五日

大河内 孫三郎

辨事 御役所

○今般三河國御裁判所御取建、御總督様御下向相成候趣承知仕候、就テハ私知行所碧海郡根崎村ハ、幸近傍之事ニモ御座候得ハ、何卒右爲御警衛乍聊人數差出、御守衛奉申上、寸効相顯度、此段切奉懇願候、以上。

慶應四戊辰年閏四月十五日

大河内 孫三郎

辨事 御役所

○大政御一新被 仰出、御多端之折柄、是迄何之御用モ相勤不申、深奉恐入候間、御兵糧之内ハ貳百俵獻納仕度奉存候、此段御採用被成下候ハ、冥加至極、難有仕合奉存候條、偏ニ御沙汰之程奉願上候、以上。

慶應四戊辰年閏四月十五日

大河内 孫三郎

辨事 御役所

○再請書

先達テ別紙奉願上候通、私儀舊來頑固之宿病ニテ、素ヨリ出勤之儀ハ出來兼、奉恐入候得共、先般家來ヲ以 御用筋之儀被仰付候様奉願候處、歸順之道相立、上京及歎願候ハ、其節何分之儀可被 仰出旨被 仰出、難有奉存候、依之、勤 王之爲ニハ頑固之長病モ不願、押テ上京仕候、當節時候ニ應シ、病氣少々差加リ、甚苦心仕候、何卒格別之 御憐愍ヲ以、勤 王之素願速ニ被爲 聞食届候テ、急速 御沙汰被 仰出候様、再應奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年五月四日

大河内 孫三郎

辨事 御役所

○奉願上候覺、

今般 王政復古、天下御一新之期ニ至リ、王命ヲ奉シ候ハ勿論之儀ニ御座候處、既ニ歸順相立候者ハ寛大之 御沙汰可被 仰付哉ニ奉待承候、素ヨリ私儀奉勤 王度心願ニ御座候ニ付、今般關東ハ 總督府様御入ニ相成候ニ付、兼テ心願之奉勤 王度段奉歎願候處、四月八日願之通被 仰付、同日歸邑候條、御印證奉頂戴候ニ付、早速知行所近江國栗太郡總村陣屋ハ參著可仕候處、大總督府様關東へ御入ニ付、差扣罷在、御印證御引替奉願上候處、總督府様ヨリ御引替御渡相成、無滯當月五日總村陣屋へ參著仕候段、大津 御裁判所へ御届奉申上、且 御印證奉返上候儀奉窺候處、當 御役所へ奉返上候様御沙汰ニ付、奉返上候、且前文之趣意具ニ御聞届被成下、相當之 御奉公被 仰付被下置候様御執成被成下候ハ、冥加至極、難有仕合奉存候、此段厚以 御仁惠御沙汰之程、大津表ニ罷在奉待上候、以上。

高千石

慶應四辰年閏四月十七日

渡邊 嘉一郎

御辨事 御役所

○閏四月十九日批紙

復古記 卷八十五(第四) 明治元年五月十五日



輕裝上京之上差扣居、追テ之 御沙汰可奉侍候事。

乍恐奉歎願口上書、

今般太政御復古ニ付、從 天朝被 仰出候寛大之 御趣意奉拜承、素來勤 王遵奉之誠心、急度相違無御座候ニ付、先達テヨリ大和國知行所詰陣屋ニ罷在候家來共ヨリ、南都御總督府へ御届之上、御當地へ爲相詰置、先達テ中ヨリ私儀上京仕度心底御座候處、何分早春來病氣相勝不申候故、養生仕、追々快方ニ趣候ニ付、去月廿日東海道御參謀衆中へ歎願書差上、御印紙頂戴、翌朝江戸發足仕、箱根今切 御關所、其外御警衛之御場所無滞旅行仕候儀、全ク御蔭ヲ以故ト難有仕合奉存上候、尤道中川支等ニテ不計日數相重リ、當月十日南都表へ著仕、翌十一日同所御總督府へ歎願書差上候處、御取次奥田萬二郎殿ヲ以書付御落手被成下置、歸邑之上片時モ早々 太政官府へ歎願可罷出旨被 仰渡、奉畏、一應歸邑仕、直様御當地へ罷登リ候儀ニ御座候、右御參謀衆中ヨリ之御印紙竝箱根今切之御切手共、難有奉返納候、何卒此上之處寛大之御垂憐ヲ以御採用被爲成下、相應之御奉公被爲 仰付被下置候様、伏テ奉歎願候、右之趣御聞濟被爲成下候ハ、冥加至極、難有仕合奉存上候、以上。

戊辰 閏四月十七日

桑山修理

辨事 御役所

○ 閏四月十九日批紙

追テ何分之儀可被 仰出候付、差扣可罷在候事。

奉歎願口上書、

今般大政御復古ニ付、從 天朝被 仰出候寛大之御趣意奉拜承、素來勤 王遵奉之誠心、急度相違無御座候ニ付、先達テ大

和國知行所陣屋詰家來之者ヨリ、南都御總督府へ御届之上、御當地へ爲相詰置、私早々上京仕度心底ニ罷在候處、何分早春來久々病氣相勝不申候故、養生追々快方ニ趣候ニ付、去月廿日東海道 御參謀衆中へ歎願書差上、御印紙頂戴、翌朝江戸表發足仕箱根今切御關所、其外御警衛之御場所無滞旅行仕候儀、全御蔭故ト難有仕合奉存上候、尤道中川支等ニテ、不計日數相重リ、當月十日南都表へ到著仕、翌十一日同所 御總督府へ歎願書差上候處、御取次奥田萬次郎殿ヲ以書付御落手被成下、歸邑之上片時モ早々 太政官府へ歎願ニ可罷出旨被 仰渡、奉畏、一應歸邑仕、直様御當地へ罷登リ候儀ニ御座候、右 御參謀衆中ヨリ之 御印紙竝箱根今切之御切手共奉返納候、何卒此上之儀、寛大之以 御垂憐御採用被爲成下、相應之御奉公被爲 仰付被下置候様、伏テ奉歎願候、右之趣御聞濟被爲 成下候ハ、冥加至極、難有仕合奉存上候、以上。

慶應四戊辰年閏四月十七日

桑山 舍人印

辨事 御役所

○ 閏四月十八日批紙

追テ之可奉侍 御沙汰、其中差扣可罷在候事。

今般 王政御一新ニ付、關東ニテ達書之趣有之候間、私儀家族引具シ、知行所へ土著之上、早々上京仕、勤 王一途之志願御座候處、正月下旬ヨリ病氣有之、追々延引相成申候處、當節病氣快氣ニ付、土著仕度奉存候得共、知行所之儀ハ先達テ朝廷へ被召上候由、此度承知仕候間、家族共ハ殘置、一身ニテ上京仕、小身相應之御用相勤度奉願候、私采地之儀ハ氏祖秀吉北政所高臺院附屬以來之知行所ニモ御座候間、其儘被下置候ハ、重々難有仕合奉存候、右願之通被 仰付候上ハ、引續家族共土著爲仕度、此段幾重ニモ奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年閏四月十八日

木下辰太郎印

辨事 御役所

復古記 卷八十五(第四) 明治元年五月十五日

○閏四月十九日批紙  
追テ之 御沙汰可奉待、其中差扣可罷在候事。

乍恐奉歎願口上書、

今般大政御復古ニ付、從 天朝被 仰出候寛大之 御趣意奉拜承、勤 王遵奉之儀、他心無御座候ニ付、先達テヨリ大和國知行所陣屋詰家來之者ヨリ、南都 御總督府へ御届之上、御當地へ爲相詰置候間、私儀モ早々上京仕度心底罷在候處、何分早春來久々病氣相勝不申、無餘儀養生仕、追々快方ニ趣候ニ付、去月廿九日東海道 御參謀方へ歎願書奉差上、御印紙頂戴、去ル二日江戸表發足仕、箱根今切其外御警衛之御場所無滯旅行仕候儀、全御蔭故ト雖有、則當十六日南都表へ至著仕、同所御總督府へ歎願書奉差上候處、御落手被成下、早々上京、太政官府へ歎願可罷出旨、御取次以加藤勇殿被 仰渡候ニ付、直様出立、昨十九日夕至著仕候、依之、右東海道御參謀衆ヨリ頂戴之御印紙竝箱根今切之御切手共奉返納申候、何卒此上之儀、寛大之以 御垂憐御採用被爲 成下置、相應之御奉公被 仰付被下置候様、伏テ奉歎願候、右之趣御聞濟被 成下置候ハ、冥加至極、難有仕合奉存候、以上。

戊辰閏四月廿日

桑山錄太郎

○ 辦事 御役 所

奉歎願口上書、

右近江國甲賀郡栗太郡之内 高千二百石 織田熊三郎

今般 王政御一新ニ付、私儀勤 王一途ニ相心得、爲報國力相應之 御用忠勤仕度段、家來ヲ以 御先鋒 御總督様へ

奉歎願候處、御落手ニ相成、則 御印證頂戴仕、江戸表出立、知行所江州甲賀郡名坂村へ著仕、大津 御總督様へ歎願書奉差上置、一昨二十二日登京仕候、兩 御總督様へ奉願候通、相應之 御用被 仰付候者、粉骨忠勤仕度志願ニ御座候、何卒出格之 御仁恩ヲ以、御沙汰之程偏奉歎願候、以上。

慶應四辰年閏四月二十四日

織田熊三郎印

名乗書判

○ 辦事 御役 所

奉願候覺、

私分知同姓關次郎儀、同人先祖寛文二寅年三月六日安部主膳へ私高之内別紙之通分知仕、代々江戸城之兩番相勤、別段役向等不被申付罷在候處、今般被 仰出候 御一新之趣、難有奉畏、私同様勤 王之儀懇願仕候ニ付、心底之程私ヨリ相糺候處、聊モ一心無御座、皇國之御爲第一ニ心掛、精勤仕度心願之外更ニ別心無御座候ニ付、徳川家暇相願候趣ニ御座候、依之、私儀出兵等被 仰付候節ハ、人數之内へ相加、何方へ成共出勢仕、天朝之御爲粉骨碎身仕度旨駈ト申立候ニ付、此度私儀召連上京可仕處、其節關次郎儀病氣罷在候、然ル處追々全快ニ付、此度上京仕、滯京罷在候間、本人願之通、如何様ニモ被召仕被下置候ハ、於私冥加至極、難有仕合奉存候、依之、同人知行高取調、別紙相添此段偏奉歎願候、以上。

閏四月廿六日

安部攝津守

○ 辦事 御役 所

高千石

安部關次郎

辰歲四十四

高三百七拾貳石五斗六升八合 攝津國川邊郡 東桑津村 高百五拾六石三斗貳合 同國同郡 下食滿村

復古記 卷八十五(第四) 明治元年五月十五日

二八三

高三百五拾四石九斗五升貳合 同國同郡 久代新田村 高四百貳石 同國有馬郡 上津上村 右之通御座候、以上。

○ 奉願候覺、

私分知同姓政太郎儀、同人先祖元祿十四巳年六月廿八日安部小十郎へ、私高之内別紙之通分知仕、代々江戸城之兩番相勤、別段役向等不被申付罷在候處、今般被 仰出候 御一新之趣、難有奉畏、私儀同様勤 王之儀懇願仕候ニ付、心底之程私ヨリ相糺候處、聊モ一心無御座、皇國之御爲第一ニ心掛、精勤仕度心願之外更ニ別心無御座候ニ付、徳川家暇相願候趣ニ御座候、依之、私儀出兵等被 仰付候節ハ、人數之内へ相加、何方へ成共出勢仕、天朝之御爲粉骨碎身仕度旨、跪ト申立候ニ付、先般私儀召連上京可仕候處、同人儀病氣ニ付、療養相加、此節快方ニ御座候間、今度滯京罷在候ニ付、本人願之通如何様ニモ被 召仕被下置候ハ、於私冥加至極、難有仕合奉存候、依之、同人知行所高取調、別紙相添此段偏奉歎願候、以上。

閏四月廿六日

安部 攝津守

○ 辦事 御役所

高千五百石

安部 政太郎

辰歲二十二

高七百四拾四石三斗九升五合 三河國八名郡 養父村 高七百四拾四石壹斗六升三合 同國同郡 庭野村

高百六拾三石貳斗五升六合 同國同郡 鳥原村

右之通御座候、以上。

○ 奉願候覺、

私分知同姓政太郎、先祖ヨリ猶又分知仕候同姓留之丞儀、同人先祖寶永五子年閏正月五日安部萬次郎へ、小十郎高之内別紙之通分知仕、云々。以下上文ニ同シ

閏四月廿六日

安部 攝津守

○ 辦事 御役所

高五百石

安部 留之丞

辰歲三十四

高三百三拾五石九斗壹升五合 三河國八名郡 鹽澤村 高貳百三拾貳石六斗八升壹合 同國同郡 鳥原村

右之通御座候、以上。

○

今般 御一新之折柄、勤 王之儀懇願仕度志願ニ付、徳川家暇相願、先般本家攝津守上京之節附屬仕罷越候處、旅中ヨリ病氣ニ付、攝津守在所へ立寄、是迄療養仕、此節全快仕候ニ付、去月廿四日上京仕候處、又候所勞罷在候之間、著御届延引仕候、尤勤 王懇願之儀ハ攝津守ヨリ奉歎願候、依之、著御届並旅宿書相添、此段御届申上候、以上。

安部 攝津守 分知

五月二日

安部 關次郎

○ 辦事 御役所

今般 御一新之折柄、勤 王之儀懇願仕度志願ニ付、徳川家暇相願、先般本家攝津守上京之節附屬仕罷越候處、旅中ヨリ病

私儀

氣ニ付、在所表へ立寄療養仕、此節全快仕候ニ付、去月廿五日上京仕候處、又候所勞罷在候間、著御届延引仕候、尤勤 王  
懇願之儀ハ、本家攝津守ヨリ奉歎願候、依之、著御届竝旅宿書相添、此段御届申上候、以上。

守部攝津守分知

安部政太郎

五月二日

辦事御役所

○

私儀

今般 御一新之折柄、勤 王之儀懇願仕度志願ニ付、徳川家暇相願、先般本家攝津守上京之節附屬仕罷越候處、旅中ヨリ病  
氣ニ付、在所表へ立寄療養仕、此節全快仕候ニ付、去月廿五日上京仕候處、又候所勞罷在候間、著御届延引仕候、尤勤 王願  
懇之儀ハ、本家攝津守ヨリ奉歎願候、依之、著御届竝旅宿書相添、此段御届申上候、以上。

安部攝津守分知

安部留之丞

五月二日

辦事御役所

○

奉歎願候書付、

和州市郡十市村

村越三十郎

私儀祖先

高千二百石

豐臣家ニ相仕へ、采地千石知行仕居候後、持高之儘ニテ徳川家へ隨順、其後二百石加増、私代ニ至迄相勤罷在候處、今般

御一新 御復古之趣奉拜承候ニ付、早々上京仕、奉歎願候上、 朝廷へ御奉公可奉願上決心之處、昨初冬頃ヨリ持病之痛  
痛ニ相惱、引籠候ニ付、直様江戸表出立仕兼延引仕候ニ付テハ、遲滞之恐不少、種々手當仕、漸々快氣仕候ニ付罷登、則南  
郡御鎮臺へ御届申上上京仕、奉歎願候、右申上候通之筋目ニテ、征夷府ニ付相勤居候得共、徳川家取立恩願之者ニハ無御  
座候ニ付、殊更擲身命、無二精勤仕度心底、聊以相違無御座候間、何卒出格之以 御垂憐、此段被爲 聞食、何様ニモ 御  
召仕被成下度、幾重ニモ奉歎願候、此段 御許容被爲 成下候得ハ、冥加至極、難有仕合可奉存候、以上。

閏四月二十七日

村越三十郎印

辦事御役所

○ 閏四月二十九日批紙

追テ何分之 御沙汰可有之ニ付、差控可罷在候事。

○ 奉願上候覺、

一高千石 近江國高島郡栗太郎野州郡之内

私先祖渡邊久助均儀、本家渡邊久左衛門次男ニテ御座候處、右久助儀ハ慶安三寅年八月分知ニ相成、當時私儀ハ井戸左  
京四男ニ御座候養父渡邊宗治郎跡式相續仕、九代目ニ相成申候、安政五年年ヨリ文久二戌年迄、書院番相勤罷在候處、同  
年十二月病氣ニ付、願之上小普請入仕候、然ル處今般御形勢御一新ニ付、於關東被申渡候儀ハ、近畿關西ニ知行所有之  
向ハ從 朝廷御沙汰之品モ被爲 在候趣ニ付、關東ニ罷在候者采地ニモ離可及難澀候間、銘々存寄次第、采地へ可罷越  
旨ニ付、早速江戸表發足可仕之處、折角不快ニテ延引仕候得共、少々快方罷成候ニ付、押テ罷登候處、只今迄上京仕候儀  
無御座、土地其外不案内ニ付、不取敢知行所近江國栗太郎總村へ内著仕候、兼テ奉勤 王度段志願ニ付、二月二十七日江  
戸表出立、去ル三月十九日參著仕、天津 御裁判所へ御届奉申上候處、今般右之段御聞届相成、當月二十六日上京可仕旨

被仰渡、一昨二十七日御當地へ參著仕候、且前文之趣意具ニ御聞届被成下、相當之 御奉公被 仰付被下置候様御執成 被下置候者、冥加至極難有仕合奉存候、此段厚以 御仁惠 御沙汰之程、伏テ奉願上候、以上。

慶應四辰年閏四月二十九日

渡邊 鎮之丞

御辨事 御中

由緒書、

嵯峨源氏 渡邊

家之紋三文錢 幕之紋同斷 替紋揚羽蝶

右三文錢之儀、元龜三年拜領仕、以上意家之紋ニ仕來申候、委細之儀ハ本家渡邊虎之助方ヨリ書上來申候、

融左大臣五代内舍人綱二十二代孫、三州和田村住渡邊久左衛門競嫡孫、渡邊山城守茂嫡孫、渡邊久左衛門善二男、

一先祖高千石 本國三河 生國武藏


渡邊久左衛門善二男

渡邊 久助均

渡邊久左衛門善實父渡邊監物儀儀ハ、駿河大納言殿駿府拜領之節、附役相勤、大納言殿没落之節、渡邊監物儀儀大關土佐守 へ預ケ相成、下野國黒羽根へ罷越、渡邊久左衛門善祖父渡邊山城守モ嫡孫承祖願之上、渡邊山城守茂之家督七千石相續仕、 寄合ニテ所々加番相勤申候、渡邊久左衛門善ニ男子三人御座候處、及末期願之上、嫡子渡邊久左衛門進へ家督五千石、二 男渡邊久助均へ千石、三男渡邊久藏保へ千石、慶安三寅年八月願之上分知仕候、養父渡邊宗治郎政、安政三辰年七月跡式私 へ相續仕、九代目ニ相成申候、其後安政五年ヨリ文久二戌年迄、書院番相勤、其後小普請ニテ罷在候、 右之通ニ御座候、以上。

今般 王政御一新、萬緒御多端之折柄、瓊末之御用モ不承、徒ニ滯京仕候段奉恐入候間、何卒隨身之御用被 仰付候様、偏ニ奉懇願候、以上。

辰 五月二日

巨勢 鑛之助 利國 

辨事 御役所

○本條ノ文意ヲ按スルニ、蓋前請アラン、今之ヲ佚ス。

先般内匠勤 王之儀奉願上候處、四月二日御附札ヲ以被爲聞食置候、東山道 御鎮撫使様へ願出、歸順實効相立候歟、又ハ 關東鎮定之上、速ニ上京歎願申出候ハ、其節何分之儀可被 仰出之段御達ニ付、右御發行先へ武州忍行田ニオイテ、閏四 月七日奉願候、然ル處、別紙寫之通被 仰出難有仕合奉存候、此段申付越候間御届申上候、以上。

五月二日

福原内匠家來 齋藤 金三郎

辨事 御役所

別紙、

福原 内匠

先般、勤 王之儀 朝廷へ及歎願候趣、神妙之至被 思食候、尙此上爲 國家精々盡力、忠節ヲ抽テ候様 御沙汰候事。

東山道總督府

參 謀

戊辰後 四月

今般 王政御一新ニ付、私儀勤 王一通相心得候底意ニ御座候處、幸尾張大納言殿ヨリ誘引之儀モ御座候ニ付、當三月中勤 王遵奉相守、一心無御座候段尾張殿へ證書差出申候、然處、元幕府ニテ勤仕竝寄合罷在候ニ付、速暇ヲ乞、同月廿五日江戸表出立、四月四日采邑三河國加茂郡宮口村へ在著仕、同日尾張殿へ罷出、歸邑仕候途中ヨリ持病之疝癩差發、起座不自由御座候間、無據於采邑療養仕居、少々快方御座候ニ付不取敢在所表出立仕候、早速上京可仕候處、病氣ニテ延引仕候段、誠以奉恐入候、此度上京仕候上ハ、相應之御用途相勤度志願ニ御座候間、格別之御憐愍ヲ以宜敷御執成之程、只管奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年五月二日

内藤備中守

辨事御役所

○今般 王政御一新被 仰出候ニ付、尾張殿ヨリ私儀勤 王遵奉之儀御誘引被成下、冥加至極難有仕合奉存候、依之、御請書奉差上、三月中東海道筋登京可仕ト奉存候處、官軍御進發先人馬繼立ハ不及申、休泊等モ驛々難出來哉ニ付、無餘儀江戸表三月十一日乗船仕、同月十九日三河國額田郡深溝村陣屋へ著仕、四月朔日尾州名古屋表へ罷出、土著御届申上、引續上京可仕ト奉存候處、不快ニテ追々延引仕候段奉恐入候、此程快方仕候ニ付、閏四月廿六日深溝村陣屋出立、昨二日京著仕候、此段御届奉申上候、以上。

板倉甲斐守分知

板倉小次郎

五月三日 辨事御役所

○佐野豐太郎儀、私從來舊縁之者ニ御座候處、長之病氣ニテ起居不自由、引籠居候處、王政御一新折柄、右家筋ハ先祖來勤

王之功績有之、豐太郎儀モ先志繼度存候得共、所勞中無致方、依之、兼テ約定有之ニ付、私弟房之助養子仕、爲名代家來召連上京仕、御用相勤度段、去ル三月中太政官へ願出申候、右御用奉願候ニ付、私へ附屬仕奉奏實效度段、猶又願出候ニ付テハ、屹度力添報効仕候様指揮可仕候間、何卒衷情之苦 御慈憫被成下、歎願之筋 御間濟相成候様、於私モ偏ニ奉懇願候、以上。

加藤能登守

五月九日 辨事御役所

○私儀幼少頃ヨリ病氣ニテ起居不自由、家督後舊幕府ニモ出勤不仕罷在候ニ付、御用難相勤、依之、兼テ血縁之事ニ御座候間、加藤能登守舍弟房之助儀、養子約定仕置候ニ付、此度爲名代家來召連上京爲仕、實兄能登守ニモ力添仕、相應之御用相勤候様仕度段、去ル三月中能登守一同以願書 太政官へ奉上言候處、其節 御親征 行幸中ニテ、右願之趣ハ被爲聞食置候得共、養子之儀ハ唯今不被爲及 御沙汰、以御附札被 仰渡難有奉拜承候、其後中條左衛門督御取調之儀申達候ニ付、爲名代房之助去ル四月中上京罷在候段、御請書差出申候、猶於關東相模國、下野國采地之儀ハ、鎮撫總督様へ願出、御間濟相成候得共、先般ヨリ上京御用奉願候ニ付テハ、乍病中私儀モ家族引連、知行所丹波國氷上郡大新屋村へ引籠、養子房之助へ相續被 仰付、實家加藤能登守へ附屬被成下、相應之御用相勤奉奏實効候様仕度、尤私家系由緒之儀ハ、前願之節巨細奉申上候通、一途勤 王之儀、祖先以來之志ニテ、於私偏ニ奉懇願候、何卒前書長病中、不得已之次第、以御垂憐願之通被、仰付被成下候様、伏テ奉歎願候、誠恐謹上。

佐野豐太郎

名代 加藤房之助

五月九日 辨事御役所

○前書ハ之ヲ略ス。

乍恐奉歎願候口上覺、

私儀三月四日江戸表出立、於途中 御總督岩倉様へ御供仕、相應之 御用向蒙 仰度候段奉願上候處、差掛リ 御用之儀無之故、先江州知行所迄罷越、御用向被 仰付候ハ、早々上京可仕旨 御沙汰ニ付、同月廿二日著仕、家來ヲ以右之趣太政官へ御届奉申上候處、左之通 御附紙ニテ被 仰渡奉畏候、然ル處、去ル十三日御廻狀ヲ以、昨十五日 御用向被爲 在候趣ニテ、參 朝被爲 仰付候間、早々登京可仕旨ニ御座候處、近江國殊之外大洪水ニテ、少々道遠ク立退罷在、且道中筋存外所々大荒、無據廻リ道仕、不計手間取、漸昨夜九ツ時京著仕、最早運刻ニ相成奉恐入候、扱私儀ハ勝手ニ付、知行所ニ滞在仕居候儀ニテハ曾テ無御座、則前顯之通兼テ被 仰渡候 御趣意相守候儀ニ御座候間、何分昨日之 御用洩ニ相成候テハ歎ケ敷奉存候、右之始末御賢察被成下候テ、昨日參 朝之方々へ 御召加ニ相成候様、可然、御執成可被成下候様偏ニ奉願上候、以上。

御附札、鎮撫總督御差圖之通、先在所へ滞在可致、追テ 御用之品可被 仰付候事。

五月十六日

横田權之助

辨事 御役所

○五月二十日批紙

過日相殘リ分、近日 御沙汰被 仰付候間、此旨可相心得事。

○奉歎願候覺、

今般 王政復古、天下御一新之期ニ至、王命ヲ奉シ候ハ勿論之儀ニ御座候處、既ニ歸順相立候上ハ、寛大之 御沙汰可被 仰付哉ニ奉傳承、素ヨリ私儀奉勤 王度心願ニ御座候ニ付、當 御役所へ直ニ奉歎願度奉存候得共、差越願之儀

ニ相成候テモ奉恐入候ニ付、近江國御取締土州御出張所へ當春二月上旬ヨリ偏ニ奉勤 王度段、知行所家來ヲ以窺御内慮候處、采地程近之儀ニモ御座候故、右陣屋方ニ謹慎罷在、從 朝廷之 御沙汰可奉待御達ニ付、雖有奉拜承、差扣罷在、其後大津表へ 御裁判所御取建ニ相成候ニ付テハ、猶又去ル四月廿日同所 御裁判所へ再歎願書差出候處、御落手ニ相成、追テ 御沙汰之品モ可有之旨被 仰渡、奉拜承罷在候處、今般右 御裁判所御變革ニ相成、就テハ志願之趣意 御聞取被下置候儀トハ奉恐察候得共、猶又奉再願度、御聞届被下置候ハ、冥加至極難有仕合ニ奉存候、此段厚以 御仁恵 御沙汰之程、謹テ奉待上候、以上。

寄合席 關重二郎養子

關 左 近印

慶應四戊辰年五月廿三日

辨事 御役所

○口上之覺、

近江國御取締土州御出張所へ、偏奉勤 王度段、知行所家來ヲ以二月上旬伺 御内慮候處、早々主人相登候ハ、右之由ヲ以歎願筋何々様ニモ取計可申間、早々江戸表出立可仕旨被申聞候ニ付、三月十五日出立、川越通中仙道旅行、四月朔日江州蒲生郡中山村陣屋迄參著仕、早速家來ヲ以同所迄著之御届、土州藩岡本健三郎迄申立、且出津又ハ上京之儀相伺候處、采地程近之儀ニモ候間、右采邑ニ控居、從 朝廷之 御沙汰之品モ可有之旨、同人被申聞、其後大津 御裁判所御取建ニ付、同人へ承合候處、此度右 御裁判所御取建ニ就テハ、土藩ヨリモ是迄歎願之趣、同所 御總督様へ具ニ可申上候得共、猶再願書ヲ以奉歎願旨内意ニ付、四月廿日右 御裁判所へ願書家來ヲ以差出候處、長谷殿御落手相成、追テ 御沙汰モ可有之間差扣罷在候様、公用御取次柝沿唯一被申聞候、其後度々家來ヲ以土藩同人迄御内意相伺候處、何レモ御取置相成候上ハ、采地ニ罷在候共、勤 王之志ハ相立可申由被申聞候間、是迄差扣罷在候處、今般右 御裁判所御變革相成候ニ付、猶又御内慮相

同候處、御變革相成候上ハ、辨事 御役所へ是迄之趣意猶具ニ相認、前文ヲ以可奉歎願旨被仰聞候、尤大津 御役所へモ再歎願書寫相添、去ル十八日御届濟ニ御座候、以上。

辰五月廿三日

關 左 近

○ 高五千石

久松榮之助

家筋之儀ハ久松氏ニ御座候テ、徳川家康公御同腹之弟松平因幡守康元二男ニテ、寛永元甲子年 秀忠公ヨリ被 召出、信州小縣郡於禰津之地五千石被下置、其後慶安四年奉願、同國佐久郡之内貳千石村替願之通被 仰付、都合五千石頂戴仕罷在候、且又當二月晦日、江戸表出立仕、知行所禰津陣屋へ三月五日著仕、直様 勤王可仕之處、暫所勞ニ罷在、追々延引仕候段、何共奉恐入候、何卒身分相應之 御用向奉蒙 仰度奉存候間、此段宜奉願候、以上。

慶應四辰年五月廿五日

久松榮之助

辨事 御役所

○再請書一通

乍恐謹テ奉歎願候口上覺、

乍恐舊旗下之小臣忠武死罪頓首百拜シテ奉歎願候、賤臣舊幕府下之士ニ候得共、祖先民部少輔高俊、菅道真之後裔ニテ、男俊勝參河久松ニ食邑仕候故、號久松候、被任佐渡守、徳川家祖同胞之族類ニ候得ハ、將軍職任叙之節附屬仕候、全ハ天朝之御親臣 俊勝之孫子ニ候得ハ、祖先以來、世々從屬之士ニ至迄、天朝之洪恩海岳ニ難比奉仰上候得共、武將之嚴令ニ被隔、二百年餘不得奉窺 天機、空ク幕下ニ列罷在候處、不圖慶喜不軌之心底ヨリ反狀明白及、既ニ爲御親征 御發輦被爲 遊候段、重々至極奉恐入候、小臣忠武儀、其前ヨリ府下ニ而已驅役罷在、慶喜へ相謁候儀モ決テ無之、又反狀等ハ毫モ不存候間、相加リ候儀ハ毛頭無御座候、賤臣虛辭艶言ニ無之、 皇天 后土、上下大小之 神祇、八百萬之 靈神照覽在處、赤膽以異心等塵埃モ無御座、只管祖先以來勤 王之赤心候間、既ニ正月上都之變報承候否、在所陣屋へ竊ニ罷越、迅速ニ上京之志ニ候處、病氣ニ付赤心不果、遲緩ニ及候得共、御鎮撫使 岩倉公御下リニ付、御軍用被 仰付候間、病中乍内々指揮仕、小臣心底不能、聊ニ候得共、御用途金獻呈仕候、其後全快發途仕候處、霖雨洪水被隔、愈延著仕、重々奉恐入候得共、祖先來御親臣之 御由緒被爲 思食分、 御出格之 御垂憐ヲ以、祖人ヨリ相傳之食邑安堵被 仰付下候上ハ、祖靈竝 賤臣忠武從屬之士ヨリ細民之末々迄、 天恩之御威澤、生々世々、子々孫々至迄、深奉感戴、日月ト共ニ可奉報皇恩候、過日既ニ舊同列兵へ本領安堵之上、下大夫ニ被爲 召加候段、冥加至極、 天恩之御德澤奉感泣候、賤臣儀ハ右様之重任決テ不奉願候、幼年ヨリ武門ニ列シ、兵馬之際ニ育チ、武役一途ニ驅使罷在候得ハ、徒ニ奴齡壯年武骨而已ニ候、方今奥羽賊徒蔓延、官軍ニ抗候由、切齒扼腕、憤悶ニ不堪候得ハ、今般 兵部卿宮御進發之御供可奉願之處、過日以來所勞ニ罷在、實以殘念不過之奉存候、小臣小隊ヲ以進候共、螻螂之龍車ニ不異哉ニ奉存候得共、最早所勞モ追々快方ニ御座候間、自然兵隊御繰出モ被爲在候ハ、大藩之兵勢ニ被差加度奉歎願候、然上ハ、其將隊ニ乞ヒ、先鋒ニ進、犬馬之用途相働度奉存候、右先鋒決死之情實貫徹仕候様、宜ク 御沙汰被成下候様奉歎願候、前件之儀相叶不申候得ハ、於京都身分相應之御役蒙 仰度奉願候、右兩様之内、何レ共 御許容被下置候得ハ、難有仕合奉存候、然上ハ祖先相傳之俸秩、其儘領知被 仰付、先祖采女正之通交代寄合被 仰付被下置候ハ、廣大之 朝恩難有奉存候間、紅淚ヲ拭ヒ、伏テ 闕下ニ奉歎願候、誠恐誠惶頓首百拜。

覽在處、赤膽以異心等塵埃モ無御座、只管祖先以來勤 王之赤心候間、既ニ正月上都之變報承候否、在所陣屋へ竊ニ罷越、迅速ニ上京之志ニ候處、病氣ニ付赤心不果、遲緩ニ及候得共、御鎮撫使 岩倉公御下リニ付、御軍用被 仰付候間、病中乍内々指揮仕、小臣心底不能、聊ニ候得共、御用途金獻呈仕候、其後全快發途仕候處、霖雨洪水被隔、愈延著仕、重々奉恐入候得共、祖先來御親臣之 御由緒被爲 思食分、 御出格之 御垂憐ヲ以、祖人ヨリ相傳之食邑安堵被 仰付下候上ハ、祖靈竝 賤臣忠武從屬之士ヨリ細民之末々迄、 天恩之御威澤、生々世々、子々孫々至迄、深奉感戴、日月ト共ニ可奉報皇恩候、過日既ニ舊同列兵へ本領安堵之上、下大夫ニ被爲 召加候段、冥加至極、 天恩之御德澤奉感泣候、賤臣儀ハ右様之重任決テ不奉願候、幼年ヨリ武門ニ列シ、兵馬之際ニ育チ、武役一途ニ驅使罷在候得ハ、徒ニ奴齡壯年武骨而已ニ候、方今奥羽賊徒蔓延、官軍ニ抗候由、切齒扼腕、憤悶ニ不堪候得ハ、今般 兵部卿宮御進發之御供可奉願之處、過日以來所勞ニ罷在、實以殘念不過之奉存候、小臣小隊ヲ以進候共、螻螂之龍車ニ不異哉ニ奉存候得共、最早所勞モ追々快方ニ御座候間、自然兵隊御繰出モ被爲在候ハ、大藩之兵勢ニ被差加度奉歎願候、然上ハ、其將隊ニ乞ヒ、先鋒ニ進、犬馬之用途相働度奉存候、右先鋒決死之情實貫徹仕候様、宜ク 御沙汰被成下候様奉歎願候、前件之儀相叶不申候得ハ、於京都身分相應之御役蒙 仰度奉願候、右兩様之内、何レ共 御許容被下置候得ハ、難有仕合奉存候、然上ハ祖先相傳之俸秩、其儘領知被 仰付、先祖采女正之通交代寄合被 仰付被下置候ハ、廣大之 朝恩難有奉存候間、紅淚ヲ拭ヒ、伏テ 闕下ニ奉歎願候、誠恐誠惶頓首百拜。

辰 七月 四 日

寄合小臣

久松榮之助

忠武謹上

辨事 御役所



高五千石信濃國小縣郡三千石 外ニ込高百五拾石  
乍恐再奉歎願候、賤臣儀江戸表去ル三月出立仕、知行所へ罷越、迅速ニ上京勤 王之心底御座候處、病氣ニ付運後及候得共、  
御鎮撫使 岩倉公御下リニ付、御軍用被 仰付候間、御用金千百三拾七兩餘獻呈仕候、其後病氣全快仕、發途仕候處、  
霖雨洪水ニテ、去ル五月廿日京著仕、愈延著仕候段、重々奉恐入候得共、祖先來 御親臣之 御由緒被爲 思食分、御出  
格之以 御垂憐、去ル七月四日奉願候通、乍恐本領安堵被 仰付、祖先交代寄合ニ御座候間、何卒此度中大夫ニ被 召加、  
其上以 御憫察相應之御用被 仰付被下置候様奉懇願候、左候時ハ、不惜身命實効相顯度念願御座候、微忠貫徹仕度、伏テ  
闕下ニ只管奉歎願候、誠恐誠惶頓首百拜。

舊幕府寄合

久松 榮之助

忠武謹上

九月五日

辨事 御役所

○ 以書附奉懇願候、

私分知久權之助儀、兼テ先般以書附奉申上候通り、私朱印領知高三千石之内三百石、寛文十一辛亥年伊左衛門直政四男  
七郎兵衛直次へ内譯分知申立候處、間濟ニ相成、是迄代々定府ニテ大番席小普請ニ罷在候處、今般 王政 御一新被 仰  
出候ニ付、早速國許へ爲引戻、一月中兩度取運候儀ニ御座候、然ル處、遠國掛隔候儀ニテ、彼是遲引、漸四月中在所表へ引  
取、私方同居罷在候段、在所表ヨリ申越候、右ハ兄榮之丞去ル寅年病死仕、弟權之助未幼少、當辰八歳ニ罷在、御奉公モ難  
勤候ニ付、暫之間私方厄介ニ仕置、成人之上ハ相當之奉勤爲仕度志願ニ御座候、全體迅速上京爲仕、勤 王之旨意可申立之  
處、當人幼稚之儀、何之辨別モ無之、且小身微力之儀ニテ、是迄譜代之家來等モ無之、一季抱同様之者ニテ、家來上京爲仕候

儀モ難出來、深心配罷在候御儀御座候、此段 御賢察被成下置、何卒格別之以 御寛典、是迄之通權之助一家永續仕候様  
御仁惠之御取計、伏テ奉懇願候、誠恐誠惶頓首謹言。

中天 夫

知久左衛門五郎

慶應四辰六月十四日

辨事 御役所

○ 六月十七日批紙

知久權之助本領安堵、願之通被爲 聞召届候事。

○ 今般御一新ニ付被 仰出候趣奉畏、右ニ付江戸表早々引拂可申處、養父愛鷲儀老年之上長病ニ付、看病仕罷在候處、去ル三  
月十七日病死仕候、忌中之儀ニハ御座候得共、同月二十九日出立仕、四月八日歸邑仕候、忌明之上上京可仕心得ニテ、江戸  
表へ家來共差遣、御先鋒様ヨリ 御印鑑頂戴仕候處、其後風邪之上持病之脚氣ニテ相勝不申、暫養生仕罷在候、然ル處、  
三河表御裁判所御開相成、忌明ニモ罷成、病氣追々快方ニ御座候ニ付、御同所へ罷出御用向相伺候處、其後御沙汰モ無御座  
候ニ付、差扣罷在候處、上京之儀追々延引仕候テモ重々深奉恐入候ニ付、其段御同所へ相伺候上上京仕候、前書之趣、無餘  
儀次第柄ニテ延引罷成候間、此段厚御含被成下候様、御賢慮之程奉願候、以上。

六月十七日

服部 中

辨事 御役所

○ 再申書

今般 王政御一新、萬緒御多端之折柄、隨身相應之御用相勤度志願御座候、何卒被 仰付候奉蒙 御沙汰候ハ、冥加至  
極、難有仕合奉存候、此段偏奉懇願候、以上。

復古記 卷八十五(第四) 明治元年五月十五日

二九七

遠江國敷知郡大久保陣屋 元寄合席

服部 中

保固 四

七月

辨事御役所

○

乍恐口上、

私事

早春來ヨリ病氣ニ取合、上京延遲仕候ニ付、志願之條々先達テ分家榊原清記ヲ以嘆願仕候處、願之趣被爲 聞食、御上紙被成下候段、冥加至極難有仕合奉存候、然處、少々病氣平愈仕候ニ付、上京仕度奉存居候折節、先月中旬朝臣被爲 仰付候ニ付、則 御總督府へ奉願上、道中 御印鑑頂戴仕、急ニ馳上リ、今十四日京著仕候ニ付、此段御届奉申上候、何分此上之御處置深御憐愍被爲 仰付度、伏テ奉願上候、以上。

辰六月十九日

榊原直吉

辨事御役所

○

高七千石

本多寬司

右寬司儀ハ私分家ニテ、兼々勤 王尊奉之底意ニ御坐候、今般 王政御一新被 仰出候ニ付テハ、右御趣意之趣猶以堅相守候旨申立候ニ付、私ヨリ相糺候處、皇國之御爲第一ニ心掛、精勤仕度心願外別心無御坐候ニ付、何卒分限相應之御用筋被 仰付候様、奉願度、且恐入候申上方ニハ御坐候得共、知行之儀ハ是迄之通被 仰付 被下候様、偏ニ奉懇願候、何卒格別之以御慈評、御仁恤之御沙汰感戴仕、彌相勵爲奉報 御高恩度、右之段被爲 聞食、御仁愛之御沙汰、只管奉歎願候、誠恐敬白。

六月廿日

本多美濃守

辨事御役所

○

今般 王政御一新ニ付、勤 王之儀、尾張大納言殿内參與附屬之衆ヨリ、本家本多美濃守在所重臣共ヲ以御誘引有之候處、父寬司竝於私モ素ヨリ美濃守同様、兼々勤 王尊奉之底意、一切他念無御座、其段證書奉差上候通之赤心御座候、依之、去四月上旬、父子一同江戸表出立、御先鋒 御總督府様ヨリ御印鑑頂戴仕、猶又於小田原驛 大總督府様ヨリ御印鑑御引替頂戴之、同月十八日無滞歸邑仕候ニ付、早速同苗寬司上京仕、分限相應之御用筋ヲモ被 仰付候様奉願度處、江戸表發足之砌ヨリ所勞罷在、押テ旅行仕候故哉、猶更相勝不申、上京延引相成奉恐入候、依テ家來爲差登、前段之次第口上書ヲ以奉願候處、寬司上京之上可奉願旨御説諭之上、口上書御差戻相成候、然處、老年之儀ニモ御座候間、急々全快之程無覺奉存候ニ付、伐恐爲名代私上京仕度、既ニ發足可仕處へ、三州御裁判所ヨリ御用之趣ニテ御呼立相成候ニ付、不取敢私儀爲名代罷出候間、其節於御同所モ相應之御用被 仰付候様、奉願置候得共、何卒前顯之次第被爲聞食、分限相應被 召仕被下度、然ル上ハ乍不及粉骨碎身盡力仕、可奉報 御高恩、此段偏奉歎願候、誠惶頓首。

寬司名代相兼

本多主馬助

六月廿日

辨事御役所

○

高三千石

元寄合 駿河國有渡郡小鹿陣屋住居

岡野雄之丞

辰三拾四歲

私儀文久二戌年三月廿九日家督寄合罷成、其後役儀相勤不申候、今般御一新ニ付勤 王爲報國勉勵仕度志願ニ付、國力相應之 御用筋相勤度旨、去ル二月廿一日家來共ヨリ證書差上候處、願之旨趣 御間届被成下難有仕合奉存候、私儀三月十一日江戸出立、同十五日東海道沼津宿迄罷越候處、御先鋒 御總督御兩卿様、同所御宿陣被爲 在候ニ付、參上仕、私微衷奉懇願候處、御許容被成下、糧米貳百俵獻貢、其外國力相應之御用向相勤申度、願書御落手被成下、追テ 御沙汰可相待旨被 仰渡、同十七日采地駿河國有渡郡小鹿村へ土著仕、翌十八日駿府へ罷越、大御總督宮様へ奉伺御機嫌、其節 天機奉相同度段奉願上候處、天機相伺之儀へ、上京之上可奉伺旨被 仰渡、難有仕合奉存候處、其後私儀持病之脚氣ニテ相勝不申處、私家族竝家來家族共、四月朔日ヨリ閏四月十四日迄、都合三度ニ江戸出立、不殘采地小鹿村へ土著仕、其節奉頂戴 御印鑑 太政官 御役所へ御返上可仕旨被 仰渡候ニ付、私儀病氣罷在候間、翌十五日家來ヲ以差遣、御返上可仕ト奉存、采地出立仕、東海道宮宿迄罷越候處、參、遠、駿、御總督様同所御通行ニ付奉伺候處、駿河國之儀へ參州吉田宿 御裁判所ニオイテ御取扱被成下候旨被仰渡、難有仕合奉存候、右參州吉田宿 御裁判所迄立歸、御印鑑御返上仕、采地小鹿村へ家族不殘土著、御届書、知行所村高帳共五月朔日奉差上候處、御落手被成下、御用相濟候ニ付家來歸村仕候、私儀病氣快方御座候ニ付、近々上京可仕ト奉存候處、吉田宿 御裁判所ヨリ當月四日早々罷出候様御達ニ付、同七日采地小鹿村出立仕、同十一日 御總督平松甲斐權介様へ奉伺御機嫌、翌十二日 御裁判所へ參上仕候處、駿河國御取扱向被遊 御免候ニ付、御取扱御斷之旨被 仰渡、右何方 御役所へ奉願上候哉奉伺候處、上京之上奉願候様、御印鑑奉頂戴京著仕候、延引仕候儀深奉恐入候得共、何卒國力相應之御奉公相勤申度、此段御仁慮之御執成被成下候様、奉願上候、以上。

辰六月廿二日

岡野雄之丞

○ 辨事 御役所

太田運八郎

高三千石 遠江、武藏、相模國之内

御一新御改革被 仰出難有奉存候、右御請書當三月十五日、同姓備中守へ差出、同人ヨリ尾張大納言殿へ差上、急速上京奉勤 王度、同月廿六日江戸表出立、途中ヨリ病發仕候ニ付、不得止采地遠州城東郡潮海寺村へ滞留養生仕候所、追々快方相成候間、采地出立、是迄何分所勞延引仕候段奉恐入候、何卒寛大之御取扱ヲ以 御憐愍之奉戴 御沙汰度奉歎願候、猶相當之 御奉公被 仰付被下置候へ、冥加至極難有仕合奉存候、此段御間届御執成之程奉願上候、以上。

慶應四戊辰年六月廿四日

太田運八郎

○ 辨事 御役所

由緒書、

清和源氏 太田家之紋丸之内結 頼政射鶴時勅賜鎧  
 榎之紋 矢以慕之紋トス  
 多田滿仲六代頼政ヨリ出、武州於松山城討死仕候太田左衛門尉景資後胤、相模國住人太田彌左衛門資武總領、

太田内記 政資

一元祖 本國武藏 生國武藏

母 西尾權左衛門女  
 文昭院殿御代寶永三丙戌年御切米貳百俵被下、同年四月廿六日百俵加増、合高三百俵罷成、同四丁亥年千石加増、都合千三百石於相州、武州之内被下寄合被仰付候、正徳二壬辰年十二月十二日加増千七百石、於遠州之内被下、都合三千石被下之、  
 一二代目 生國武藏 政資總領 太田美濃守資之  
 一三代目 生國武藏 資之總領 太田内記資知

母 家女

一四代目 生國武藏 資知總領 太田隼人資演  
 一五代目 生國武藏 資演養子 太田志摩守資同  
 母太田備中守資時女  
 養母佐野右兵衛尉茂幸女 實父太田駿河守資信次男

實母 家女

文恭院殿御代、右志摩守御側役相勤申候、文政元戊寅年十月廿七日病死仕候、

一六代目 生國武藏 資同總領 太田志摩守資貞

養母日野唯惠資直女 實母 家女

右志摩守儀、天保十五甲辰年五月十六日山田奉行被仰付、同年十二月十六日諸大夫被仰付、志摩守ト相改申候、嘉永六丑年九月二日病死仕候、

一七代目 生國武藏 資貞總領 太田運八郎資泉

母 家女

右運八郎儀、安政二卯年御先手銃砲頭被仰付、文久元酉年七月十一日病死仕候、

一八代目 生國武藏 資泉次男總領 太田運八郎資道

母 一色丹後守大叔母

辰二十七歲

私儀

安政六己未年三月三日、父資泉願之通次男總領被仰付、文久元辛酉年十月四日家督無相違被下、寄合罷成、慶應二丙寅年八月廿六日ヨリ組合銃隊改役相勤、同年十一月五日布衣被仰付、同三卯年九月廿六日組合銃隊被廢候ニ付、役儀被免、寄合罷成候、

右之通御座候、以上。

慶應四戊辰年六月

太田運八郎印

一高千四百石 込高百十二石二斗五合九勺

松平新七郎

生年二拾三歲

私儀養父松平新五左衛門、從弟違之續ヲ以養子罷成、嘉永七寅年五月四日家督相濟、文久三亥年兩番へ番入被申付、元治元子年九月七日小納戸被申付、慶應二寅年十一月六日勤仕竝寄合被申付、同三卯年八月朔日神奈川表へ罷越、佛國語學傳習之儀被申付、同年十二月廿五日歸宅仕、其後病氣ニ付療養罷在、同四辰年二月十六日家族之者江戸出立、同月廿七日知行所駿州富士郡沼久保村へ土著仕、同廿八日家來之者ヨリ駿府御城代本多紀伊守方へ勤 王尊奉之證書差上、同年四月七日池上本門寺御先鋒 御總督府へ勤 王之證書差上、且御印鑑頂戴仕、同月八日江戸出立、同十一日於小田原驛大總督宮様へ御機嫌奉伺、御印鑑御引替被下置、歸邑之上 太政官へ返上可仕旨被仰渡、爲御用伺直ニ上京、其節御印鑑ヲモ返上可仕心底御座候之處、折節發病、不得止事仕合、漸此頃少々快方仕候ニ付、右御印鑑上納且何分之御用モ奉願度、當月十日采地出立、同十七日於吉田驛 平松甲斐權介様へ御機嫌奉伺、當月廿三日到著仕候、此段御届奉申上度、且先般江戸表ニ殘置候家來、五月五日同所出立、於川崎驛 御先鋒 御總督府ヨリ頂戴仕候御印鑑共、貳枚奉返納候、何分出格之以 御憐愍相應之御用被 仰付候様奉歎願候、以上。

慶應四辰年六月廿九日

松平新七郎

○ 辨事 御役所

口上書控、

元勤仕竝寄合

杉浦桂之進

一高二千五百石  
外 高五拾四石九斗七升五合五勺込高

名代總領

辰三十九歲

三〇四  
杉浦 銆太郎  
辰拾四歲

私儀弘化三年家督被申付、寄合罷成、元治二五年正月十一日使番被申付、慶應二寅年十二月廿九日勤仕並寄合被申付、其節ヨリ病氣引込居候處、今般 大政御一新ニ付、當三月廿八日病氣中押テ江戸出立、東海道旅行、四月三日采地柳島村へ歸邑仕、同月八日蒲原宿於 御宿陣 大總督宮様並御四卿様奉伺御機嫌、其節勤 王遵奉證書奉差上、其後早々登京御用可奉伺之處、猶亦病氣再發引込中、參州、遠州、駿州爲御總督、平松甲斐權介様吉田表御下著、御裁判所御取建御用候間、舊旗本當人可罷出旨御廻章ヲ以御達ニ付、早々罷出、御用奉伺可申處、病氣同篇押テモ旅行仕兼、追々延引奉恐入候ニ付、爲名代實子總領銆太郎、六月十七日采地柳島村出立仕候處、吉田表御裁判所御引上ニ相成候ニ付、不取敢銆太郎登京仕、御用奉伺候、養生仕、近々内登 京仕候間、何分出格之御憐愍ヲ以、此段御許容被成下度奉歎願候、以上。  
慶應 四辰 六月  
杉浦 桂之進

復古記 卷八十五 第四終

復古記 卷八十五 第五

○ 今般 御一新被 仰出候付テ三淵縫殿助儀、王事ニ盡忠仕度志願ニテ、當三月江戸表發足仕、舊知濃州、江州等之内ニ御坐候間、直ニ尾州表ニ罷出、其筋へ歎願仕候處、先舊知行所之内ニ引取、御再命御坐候迄謹慎可罷在旨被 仰渡候付、濃州安八郡今カ淵村ニ謹罷在、最早數十日ニ及候付、何分御寛大之奉蒙 御沙汰度トノ趣、家僕ヲ以越中守へ歎願申出、總體三淵家之儀ハ越中守祖宗重縁之由緒御坐候處、同人儀 朝命遵奉之誠意相違無御坐候付、既ニ閏四月委細以書付奉歎願置候處、于今 御沙汰モ無御坐候、付テハ主從深恐懼罷在、此節猶家僕ヲ以テ越中守迄歎出申候間、御内意奉伺候處、右ハ縫殿助儀上京致候様御達ニハ難被爲及候得共、同人ヨリ尾瀨荒川彌五右衛門ニ懸合候上、早々上京可然旨 御内沙汰被爲在候付、其旨家僕鈴木六太夫ト申者へ申聞候處、直様在所表へ罷越、縫殿助ニ申通、直ニ荒川ニ懸合候内、歸順在邑、是迄謹慎致候處、最早不及其儀旨御回達ヲ奉戴候由ニテ、一同難有奉感佩、不取敢先月廿七日在所表出立、同廿九日著京仕候、右ハ縫殿助ヨリ委細御届可申上候得共、此段不聞御届申上候、以上。

七月二日  
辨事 御役所

細川 越中守 内  
内 山 又 助

○ 本人ノ申請書ハ之ヲ佚ス。  
口上覺、

私儀

御先鋒様ヨリ御用被爲 仰付、無滞相勤、冥加至極難有仕合奉存候、然ル處、先頃中持病之疝癩差發候ニ付、知行所相模國鎌倉郡平戸村ニテ養生仕居候處、追々快方相成候ニ付、大御總督様へ相願、御印鑑頂戴仕、押テ旅行、今日上京仕候ニ付、何卒身分相應之御用被爲 仰付被下置候様、御沙汰之程奉願上候、依之、御届奉申上候、以上。

辰 七月 五日

杉浦越前守

辨事 御役所

○再請書

奉歎願候口上覺、

今般 大政御一新被 仰出候ニ付テハ、家來百姓共ニ至迄、勤 王赤心相貫申度心願罷在候處、元知行所丹波國へ 御鎮撫使御發向被爲 在候ニ付、奉伺 御機嫌候處、御用被爲 仰付、米七百石餘、金三千三百八拾貳兩餘、其外武器類御用相立候段、冥加至極難有仕合奉存候、且又相模國於知行所表、白米貳百俵御用被爲 仰付、是亦難有仕合奉存候、乍恐 大御總督宮様へ奉伺 御機嫌、相應之御用御警衛之儀奉願上候處、寛大之以 御沙汰、上京之上丹波國元知行所表へ罷越候儀蒙 御沙汰、御印鑑頂戴仕、去月十九日相模國知行所表出立、去ル五日京著御届仕、御印鑑返納仕候處、御落手ニ相成、難有仕合奉存候、何卒勤 王相應之御用被爲 仰付被下置、乍恐本領安堵之 御沙汰被爲成下候ハ、子々孫々ニ至迄、廣大之 御慈悲難有仕合奉存候、且又丹州知行所百姓共、彼是不都合之儀可有之モ難計、日夜心痛罷在候ニ付、格別之以御憐愍、元知行所へ一ト先罷越、百姓共安堵爲仕度心願罷在候間、何卒寛大之以 御仁情、願之通被爲 仰付候様、宜 御沙汰之程偏奉願上候、以上。

辰 七月 十三日

杉浦越前守

辨事 御役所

○ 御届、

高千石本國三河  
生國武藏

舊幕 元小普請

清水次郎

辰歲二十二

今般 王政御一新之折柄、早春被仰渡候御趣意モ御座候ニ付、當辰二月廿九日勤 王遵奉相違無御座候旨、其頃家來ヲ以テ尾張大納言殿城下明倫堂へ、私印紙之證書差出置、其後私采地三河國渥美郡中山村へ土著爲仕候、同四月六日家族召連、江戸引拂候途中、於品川宿御先鋒 御總督柳原侍從様へ御印鑑頂戴之砌、猶亦就御差圖勤 王遵奉相違無御座候證書奉差上置、道中無滞同月廿二日三河國采地へ土著仕、早々上京之上 天機可奉伺候處、著邑後病氣罷在、遲滞罷居候折柄、三、遠、駿 御總督平松甲斐權介様、三州吉田御裁判所へ御下向ニ付、同五月廿五日、私吉田表へ出張仕、同廿七日御裁判所へ罷出、知行所村高帳貳冊、鰥寡孤獨帳壹冊、竝頂戴罷在候御印鑑相添差出候處、御落手ニ相成、御用相濟歸邑之砌、聊爲實効 御出兵之廉へ獻金奉願置、同六月二日右獻金奉願置候通被仰渡候ニ付、同月九日則金貳百兩獻納仕、歸邑後又々不快之處、此程全ク快方仕候間、乍遲滞去月廿七日在所出立仕、當月四日無滞上京仕候、依之、參著御届申上候間、寛大之以御所置可然御取計可被成下候様、偏ニ奉願上候、恐惶謹言。

慶應四辰年七月六日

清水次郎

辨事 御役所

○ 願書、

今般 王政御一新ニ付、勤 王尊奉之儀、尾張大納言殿内參與附屬之衆ヨリ、知行所へ差置候家來へ御誘引有之候處、私

復古記 卷八十五(第五) 明治元年五月十五日

儀、兼々勤 王尊奉之底意、素ヨリ一切他念無御座候、右ニ付其段證書奉差上候通之赤心ニ御座候、依之、上京仕、分限相應之御用筋被 仰付候様仕度志願ニテ、三月中旬江戸表出立、沼津驛於御旅館 御先鋒 御總督府様へ 天機且奉伺御機嫌モ、御印鑑頂戴仕、猶又 大總督府様へモ於駿府奉伺 御機嫌、御印鑑頂戴之無滞歸邑仕、重疊難有仕合奉存候、然ル處、旅行中ヨリ所勞罷成、快氣次第早々上京之上御用ヲモ被 仰付候様仕度、右志願中、三州吉田表從 御裁判所御用有之間可罷出旨、御沙汰有之、其節不快モ追々快方相成候間、則罷出、依御達知行所村高帳、鰥寡孤獨竝七拾歳以上之者名前書差出、其上前件之通奉願候處、出願之趣神妙之至、猶御用之儀被爲在候ハ、可被及 御沙汰旨以御附札被仰渡、難有仕合奉存候、且此程上京仕候ニ付、聊奉表寸忠度、何卒分限至當之御用被 仰付被下置候様猶又奉懇願候、以上。

七月六日

辨事御役所

巨勢大隅守

○ 私儀當二月中、當時會計御用掛被 仰付相勤罷在候家來岩佐太郎右衛門ヲ以、勤 王被 仰付被成下候様奉歎願候處、願書御取上被成下難有仕合奉存候、右ニ付乍病中不取敢押テ三月中知行所江州甲賀郡市場村迄罷出差扣、猶同人ヲ以上京御宥免、勤 王願之通被 仰付被下置候様奉歎願候處、是又御取上被成下置、重々難有仕合奉存候、右市場村之儀ハ、遠路欠離居候ニ付、何卒此上之 御憐愍ヲ以、上京 御差免被成下置候様偏ニ奉願候、以上。

七月八日

辨事御役所

元寄合 西郷新太郎

○七月九日批紙

上京之義ハ可爲勝手次第事。

○ 奉願口上覺、

右兩人儀、私先祖領知内分別家仕、徳川勤仕爲仕置候處、兼テ勤 王之微忠相盡度志願御座候間、不肖之儀ニハ御座候得共、方今如何體之御用ニテモ被 仰付被下置、格別之以 御憐愍願之通被 仰付被下置候様、於江戸表 鎮臺府へ相願置候得共、猶又奉願候、何卒以此上之 御仁恤相應被 召仕被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段奉懇願候、以上。

七月九日

○ 辨事御中

京極備中守

○ 私共儀 當春方今之御時勢ニ付、恐入候得共、爲窺 天機登京仕度段奉伺候處、早速上京可仕様被 仰付、右ニ付早速上京仕、相應之御用等蒙度段言上仕候處、爲窺 天機參 内被 仰付難有仕合奉存候、然處、私共在所之儀ハ、東海道仲仙道、上方へ之間道之要地ニ付、勝地峠往古ヨリ相固罷在候處、大總督宮御下向被爲在候ニ付、右峠猶又嚴重ニ相固度段奉伺候處、伺之通被 仰付、早速御暇蒙 仰難有仕合、依テ右場所嚴重ニ相固罷在候、猶又恐入候得共、爲聊共自然相應之御用等被爲在候ハ、蒙 仰度奉存候間、不取敢上京仕候、此段奉伺候、附テハ今般私共同席之者共 御朱印頂戴、御誓紙被 仰付候趣承知仕候間、何卒格別之御憐愍ヲ以、此段宜御取成御沙汰奉願上候、以上。

七月九日

濃州多良住 元交代寄合 高木彈正

高木 監物  
高木 達三郎

○ 奉歎願口上之覺、

累年報國勤 王之心願罷在候處、昨冬以來 王政復古御一新之御時節、幸然之折ニ付、早速驅上京仕、相應之御用可奉伺心底之處、昨秋來脚氣症ニテ起居難澀罷在候間、不取敢家來ヲ以當春 太政官奉歎願候得ハ、出格之御憐愍ヲ以御下ケ紙奉頂戴、則御差圖之上 大總督宮へ奉歎願候處、是亦出格之御憐愍ヲ以實効之道相立候ニ付、乍恐御兵糧米之内へ米五百俵奉獻納度奉願上候處、御採用ニ相成難有仕合奉存候就テハ 大總督宮へ奉伺 御機嫌伺 天機之儀ハ上京之上參 朝可仕候ト之 御沙汰ニテ、御印鑑奉頂戴、五月十一日江戸表出立仕候處、霖雨中ニ付所々川支ニテ、藤澤宿滞留罷在候内、漸川明ニ付、小田原迄罷越候得ハ、不存寄箱根戰爭、道中通行六ヶ敷、不得止一ト先江戸表迄引退、則直様 大總督宮へ御届申上置時宜相待居候内、賊徒御打拂之報知有之候間、即日御印鑑御取替奉願上、六月十六日江戸表出立仕、七月朔日河内國采地へ罷越、同七日出立昨八日上京仕候、何分存外延著之段深奉恐入候、何卒出格之御慈悲ヲ以、速ニ奉伺 天機度御許容被成下候上ハ、身分相應之御用被 仰付被下置候ハ、年來之赤心貫徹、御廣大之御仁惠難有仕合奉存候、何卒宜御取計御沙汰之程奉願上候、以上。

元 寄 合

石川 嶺之介

七月九日  
○ 辦事 御役所

○ 奉歎願候覺、

元寄合 采地美濃國惠那郡之内 土岐郡 高六千五百三拾壹石餘

遠山 益之助

私儀兼々勤

王之心底御座候處、幸尾張大納言誘引之儀御座候テ、勤 王遵奉固相守、毛頭ニ心無御座候段、名古屋尾州館へ當四月三日罷出、證書差出、無滯請取相成申候、右ニ付テハ早々上京仕、私相應之御用向等相勤度段歎願可仕處、其頃ヨリ持病之疝癩、其上痔疾差發、著座步行等出來仕兼難澀仕罷在候得共、素ヨリ勤 王之赤心一徹之儀ニ御座候事故、少々モ快方御座候ハ、片時モ無意上京仕度候得共、何分難症故歎、速ニ順快仕兼、甚以困苦碎身罷在候、一體疾ヨリ右之御猶豫奉願度候得共、何分無官之小身ニテ、家來ヲ以奉歎願候儀ハ如何ニモ恐多奉存候間、是迄等閑罷在候得共、餘リ延日相成候ニ付、去月十五日以家來右之趣御届仕置候事ニ御座候、且又今度江戸府へ殘置候家來之者、其筋ヨリ呼出ニテ、當四月十一日徳川慶喜開城迄ニ勤 王之證書差出候者ハ、自今 朝臣被 仰付旨、從 大總督府宮御達ニ付、向後私元寄合之列除名相成候達御座候段、殘置候家來ヨリ申越承知仕之、難有仕合奉存候、右御禮モ申上候、將亦病氣少々宛快方仕候間、不取敢押候テ、道中取急キ昨夕出京仕候、何卒此上ハ私相應之御奉公向被 仰付候様御執成之程、偏ニ奉歎願候、此段上著御届旁言上仕候、以上。

七月十二日

遠山 益之助

○ 辦事 御役所

今般上京仕候處、兼テ本家石川日向守ヨリモ奉願上候通、身分相應之御用被爲 仰付被下置候ハ、難有奉戴仕、精々勉勵可仕候、何分宜御執成之程偏ニ奉願上候、以上。

私儀



石川日向守分家 高四千石元寄合席

石川 兵庫助

七月十二日  
辨事 御役所

○ 奉歎願口上書、

德川旗本

富松 喜太郎

私儀三河國寶飯郡竹谷村之内同國鹿島村ニテ、高七百石頂戴仕有之候處、去ル二月七日江戸表ニテ御達之趣ハ、關西知行有之面々ハ、從 朝廷御沙汰有之趣ニ付、勝手次第ニ可致被申渡、早速用意可仕處、持病痼癩ニテ步行難相成、且ハ從來幕府ニ奉仕罷在候儀ニ付、如何ト奉存候、乍去 王臣之外ハ無之ト心附、盡忠勤 王御奉公可仕ト決心仕、不取敢上京、身命抛打報國竭力仕心得ニ御座候、何卒 御憐愍ヲ被爲垂、御聞濟被爲成下候ハ、廣大之 御仁恩冥加至極難有奉存候、以上。

慶應四戊辰年七月十二日

富松 喜太郎

○ 辨事 御役所

○ 奉歎願口上書、

德川旗本 醫師

林 玄 養

私儀三河國寶飯郡竹谷村之内、高二百四拾石頂戴仕有之候處、去ル二月七日、江戸表ニテ御達之趣ハ、關西知行有之面々

ハ、從 朝廷御沙汰有之趣ニ付、勝手次第可致被申渡、早速用意可仕之處、二月以來病氣ニテ步行難相成、且ハ從來幕府ニ奉仕罷在候儀ニ付、入京之儀如何ト奉存候、乍去 王臣之外ハ無之ト心附、盡忠勤 王御奉公仕可ト決心仕、不取敢上京、身命抛打報國竭力仕心得ニ御座候間、何卒 御憐愍ヲ被爲垂、御聞濟被爲成下候ハ、廣大之 御仁恩冥加至極難有奉存候、以上。

慶應四戊辰年七月十二日

林 玄 養

○ 辨事 御役所

私儀去月十四日京著仕、同十七日以書付奉申上候通、先般 朝命之趣違奉仕、勤王之儀既ニ證書當三月中尾州殿へ差出候間、歸邑直様上京之心得ニ御座候處、病氣ニテ養生仕罷在、追々快氣ニモ相成候ニ付、罷登差扣罷在候、就テハ御一新之御趣旨奉體認、身分相應之御奉公被 仰付候ハ、難有仕合奉存候間、何卒格別之御執成ヲ以、何分之 御沙汰偏ニ奉願上候、以上。

三州寶飯郡上之郷

松 平 新 平

辰七月十二日

○ 辨事 御役所

三河國幡豆郡下六栗村 貳千石

今般 王政御一新ニ付、私儀勤 王一途相心得候底意御座候處、幸尾張大納言被誘引之儀モ御座候ニ付、當三月十日勤王尊奉固相守、一心無御座候段、尾張殿へ證書差出申候然ル處於元幕府留守居支配罷在候ニ付、届之上三月廿三日江戸表出立仕、四月十一日采邑三河國幡豆郡下六栗村へ在著仕候、速ニ上京可仕心底ニ御座候處、幼若殊ニ折惡敷腫物出來、

復古記 卷八十五(第五) 明治元年五月十五日

起座不自由ニ付、無據采邑養生罷在、少々ニテモ快方ニ御座候ハ、早速上京可仕處、追々病氣相重候ニ付、無據延引仕候段、誠ニ以奉恐入候、此度上京仕候上ハ、何卒相應之御用途被 仰付被下置候様志願ニ御座候間、格別之御憐愍ヲ以宜鋪御執成之程奉歎願候、以上。

慶應四辰七月十三日

小笠原 鍋次郎

辨事 御役所

○今般 大政御一新被 仰出候ニ付、西尾隱岐守ヨリ無二心勤 王可仕旨御沙汰之趣、家來出府仕申間候間、奉畏、證書相認、當三月二日同人方へ差出候處、被致落手、右證書尾張及迄差出方之儀被相伺候處、三吉歸邑之上差出可申旨御差圖之趣ニテ、三月十八日證書被差戻候段、知行所詰家來ヨリ其段申越候處、父儀去冬中ヨリ病氣罷在、何分難治候ニ付、父竝私以連名勤 王遵奉仕、赤心報國無二心證書奉差上候處、御落手被成下難有仕合奉存候、依之、私儀閏四月廿八日遠江國山名郡新池村陣屋へ歸邑仕候、父病氣ニ付爲名代不取敢上京可仕之處、洪水ニテ遅々仕候内、參河國御裁判處御用ニ付、去月十二日罷出、到著御届奉申上、書類持參奉差上候處、御落手被成下、同十七日知行所村高調竝志願之書面奉差上候處、同日朝御裁判處御廢止ニ付、御取上難被成候趣被 仰渡候ニ付、不取敢上京仕候、前顯之次第是迄上京遅々仕奉恐入候、何卒分限相應之御用向被 仰付被下候様奉懇願候、恐惶謹言。

父三吉名代兼

大 草 敬 吉

七月十四日

辨事 御役所

○再請書

奉歎願口上覺、

今般 大政御一新被 仰出候ニ付テハ、家來百姓ニ至迄、勤 王赤心相立度心願罷在候ニ付、御先鋒御總督様へ奉窺御機嫌候處、寛大之御沙汰ヲ以御印鑑頂戴仕、歸邑可致旨蒙御沙汰、冥加至極難有仕合奉存候、冬年ヨリ父三吉儀病氣之處、彌増歩行難成心痛仕居候得共、致方無御座、父三吉儀ハ其儘差置、家來、家族ニ至迄召連歸邑仕、三河國御裁判處へ出兵可差出心願ニ罷在候得共、幼年且人少之儀ニ御座候ニ付、獻納金奉願度候處、洪水ニテ當惑難罷仕、不得止事延日仕、漸先月中罷出歎願仕候處、最早御裁判處御引解ニテ願書御差戻相成候ニ付、乍恐 大御總督様へ奉窺 御機嫌、勤 王赤心相立度、相應之御用被 仰付候様奉歎願候處、寛大之御沙汰ヲ以御印鑑頂戴仕、冥加至極難有仕合奉存候、依之、當月朔日遠江國山名郡新池村陣屋出立、去九日京著御届奉申上候、乍恐私儀勤 王赤心相立度、相應之御用被爲 仰付下置、何卒寛大之御沙汰ヲ以、本領安堵被爲 仰付下置候ハ、子々孫々至迄廣大之御慈悲、冥加至極難有仕合奉存候、且百姓共安堵爲致度、乍恐 御仁情格別之御憐愍ヲ以、右願之通宜御沙汰之程偏ニ奉願上候、以上。

高三千五百石 元寄合席 遠江國山名郡新池村陣屋 父三吉名代兼

大 草 敬 吉印

辰 七月廿日

辨事 御役所

○今般御一新御改革被 仰出難有仕合奉存候、就テハ迅速上京 朝覲可奉望願之處、所勞罷在延引仕候折柄、吉田表へ御裁判所御取建相成、御用向有之、早々可罷出旨御達ニ付、參上仕候處、村高竝年齡、是迄勤之品等取調可差出旨被 仰達候ニ付、則右取調差出申候、且其砌右御同所へ内願書奉差上候處、願之趣神妙之至、追テ可及沙汰旨被 仰渡有之、御暇之上歸邑仕候内、於江戸表自今 朝臣被 仰付之旨從 大總督様被 仰渡ニ相成、冥加至極難有仕合奉存候、處然、前顯御裁判所へ差上置候願書へ御附札之上、御添書ヲ以御聞届罷成候段御下ケ相成候ニ付、則金子奉獻納候、右御請取書竝前條願書等之寫三通、別紙相添申候、且又其節家來ヲ以別紙寫之通奉伺候處、御附札ヲ以御差圖被成下置候ニ付、今般

上京仕候、何卒厚以 思食、老年之私相應之 御用被 仰付被下置候様、伏テ奉願上候、誠惶頓首。

辰七月十四日

寬 帶 刀印判

辨事 御役所

○別紙三通

今般 王政御一新被 仰出候處、私義兼々勤 王尊奉之底意一切他念無御座候、右ニ付當二月中證書奉差上候通之赤心ニ御座候、依之、相應之 御用筋蒙 仰渡志願ニテ、家族召連土著仕候、其後早々上京仕候テ、爲報國奉命盡力仕度奉存候處、老年之私且兵士等モ無御座、兵食奉貢獻度御座候テモ薄祿ニテ主從養口體而已ニ御座候間、少分之儀申出候モ恐多次第、如何可仕ト思慮ニ落不申、彼是消光仕候内、此度ノ御沙汰ニ付、不取敢參上可仕候處、所勞罷在延引仕候段奉恐入候、其砌家來ヲ以奉申上候之次第ニ御座候、且又前文之通長々苦心仕候義ニ御座候、責テ兩三之兵士相卒、御先鋒ニ御差加奉願度奉存候處、前文中上奉リ候通老體、其上多病之私、進退不自由不能其儀、残念至極奉存候、就テハ實以少分之至、甚奉申上兼候得共、金百五十拾兩奉獻納度奉内願候、兵食之御一助ニモ被成下候得ハ難有仕合奉存候、猶又老年相應之御用等被 仰付被下置候ハ、冥加至極難有仕合ニ奉存候、誠惶頓首。

辰 五月

寬 帶 刀

御附札、

願出之通御聞届ニ相成候事。

六月

御附札之通御聞届相成候條、申達候事。

六月 四日

寬 帶 刀 裁 判 處

覺、

一 獻納金百五十兩也、右落手候者也。

辰 六月 十四日

參州裁判所

會 計

局 印

○別紙

奉差上口上覺、

寬 帶 刀

帶刀儀當春勤 王尊奉之證書奉差上候通之赤心ニ御座候處、去月中於江戸表ニ旗下歸順之輩、自今 朝臣被 仰付候旨大總督様ヨリ御達御座候テ、冥加至極難有仕合ニ奉存候ニ付テハ、早速上京仕、右御禮奉申上且 御用等奉伺候テ宜鋪御座候哉、當 御役所へ罷出候テ前件之通奉伺可然候哉、何レニモ本領安堵之 御沙汰拜承候テ、御用筋相勤申度、帶刀參上、此段御伺奉申上候筈之所、中暑ニテ此節不快、旁々恐私ヨリ奉伺候、宜鋪御差圖奉願上候、以上。

寬 帶 刀家來

織 田 健 治

御附札、

早々參 朝 御用相伺可申事。

○ 奉歎願候覺、

本高五百石 一高六百五拾八石五斗九升八合 但貞享三丙寅年改出高共

鈴木清之助政舉

辰五十六歲

一家祖

鈴木織部康政

右康政儀、本國紀州、生國三河ニテ、家系出自神饒速日命、本姓穗積、遠祖善阿彌重善自紀州藤白移于三河國矢竝村、其子重勝ヨリ數世之孫次郎左衛門重信三男、右織部康政儀、賀茂郡足助莊九久平村ニ罷在、徳川家康へ被召出、其節高五百石、同郡之内ニテ五ヶ村、以前ヨリ所持仕來候地所其儘賜リ候、於遠州高天神軍功有之、諱一字ヲ賜リ、右五百石知行仕、相續仕來罷在候、

三代目

鈴木市兵衛政次

右政次儀、父市兵衛政重病死仕候節、二歳ニテ家來菅沼作右衛門、鈴木十郎右衛門兩人ヲ召連、江戸表へ罷出候處、父政重家督相續可仕旨、徳川家康ヨリ被申付、其後元和元乙卯年大坂再亂之節、家來菅沼作右衛門召連、陣營ニ供奉仕候、右家來末孫共當時召使罷在候、

一舊幕府ニテ代々大番相勤、私儀天保十二辛丑年ヨリ腰物方相勤罷在候處、病氣ニ付元治元甲子年五月晦日願之通退役被申付候、然ル處、當辰ノ二月中本多美濃守ヨリ知行所へ達シ有之候間、岡崎表へ家來罷出候處、尾州參與御附屬之衆ヨリ勤 王之儀御誘引有之候旨、知行所詰家來共ヨリ申越候間、勤 王遵奉之儀ハ更ニ別心無御座、依之、早々采地へ罷越、御指揮可奉請旨之證書、同月十七日差出申候、私總領寬之丞儀、安政六未年十二月從部屋住被召出、大番被申付、文久三亥年學問所書物方出役相勤、其後銃隊差圖役へ相轉シ、同三卯年正月爲交代上京仕、同年八月用濟ニテ罷下リ、當辰ノ二月廿七日病氣ニ付、願之通退役被申付、同三月三日江戸表出立爲致、同十七日知行所三河國賀茂郡九久平村へ土著仕候、右之節私儀モ同様江戸表出立可仕之處、其頃道中人馬差支候趣、且家族引連候儀ニ付、無餘儀商船申談、同三月十五日乘組、四月二日九久平村陣屋へ土著仕候、就テハ早々上京可仕之處、病氣ニテ及延引候内、吉田表へ 御裁判所御取建御座候ニ付、則私儀當辰五月上旬 御同所へ罷出、御布告之趣奉伺、其節知行所村高帳始メ諸帳面差出申候、其後又々持病氣ニテ罷在候處、漸當節快氣相成候ニ付、當月九日知行所表出立致シ上京仕候、猶前條奉申上候通、素ヨリ勤 王一

途之赤心ニ御座候間、何卒格別之以 御憐愍、身分相應之 御用相勤、本領安堵被 仰付被下置候様偏ニ奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年七月十七日

鈴木清之助

辨事 御役所

○ 私分家水野春四郎儀、勤 王遵奉之誓書、尾張大納言迄差出候ニ付テハ、速ニ上京、乍恐可奉伺 天機之處、折節上州小幡邊百姓共多數所々及亂妨、信州地へモ致侵入候ニ付、知行所猶嚴重鎮靜仕置、出立用意之折柄發病ニテ、段々延引罷成候内、元旗下歸順之輩 朝臣被 仰付候旨、大御總督府ヨリ被 仰出候間、猶上京遲延相成候テハ奉恐入候ニ付、今度病氣押テ上京仕候、就テハ此上之以 御仁恤本領安堵被 仰付被下置候様、於私モ偏奉懇願候、恐惶謹言。

七月

水野出羽守

辨事 御役所

○ 當春以來 御大政御一新ニ付テハ、殊更勤 王遵奉之外他念無御座候旨、尾張大納言被へ誓書差出、引續當三月七日知行所信州佐久郡根々井村へ土著之上、村々取締等仕、且東山道御鎮撫使岩倉卿へ金子百兩、玄米百俵獻納仕度旨奉願上、御本陣へ相納、直様上京、乍恐奉伺 天機度志願ニ御座候處、折節上州小幡邊之百姓共多數相集、民家等打毀、猶追々増長、信州表へモ致亂入、是又民家打毀、知行所へモ押入候形勢ニ付、村々嚴重相固、鎮靜方手配仕、漸々取締候ニ付、上京用意罷在候折柄、發病ニテ、段々延引仕候内、元旗下歸順之輩自今 朝臣被 仰付候旨、大御總督府ヨリ被 仰出、難有仕合奉存候、依之、猶更上京遲延相成候テハ奉恐入候間、今度病氣押テ出立仕、一昨十七日到著仕候ニ付、右御禮奉申上度奉存候、就テハ猶此上之以 御仁恤本領安堵被 仰出候様、偏奉懇願候、誠恐誠惶謹言。

元 旗下

辰七月十九日

水野春四郎

辨事御役所

乍恐奉願候口上之覺、

今般 御改政御一新被爲 仰出候御沙汰之趣、誠以難有奉拜承候、依之、私儀早速上京仕、奉遂勤 王度念願ニ罷居候處、暫所勞延引仕、且道中隙取仕候段、深ク奉恐入候、則一昨廿日京著仕候ニ付、參著御届書奉差上候、且從 有栖川宮様於江戸御城頂戴仕候 御印鑑モ御届奉申上候、何卒相應之 御用向被爲 仰付被下置候様奉厚願候、併小知人少之儀ニ候得ハ、自然不行届之程モ重々奉恐入候間、何卒 御憐愍ヲ以何レカ之御警衛へ 御召加被爲 成下置候ハ、實ニ以冥加至極難有仕合奉存候、此段格別之以 御慈悲右願之通 御許容被爲 成下候様、偏宜奉願候、以上。

慶應四年辰七月廿二日

長井莊九郎

辨事御役所

元奧詰銃隊

一高貳千五百七拾石

戸田松三郎

辰二十六歲

私儀安政六巳年八月三日家督被申付、文久三亥年十二月九日兩番へ番入被申付、慶應二寅年十二月廿一日奧詰銃隊被申付、同四辰年二月初旬ヨリ病氣罷在候處、大政御一新ニ付、同三月十一日病氣中押テ江戸表出立、同月十六日知行所駿州富士郡中里村へ土著仕、其後四月五日駿府城へ罷出、大總督宮様竝御四卿様奉伺御機嫌、其節勤 王尊奉證書差上、其後參州吉田表御裁判所へ舊旗本當人可罷出旨御達ニ付、早々罷出、御用可奉伺之處、發病不得止事、追々延引奉恐入、

此節少々快方仕候ニ付、六月廿七日采地中里村出立仕候之處、右之御裁判所御引上ニ相成候由ニ付、直様登京之上御用奉伺度、昨廿二日夕到著仕候、此段御届奉申上候、且先般家族竝家來共江戸屋敷引拂之節、池上於本門寺御引替被下置候大總督宮様御印鑑、竝於川崎驛被下置候 御先鋒 御總督府御印鑑共貳枚、且箱根 御關所印紙相添奉納候、何分出格之以 御憐愍、相應之御用被 仰付候様奉歎願候、以上。

慶應四辰年七月廿三日

戸田松三郎

私儀

去ル二月十六日江戸屋敷出立、東海道旅行、二月廿九日尾州名古屋へ著之上、前大納言及へ勤 王遵奉仕報國實効相立度奉存候間、何卒相應之儀被 仰付候様奉懇願候處、御聞届相成、證書差上候ハ、東山道總督府 岩倉及御本陣へ可罷出旨御差圖、殊ニ傳書御渡ニ付則持參、三月六日名古屋表出立、木曾路旅行、三月廿四日武州板橋驛御本陣へ罷出、傳書差出竝願之趣申立候處、御聞届、武州蕨驛へ扣罷在候様御差圖ニ付、止宿仕候處、三月廿六日左之通、

御用有之條明廿七日五半時 御本陣へ出頭可致事。

大島攝津守

辰三月廿六日

東山道總督府

執

事印

右ニ付翌廿七日 御本陣へ罷出候處、以御書付左之通被 仰渡候、

是迄朝敵徳川慶喜ニ屬シ居候處、今般勤 王之實効相立候爲メ、官軍隨從之儀願出候得共、頃日慶喜恭順之趣申立且謹慎罷在候間、御進撃ハ御見合ニ相成候、依之、采地へ引取、再度之御沙汰奉待候様被仰出候間、此段可被相心得事。

復古記 卷八十五(第五) 明治元年五月十五日

戊辰三月

執事印

右御書付頂戴仕候ニ付、武州蕨驛出立、本國美濃國武儀郡關村采地へ引取、御沙汰奉待上罷在候處、其後尾藩ヨリ達書左之通、

松平肥後反逆愈相募リ、既ニ先手信州地へ操出候趣ニ付、今般從 朝廷大納言へ賊徒征伐被 仰付、大隊御旗二流レ御渡ニ相成候、依テ近々出馬可致候、付テハ歸順之實効被相顯候時節候間、不日出陣之砌ハ可申達儀モ可有之候條、其刻ハ迅速人數被差出候様、爲御心得前以申達置候事。

右之通達御座候ニ付、人數備置、時宜ニヨリ私儀モ出馬可仕心得罷在候處、太田驛へ御出張相成候前大納言及、其後居城へ御立戻リニ付、采地へ人數備置、此度上京仕候、前條奉申上候 王政御復古、萬機御一新之御趣旨被爲 仰出奉感徹敬伏候、依之、報國之實効相立奉申上度、何卒相應之儀被 仰付候様奉懇願候、此度上京仕候御届、且ハ奉懇願候間宜敷御執成被成下候様、奉願上候、誠恐謹言。

高四千七百石 美濃國之内 美濃國武儀郡關村陣屋 元勤仕並寄合

大島攝津守

辰七月廿五日

辦事傳達所 御役人中

一高五百石

池田松之助

美濃國下有知村三百石

上總國瀨文村百六拾四石八斗壹升 同國下太田村三拾五石壹斗九升

先般從 朝廷被 仰出候御趣意奉感戴、前四月上旬尾州表へ出府仕、尾藩荒川彌五右衛門公へ勤 王證書差出、舊地内へ引取謹慎罷在候處、五月中於江戸表歸順之輩自今 朝臣ニ被 仰付候旨 大總督府被 仰出候段難有仕合、同六月廿七日

尾藩荒川彌五右衛門公ヨリ、右ハ歸順在邑是迄謹慎被致候處、最早不及其儀候旨被達候ニ付、今般 朝臣被 仰付候之爲、御禮上京仕候間、右ニ付猶相當之御用被 仰付候様奉志願候、以上。

元兩番席 遊撃隊取締

池田松之助

辰七月廿五日

辦事御役所

奉歎願候口上覺、

今般 御一新被 仰出付、家來小者至迄勤 王赤心相立度奉存、先般三河國吉田表 御裁判所へ書類且願面等奉差上候處、御用被 仰付、願之通獻金千兩上納仕、冥加至極難有仕合奉存、引續 大御總督宮様へ奉窺 御機嫌候處、寛大之御沙汰ヲ以 御印鑑頂戴仕、去ル十三日遠江國山名郡北原川村陣屋出立、去ル廿二日京著仕、御届奉申上候、且頂戴仕候 御印鑑返上仕候處、御落手相成難有仕合奉存候、乍恐未幼弱ニハ御座候得共、勤 王赤心相立度、何卒此上相應之御用向被 仰付被 下置、本領安堵被 仰付被 下置候ハ、子孫迄冥加至極不淺難有仕合奉存、知行所百姓共迄安堵爲仕度候間、寛大之 御仁慮ヲ以、願之通宜 御沙汰偏奉願候、以上。

七月廿五日

大河内綱之丞

辦事御役所

一高貳千五百石

村瀬眞次郎

高貳千石美濃國武儀郡内三ヶ村 高五百石上野國邑樂郡内貳ヶ村 此譯

千貳百石美濃國武儀郡 倉知村 四百三十拾石同 跡部村 三百七拾石同 白金村

邑樂郡 貳百七拾七石 北大島村 貳百二十拾貳石 仙石村

先般從 朝廷被 仰出候御趣意奉感戴、前四月上旬尾州表へ罷越、尾瀨荒川彌五右衛門へ勤 王證書差出候、舊地へ引取 謹慎罷在候處、五月中於江戸表歸順之輩自今 朝臣ニ被 仰付候旨、從 大總督府被 仰出候段、難有仕合、七月廿七日荒 川彌五右衛門ヨリ最早謹慎ニ不及旨申達候ニ付、今般 朝臣被 仰付候之爲、御禮上京仕候間、猶相應之御用モ御座候得 ハ被 仰付被 下置候様、奉志願候、以上。

元遊擊隊

辰七月廿七日

村瀨 眞次郎

辨事 御役所

○ 備中守分知太田榮之丞儀、年來多病罷在候處、御一新被 仰出候ニ付、爲勤 王押テ當三月中知行所信州伊奈郡松島 村へ土著仕、引續上京可仕之處、其以來別テ相勝不申、御時勢柄深恐入心痛仕候折柄、備中守歸邑之上厚苦痛仕候ニ付、 早速家來共差遣様子柄相札候處、病氣之體、氣分閉塞、疝氣相發、不都合之場合モ有之、種々療養仕候處、兎角同篇ニテ出 來不出來モ有之、是迄家督後出頭モ不仕候次第ニテ、迺モ此末之處病氣全快之程無覺束、一稔勤 王忠誠ヲ爲勵度奉存 候得共、容體之趣ニテハ何分右之場合ニ至リ申間敷、彼是手間取候テハ實ニ奉恐入候次第ニテ、當惑至極、右體之者遮テ 上京爲仕候テモ、若如何之儀出來候テハ、重々奉恐入、一同懸念仕候榮之丞家來共モ厚心配之餘リ、不得止弟彦十郎不取 敢上京爲仕候間、不苦儀ニ御座候ハ、相應之御用筋被 仰付候様奉歎願候、右願之通出格之 御仁慈ヲ以被 仰付被 下置候ハ、冥加至極難有仕合奉存候、何卒 御憐察御聞届被成下候様、偏ニ奉願上候間、御内慮奉伺候ニ付、御執成

之程奉願度旨、在所表ヨリ申付越候ニ付、此段奉申上候、以上。

七月廿七日

太田 備中守家來

辨事 御役所

梅原 藏右衛門

○再請書

分知太田榮之丞、弟彦十郎不取敢上京爲仕候儀ニ付、備中守ヨリ御内慮伺中ニハ御座候得共、今般彦十郎歎願書奉差上度旨 申聞、依之、右奉願候趣宜御執成被成下候様奉願度旨、在所表ヨリ申付越候ニ付、此段申上候、以上。

八月廿日

太田 備中守家來

辨事 御役所

梅原 藏右衛門

○ 兄榮之丞儀年來多病罷在、家督後、是迄出勤難仕病體御座候間御時勢柄不本意至極奉存、既退隱可仕之處、御一新被 仰 出、不取敢知行所へ引取、續テ上京可仕振合御座候間、同人出京之儀種々心配仕候得共、右様之者御場所柄へ差出候儀、本 家備中守初一同懸念仕、相續之者取極、此期ニ至隱居家督之儀奉歎願度決評之上、自然私上京仕候、先般備中守ヨリ奉願候 通御憐察被成下、速願意相叶、一同安心仕候様、只管奉歎願候、右願之通相濟候上ハ、私儀兩京中ニ罷在、何分之勤向被 仰 付候様、懇願仕度素心御座候、此段奉歎願候、以上。

慶應四戊辰年八月廿日

舊幕元寄合 太田榮之丞弟

辨事 御役所

太田 彦十郎

復古記 卷八十五(第五) 明治元年五月十五日

奉歎願候口上覺

大政御復古被 仰出候ニ付テハ、朝命尊奉之外他念無御座候處、當正月三日以來大變動之事件、江戸詰合中傳承奉恐愕、兼テ勤 王報 國之素志貫徹仕度、速ニ江戸表引拂、遠江國內諸藩ニ先立、在所遠州氣賀へ歸邑之上、祖先以來守衛仕候氣賀御關所相固、東海道 御先鋒 御總督府並尾州家へ勤 王證書奉差上、從 御總督府氣賀關門之儀ハ要衝之地ニ付、賊徒防禦嚴重取締可致、改テ御守衛被 仰付、尙又 御大總督御宮ヨリモ定番ト相心得、彌勉勵可仕被 仰出、御一新之折柄如斯蒙 朝命、從來之御關所御守衛仕候段、廣大之 御仁惠ト徹心根深奉感激、乍微力上下擧テ盡粉骨、嚴重警衛仕、勤王之實効相立度、御關所要害遠近之村々へ時々巡邏人數差出、脫走潛伏之賊徒召捕方手配等盡力罷在候ニ付、兼テ上京仕度志願ニ候得共、自身指揮不仕、不行届之儀御坐候テハ不相濟候間、關東御平定迄上京延引之儀、重臣ヲ以奉伺候處、不苦候旨、關門守衛向御大總督御宮從御命令、無怠慢可相勤旨被 仰出候段、重々難有仕合奉存候、依之、彌勉勵仕、京都表へハ爲伺御用重臣相詰罷在候、其後相州小田原邊動搖ニ付テハ、脫走之賊徒潛行モ難計候間、嚴重巡邏可仕旨、三河國御裁判所ヨリ御達有之候ニ付、尙精々取締仕候、右之次第ニ付未上京ハ不仕候得共、既ニ四月中 御沙汰ニ付、由緒奉書上、閏四月御取調ニ付、領分鄉村高竝御用相勤候廉々、委細奉申上候、其後五月中大夫被ト被 仰出候段、畠山飛驒守、松平與次郎ヨリ通達有之、難有仕合奉存候、然ル處、同列上京仕候向ハ、先達テ本領安堵被 仰出候趣、格別之 御仁惠ト奉感拜候、就テハ私儀未タ 御沙汰之儀モ無御座候處、家來末々領民ニ至迄深痛心罷在候ニ付、上京不仕候内奉願候儀ハ、深奉恐入候得共、前件申上候通、御關所御守衛仕候ニ付テハ、朝命廣大之 御恩澤申聞、衆心安堵爲仕、勤王之赤心益厚申付度、何卒一同之情實 御垂憐被成下、可相成儀御座候者、此上之以 御仁惠本領安堵之 御沙汰被 仰出候様、偏ニ奉歎願候、以上。

七月廿七日

中大夫

近藤兵庫助

辦事御役所

奉歎願候口上覺

王政御復古ニ付、大義ヲ重シ、逆ヲ去リ、順ニ歸シ、春來迅速衆ニ先立歸邑仕、氣賀御關所御守衛 御用相勤罷在、伺濟之上未タ上京不仕、本領安堵之 御沙汰無御座候ニ付、家來末々領民ニ至迄深苦心仕候間、當秋以來巨細之情實追々奉歎願、尙此程再應奉懇願置候所、今般遠江國天龍川堤御普請ニ付、中大夫以下御手傳被 仰付、本領安堵之御所分無之向ハ、御手傳難被 仰付、知行所地方ヨリ出金之名目ヲ以 上納金世話可致旨、會計御役所ヨリ被 仰渡、其上兼テ御布告ニ相成候通、本領安堵不被 仰付候向ハ、當收納近藩ニテ支配之譯ニ付、租稅取建備置候様可致趣奉拜承、恐愕之至奉存候然ル所、兼テ奉歎願候通、春來勤 王一途ニ相心得、御用相勤候ニ付テハ、家來ハ勿論領民ニ至迄夫々 御趣意柄厚教諭罷在候折柄、即今采地之所分モ難仕姿ニ相成、自己之收納相成兼候様ニテハ、自然上下之素意相屈、殊ニ家來扶助ハ勿論、御用相勤候儀モ難行届、擧テ痛歎不堪苦情候折柄、東西之時態奉遙察候所、奥羽之儀モ追々御平定相成候哉ニモ粗傳承仕候間、東京 御著輦之上ハ、御關所御守衛向暫時家臣共へ申付置、東西兩京之内へ罷出、本領安堵之御沙汰被 仰出、上下安穩ニ 御用相勤度段、乍恐懼切迫之苦心難忍、御輦路 御泊驛へ奉歎願候所、本文之趣ハ太政官へ可申出旨、以御附札被 仰渡候ニ付、尙再三奉懇願儀恐縮之至奉存候得共、前件之次第ニテ一同恐歎罷在候間、情實 御垂憐被成下、兼テ伺濟ニテ上京不仕候儀ニハ御座候得共、可相成儀ニ御座候ハ、東西兩京之内へ速ニ罷出、出格之以 御仁恤、兼テ奉書上候込高新田共五千八百拾九石餘高結本領安堵被 仰出、一同廣大之 御仁惠難有奉捧戴、尙此上碎身盡力 御用勉勵相勤度偏ニ奉懇願候、何卒右願之通被爲 聞召届、迅速之 御下知只管奉仰侍候、此段奉歎願候、以上。

十月十二日

元交代寄合

近藤兵庫助



辨事御役所

○ 奉願上候口上覺、

大政御復古被 仰出候ニ付テハ、朝命尊奉之外他念無御座候處、當春來衆ニ先立歸邑仕、氣賀御關所御守衛改テ被 仰付、御一新之折柄廣大之 御仁恩卜徹心根難有深奉感激、要衝之地ニ付、乍微力擧テ盡粉骨御警衛罷在、伺濟之上御平定迄上京延引仕候ニ付、爲伺 御用重臣京詰罷在、御取調向御布告等之儀總テ上京之者同様被 仰付、且又今般天龍川堤水害御普請ニ付テハ、相應之出金被 仰付候處、殊之外疲弊仕居候得共、盡力之上無滯世話方上納仕、難有仕合奉存候、此上益勤 王之素志貫徹仕度、此程奥羽御鎮靜之趣拜承仕候間、御關所御守衛之儀ハ、暫時家來共ハ嚴重申付置、兼テ志願之通、今般人少ニテ登京仕候間、尙出格之以 御仁恤、春來無餘隙御用相勤候儀 御垂憐被爲成下、兼テ奉歎願候儀被爲 聞食届、一同安堵仕候様 御沙汰之程奉捧戴、此上愈奮發御用勉勵相勤度偏ニ奉懇願候、尙巨細之儀ハ、以別紙奉申上候、以上。

元交代寄合 氣賀御關所番

十月三十日

近藤兵庫助印

辨事御役所

○ 別紙ハ之ヲ伏ス。

再歎願書、

私儀先達テ歎願書ニ申上候通、元關東代官役相勤、但州生野表ニ罷在候處、當正月十四日鎮撫使御先鋒方入陣相成候刻、勤 王遵奉之確書奉獻候處、同月十六日家族共一同引拂之儀御達ニ付、彼地引拂、流寓罷在候儀ニ御座候處、方今宿弊御一新、天下萬姓其處ヲ得候様、深 御仁恤被爲 在候御明時奉感戴、因テ私輩之儀モ固有遵奉之赤心貫徹、何卒相應御奉

公仕度段、當閏四月三日民政御役所へ罷出、加藤佐太郎ヲ以右歎願書進達仕、御沙汰相待罷在候儀ニ御座候處、右御役所之儀御廢止相成候趣ニ付、右書類寫相添、猶亦此段奉歎願候、誠恐誠惶謹言。

慶應四年七月

横田新之丞

別紙二通、

奉歎願書付、

私儀元關東代官役相勤、但州生野表ニ罷在候處、今般之御次第ヲ以、同國之儀モ鎮撫使御巡回被遊候段、當正月十三日夕刻、御先鋒方先狀到來之由、村役人共届出、同日同國竹田町御宿陣相成候趣承知仕、不取敢私元縮手代外壹人差出、私儀モ時宜次第右御宿陣へ參上仕候心得申含差遣、陣屋許寺院へ總督御旅館設置、火之元等相識、右竹田町へ差出候手代共否相待居候處、翌十四日拂曉右手代共前導ニテ、御先鋒方直ニ入陣相成、今般鎮撫使御巡回之御次第柄等御演達之趣、謹テ領掌仕、就テ御糾問之件々明白御答付、即刻勤 王遵奉之確書、薩藩吉田清助ヲ以奉獻候處、御採上相成、且米金有高等巨細書付取調上納仕、同日御達之趣ヲ以陣屋相開、下宿ニ相愼罷在候處、同月十六日、家族共一同引拂候様御達ニ付、彼地引拂候儀ニテ、其後家族共ハ、當時生野表ニ勤續罷在候私元手代共内願聞届相成候趣ニ付、右へ相囑シ、私竝悴新太郎儀、作州邊寺院ニ罷在候儀ニ御座候、方今宿弊御一新之大典 御隆興、天下萬姓其處ヲ得候様深 御仁恤被爲 在候御明時、恐懼奉感戴候、因テ私輩之儀モ固有遵奉之赤心貫徹、何卒相應御奉公仕度、此段奉歎願候、右情實御聽上、寛容 御沙汰之程偏奉仰願候、誠恐誠惶謹言。

慶應四年閏四月

横田新之丞

○ 確書、

今般西園寺殿郡縣鎮撫トシテ御巡回被爲在候條、重大之御儀誠奉恐入候、私輩徳川氏之微臣候得共、固ヨリ勤 王遵奉之

道ハ相辨居候儀ニ候得ハ、速降服仕、都テ官軍御用之筋被 仰付候得ハ、徹身難有奉存候、此段可然被仰上可被下候、誠恐誠惶謹言。

慶應四年正月

横田新之丞

乍恐奉敷願候口上、

德川旗下

高五百石

柴田虎之助

今般 王政御一新被 仰出候ニ付、勤 王尊奉之儀ニ付テハ早々上京可仕志願罷在、當四月十四日土著仕、私儀ハ陣屋無御座候ニ付、本家柴田岩五郎知行所三河國額田郡本宿村陣屋同居罷在、尤不快ニ付延引罷在、此程快氣仕候間、去ル廿二日出立仕、去ル廿五日京著仕候、相應之御用等被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、御奉公之義ニ付テハ抛身命候共異存更無御座候間、御奉公被 仰付被下候様奉敷願候、以上。

七月

柴田虎之助

一切米貳百俵 但三斗五升入 藏米ニテ請取來申候

右ハ私先祖甲斐國住石原淡路守末裔石原清左衛門儀、徳川家康甲州打入之節致隨從、書面之通切米宛行相成、夫ヨリ代々私迄引續同様宛行請、徳川舊領地代官役相勤、數年來大津役屋舖在任罷在、當正月中ノ事ニ付、御趣意之趣奉違奉、同月中勤 王奉願候處、是迄通相心得勤方可仕旨、於 參與御役所被 仰渡候處、當時ハ近江國支配所向ハ同國縣令所へ引渡、私儀同所傳達相勤罷在候、右ニ付テハ奉恐入候儀ニ御座候得共、書面切米之儀前段之通數代引續請來、右ヲ以相續罷在候儀ニテ、當今之凌方ニモ拘リ候ニ付、何卒格別之 御仁憐ヲ以書面切米之儀、從前之通連綿被下置候ハ、微少之身分ニ候得

共、舊傳一家、此上以永續可仕儀ト誠以冥加至極、難有仕合奉存候、依之、此段謹惶奉敷願候、以上。

辰 七月

石原清一郎

辦事 御傳達所

○

私儀

累代奉浴 天恩候儀、別紙由緒書ニ申上候、今般 大政御一新ニ付テ、兼テ勤 王之素志奉表度上 京仕候、何卒格別之以御憐愍、朝臣之末ニ被差加、身分相應之御用被 仰付候ハ、冥加至極、難有仕合ニ奉存候、此段宜敷御執奏之程、偏ニ奉懇願候、以上。

辰 七月

古幕 留守居支配

辦事 御役所

渡邊 鐘次郎

○ 由緒書ハ之ヲ佚ス。

私知行所濃州五箇郡之内、千石領知罷在候處、此度 王政 御一新ニ付、右領知 朝廷 御料被 仰付、尾藩荒川彌五右衛門へ御預、同人指揮可受旨被仰渡候趣、舊知行所内家來共、當春罷下リ申聞候、私儀素ヨリ勤 王ニ念無御座候、多年之御皇恩奉報候志願ニ付、速ニ去三月四日江戸表出立、東山道罷登、道中混雜ニ付、同月廿二日尾州名護屋表へ當著仕、右同人ヨリ諸事差圖ヲ請、證書竝道中次第柄書面等差出、且乍微力奮發實效相立度儀ニ付、出兵人名書差出候處、四月二日同表ヨリ出立確定ニ相成、然ル處東山道 御先鋒 御總督府殿ヨリ被仰越候趣ヲ以、出兵之儀御解ニ相成候旨、荒川彌五右衛門ヨリ相達、引續舊知行所へ引取、再度之 御沙汰有之迄、土民 王化ニ服シ候様盡力可致旨、右 御總督府殿ヨ

リ御演達之趣荒川彌五右衛門相達候ニ付、四月九日舊知行所同國不破郡荒井村へ引取、私ニ慎罷仕候處、其後歸順在邑  
謹慎之處、其儀ニ不及旨 御沙汰之趣、荒川彌五右衛門ヨリ相達、就テハ 御一新之御時勢、深奉恐入候間、此度上京之  
上益勤 王之一途ニ進ミ、身分相應之御奉公奉歎願度志願ニ付、尾州表へ罷出、右伺濟之上、七月廿五日舊知出立、同月  
廿七日御當府へ著仕候間、只管御下知之程奉歎願候、依之、此段御届奉申上候、以上。

元旗本

辰 八月二日

別所 孫四郎

○ 辨事 御役所

私儀去三月六日江戸表出立、中山道旅行仕候、然ル處、先般 御總督府御進發之折柄、舊知行所ニ差置候家來共へ、兼テ申  
付置候私勤 王之宿願奉歎願候處、尾瀨荒川彌五右衛門へ御委任被 仰付候ニ付、同月廿四日不取敢尾張表へ罷出、右  
奉歎願候處、爲實效出兵差出候様御達ニ付、則尾張迄出張爲仕候處、從 御總督府被 仰越候趣モ御座候旨ヲ以、御解御  
達御座候、且舊知へ引取相慎可罷在旨御達ニ付、舊知美濃不破郡大石村ニ深謹慎仕居候内、去六月廿五日謹慎不及其儀  
旨尾瀨荒川彌五右衛門ヨリ以御廻狀御達御座候ニ付、斯ル 御一新之折柄、甚恐縮之至ニ奉存候間、今般上京之上身分  
相應之御奉公奉歎願度、依之、去月廿二日尾張表へ罷出、右奉伺候處、御聞濟、同廿五日舊知出立、同廿七日三條大橋西詰  
目貫屋藤左衛門方へ止宿仕候、此段御届奉申上候、以上。

元旗本

辰 八月二日

長谷川 甚兵衛

○ 辨事 御役所

私儀

從來勤 王之志願罷在候ニ付、早春速ニ上京仕、相應之 御用奉蒙度存意ニ候處、舊年來病氣ニ付、不得止事當二月四日、東  
山道鎮撫御總督濃州大垣御本陣迄、家來共ヲ以歎願書差出候之處、御總督御落手相成、猶尾瀨荒川彌五右衛門へ取締申付候  
間、可得其意旨被仰渡候ニ付、則彌五右衛門へ家來共ヨリ歎願書差出置候、其後追々快氣仕候間、三月九日江戸表出立、中山  
道上ケ尾宿ニテ御總督御本陣へ私參上、歎願書差出候處、右願書御落手相成、御印鑑頂戴仕候、同月廿五日尾瀨荒川彌五右  
衛門へ罷出、續テ大納言殿面會之上、御總督府へ可相伺候間、勤 王之證書可差出旨被申聞、則證書差出候上、舊知行所へ  
罷越、御再命可相待旨被申渡候間、濃州方縣郡御望村陣屋へ罷越居候、今般荒川彌五右衛門添書持參、尾州表ヨリ出立仕、  
昨七日著京仕候、何卒寛大之御憐愍ヲ以、相應之 御用奉蒙度、此段宜御沙汰奉願候、以上。

八月三日

松平 隼人

○ 辨事 御役所

一高千貳百石

德川元奥詰銃隊

本多 銈之助

當辰四拾壹歳

高千石

三河國碧海郡之内

高貳百石

同 國賀茂郡之内  
常陸國信太郡之内

先般從 朝廷被 仰出候御趣意奉感戴候、私儀病氣ニ付、二月下旬、尾州表へ家來ヲ以、尾瀨野村八十郎へ勤 王證書差  
出候ニ付、早速上京可仕之處、兎角相勝不申、引籠罷在候處、當節快氣ニ趣候ニ付、不取敢上京仕候、何卒相應之御用被  
仰付被下置候様、奉志願候、以上。

慶應四辰年八月三日

本多 銈 之助

○ 辨事 御役所

近傍旗士

松平 誠三 郎

右者勤 王違奉ニ付、去月廿六日在所平針村出立、當朔日京著、取調書差出依頼致候ニ付、添書ヲ以此段御届申上候、以上。

本多 美濃守 家來

井上 九兵衛

八月三日

○ 辨事 御役所

奉歎願候覺、

一 高三百貳拾四石四斗九升三勺 込高共

松平 誠三 郎 義勝

辰四十八歲

一家祖

松平 六左衛門 隆春

承應二癸巳年十二月、父甚三郎行隆高千三百之内千石、總領甚三郎隆見へ、三百石三河國額田郡之内平針村寺平村弟六左衛門隆春へ、分地致、兩番相勤申候、

一 舊幕府ニテ代々兩番相勤、私儀天保十三壬寅年三月、兩番へ從部屋住入番、文久元己酉年九月四日家督仕、慶應元乙丑年九月六日奥詰銃隊罷成、四月廿日退役仕、然ル處、當辰二月中本多美濃守ヨリ達有之候ニ付、岡崎表へ家來罷出候、尾州參

與御附屬ヨリ勤 王之儀御導被成下候旨、家來ヨリ申越候ニ付、勤 王尊奉之儀更ニ別心無御座、依之、早々采地へ罷越御指揮可奉請之證書差出申候處、其後持病之不快ニテ罷在、江戸表四月廿六日出立、閏四月七日知行所表へ著仕候處、又候不快ニテ漸七月廿六日知行所出立上京仕候、猶前條奉申上候通り、勤 王一途之赤心ニ候間、何卒格別之以 御憐愍、身分相應之御用相勤可仕間、本領安堵被 仰付被下置候様偏ニ奉懇願候、以上。

舊旗 木

松平 誠三 郎

慶應四戊辰八月

○ 辨事 御役所

奉歎願候口上覺、

名取 桃五郎 二男

名取 知之 助

高八百石

當辰二十一歲

先般東山道 御總督様御下向之砌、於大垣表父桃五郎知行所濃州村々御取締被成下候段、同所詰家來之者共ヨリ申越候付、父桃五郎歸邑可仕之處、靜寛院宮様守衛罷在候付、不得止以家來四月十八日板橋驛於 御總督様御本陣歸邑之儀奉願候處、桃五郎儀ハ不及歸邑旨被 仰渡候付、私儀歸邑之儀奉願候處、御聞濟相成、則御印鑑頂戴仕、同月廿日江戸表出立、同晦日在所表へ著仕、其段閏四月三日尾州表へ罷出御届申上候、私儀今般從 朝廷被 仰出之趣、深奉感得、勤王之道盡力可仕決心罷在候、猶實功相立申度心願之旨、證書差上候處、於在所謹慎罷在候様被 仰渡候付、閉居仕居候處、歸順在邑之面々謹慎不及旨被 仰觸候間、爲御禮參上、其後上京之儀奉願候處、願之通被 仰渡候付、今度上京之上身分相應之御奉公仕度奉願候、何卒 御仁惠之奉蒙 御沙汰度奉歎願候、恐々謹言。

八月四日

名取知之助

○ 辨事御役所

先般從 朝廷被 仰出候厚御趣意之旨、深奉感戴、勤 王之志願益奮起仕候間、何卒私身分相應之御奉公被 仰付被下置候ハ、幾重ニモ忠勤仕度奉存候、依之、御沙汰之程偏ニ奉懇願候、恐惶謹言。

元 旗本

辰 八月六日

馬 場 大 助

○ 辨事御役所

先般從 朝廷云々以下上文ニ同シ

元 德川 旗本

辰 八月六日

馬 場 繁 次 郎

○ 辨事御役所

乍恐以書付奉願上候、

私

先祖之儀ハ淺井政重ト申、勤 王之志厚、武威ヲ以近、濃、尾三箇國等追々鎮撫、長政代ニ至京都守護被 仰付、武弁之榮耀無此上候處、織田氏ト戰爭不利ニテ斷絶仕、其後淺井血統之者連綿仕居候ヲ、以家康ヨリ山城國綴喜郡之内ニテ、采地五百石被宛行、旗下兩番之班ニ被加、代々相續仕來候所、采地之儀慶應三卯年九月十四日獻地被申付、代地之儀ハ追テ可被

下トノ事而已ニテ、其沙汰無御座候内、萬機 御一新之御布令被 仰出候ニ付テハ、速ニ上京、勤 王御奉公之端ヲモ奉歎願度赤心ニ御座候處、前斷之通采地獻地之儀、猶別紙申上候通難澀之仕合ニ付、出立延引ニ相成、痛心仕居候處、此度徳川家名御再立ニ付、龜之助ヨリ遊擊隊ニ可被抱沙汰被申付候得共、兼テ之志願御座候ニ付、漸相斷、急速上京仕度心得ニ御座候折柄、持病之疝積ニテ引籠、其上別紙之通難澀之仕合、旁以上京延引仕深奉恐入候、何分小身微力之儀、重々奉恐入候得共、前件之御由緒モ御座候ニ付、格別之 思召ヲ以御憐察被爲成下、相應之御用モ被 仰付被下候ハ、廣大之御儀難有仕合奉存候、何卒 御寛恕之御所置被爲成候様、御執 奏奉願上候、誠恐誠惶頓首謹言。

八月七日

淺井新九郎

○ 辨事御役所

別紙、

口上覺、

七月十七日江戸發足、昨日到着、道中所々川留ニテ滯、其上病氣ニ付旁以上京延引奉恐入候得共、元來小身之私、其上慶應三卯年九月十四日采地被召上候ニ付テハ、米銀之融通モ仕兼、猶々及疲弊、旅用金之手當モ無之、當惑仕、無據時日ヲ費シ候段奉恐入候、上京勤 王之志願、大總督宮様へ歎願申上、御印鑑頂戴仕、漸家來壹人上京爲仕、舊知懇意之者共へ便金子借入等爲仕、又候江戸表へ罷下候位之譯柄ニテ、彼是延引奉恐入候段、幾重ニモ 御憐察被 仰付候様奉願上候、兼テ勤 王之志願者正親町三條殿へ御由緒有之候邊ヲ以、奉歎願置候處、上京御届、歎願書御役所へ持參可仕候様御内慮御座候間、持參仕候間、宜鋪御含、可然御取成可被下候様奉願上候、以上。

八月七日

淺井新九郎

○ 辨事御役所

今般 王政御一新ニ付、私儀勤 王一途相心得候底意御座候ニ付、二月十一日江戸表出立仕、同廿日采邑三河國碧海郡吉原村へ在著仕候處、幸尾張大納言殿誘引之儀御座候ニ付、勤 王尊奉固相守、一心無御座候段、則尾張殿へ證書差出申候、付テハ速ニ上京可仕心底ニ御座候處、足痛ニテ難澀仕、無據於采邑養生罷在延引仕候段、誠ニ以奉恐入候、少々快方仕候間、不取敢此度上京仕候上ハ、何卒相應之御用向被 仰付被下置候様志願ニ御座候間、格別之御憐愍ヲ以御執成之程奉歎願候、以上。

慶應辰四年八月七日

辦事 御役所

德川元寄合

稻垣藤九郎印

花押

先般從 朝廷被 仰出候厚御趣意之旨、深奉感戴、勤 王之志願益奮起仕候間、何卒私身分相應之御奉公被 仰付被下置度、幾重ニモ忠勤可仕様奉存候、依之、御沙汰之程偏ニ奉懇願候、恐惶謹言。

德川元旗本 兩番席

日根野左京

辰 八月十日  
辦事 御役所

奉再歎願候覺、

私儀兼テ勤

王遵奉之赤心ニ御座候處、此度萬機 御一新之御布令被 仰出候ニ付テハ、彌以勤 王之志、正義之御奉公相勤度志願ニ

テ、乍微力奮起仕、去二月廿五日江戸表出立仕、三月朔日信州諏訪宿ニテ不取敢 御總督府御本陣へ罷出、奉歎願候處、御落手ニ相成、尾藩荒川彌五右衛門御委任被 仰付候ニ付、三月十二日尾州表へ罷出奉歎願候處、爲實効出兵候様御達ニ付、則尾州表迄差出候處、御總督府ヨリ被 仰越候趣モ御座候旨ヲ以御達御座候、且舊采地へ引取相慎可罷在旨御達ニ付、則舊采地美濃國大野郡大友斐村ニ相慎罷在候處、六月廿八日最早慎ニ不及旨、尾藩荒川彌五右衛門ヨリ御達御座候、就テハ、御一新之折柄、恐縮之至奉存候間、今般上京之上、身分相應之御奉公奉懇願度、依之、尾州表へ罷出伺濟之上、八月八日上京仕、早速諸御届書並歎願書共奉差上候處、御落手ニ相成、其後御取調御請書奉差上候處、是又御落手ニ相成、難有仕合奉存候、就テハ、御沙汰之程奉待上居候儀ニ御座候間、何卒出格之思召ヲ以、身分相應之御奉公相勤度志願ニ御座候間、偏ニ御憐察被成下置、幾重ニモ御沙汰之程不願恐奉再懇願候、恐惶謹言。

德川元旗本

日根野左京

辰 十月十四日

辦事 御役所

乍恐奉歎願候覺、

舊幕府 元寄合

柴田岩五郎

高三千貳拾四石

辰貳拾貳歲

今般 王政御一新被 仰出、勤 王尊奉之儀ニ付、上京可仕志願罷在、當四月四日江戸表出立仕、翌五日池上於本門寺御兩卿様へ奉伺御機嫌、同月九日吉原宿御本陣於テ 大總督宮様へ奉伺御機嫌、同十四日知行所三河國額田郡本宿村陣屋へ歸邑仕候處、不快罷在候得共、五月二日押テ吉田宿へ罷出、平松中斐權介様へ奉伺御機嫌候、私不快追々快罷成候ニ付、

去月廿五日京著仕候、右御届等ハ去月申上置候間、相應之御用等被 仰付候ハ、難有仕合奉存候、御奉公之儀ニ付テハ拋身命候共、毛頭異心無御座候間、御奉公被 仰付被下候様、偏奉歎願候、以上。

舊幕府 元寄合

柴田 岩五郎

八月十二日

辨事御役所

○

江戸定府罷在候處、當正月以來不容易御 時態ニ立至リ候ニ付、私勤 王報國無ニ念旨可奉歎願様、本家戸田采女正へ申遣置候處、東山道 御總督岩倉様、大垣御滯陣之節奉願上、則采女正へ御任セニ相成候段御達有之、冥加至極難有仕合奉存候、依之、二月廿五日江戸表引拂、東海道旅行仕、府中宿ニテ病氣罷在候ニ付、名代ヲ以 御總督様へ 天機奉伺、猶又 大御總督宮様同宿御著陣ニ付、御印鑑奉願上、御關所通行仕、三月十五日大垣へ著仕、其後差扣罷在候處、追々被 仰出候厚 御趣意モ拜承仕、感銘之至奉存候、然處、於江戸表 大御總督府ヨリ以來 朝臣ニ被 仰付候旨御達御座候段、元寄合肝煎ヨリ廻狀ヲ以相達候趣、彼地ニ殘置候家來ヨリ申越、冥加至極難有仕合奉存候、就テハ今般本家へ相尋、依差圖上京仕候、勿論一意方向 御用相勤、國恩之萬一ヲ奉報度志願ニ候間、何卒厚御評議ヲ以 朝臣之列ニ被 仰付被下置候様、偏奉歎願候、誠恐誠惶。

元寄合

戸田 熊之丞

八月十三日

辨事御役所

○

分家鍋島頼之助儀參 内、家祿安堵被 仰付度、旁委曲以別紙申出候付、何卒志願通被 仰付候様奉願候、此段申上候、以上。

肥前侍從内

松 永壽 一郎

八月十四日

辨事御役所

別紙、

御大政御一新以後、私儀早速上京可仕處、幼若殊ニ所勞ニテ、其儀不任所存候付、當三月中重臣之者差出、歸順遵奉他念無之志願之趣、本家肥前侍從ヨリ添願書ヲ以奉申上候處、被 聞食置候旨、以御附紙被 仰渡、其後追々快方ニ付、當五月朔日以來押テ上京謹慎仕居候、然處、今般舊幕府旗下歸順之面々、格別之 叡慮ヲ以所領安堵被 仰付候段、實以莫大之 皇恩、難有仕合奉存候、就テハ於私モ何卒速ニ遂參 内、家祿安堵被 仰付、相應之御奉公被 仰付候様仕度奉懇願候、此段御執成之程奉願候、以上。

舊幕府旗本元寄合

鍋島 頼之助

八月十四日

辨事御役所

○前書ハ之ヲ佚ス。

○

一高四千四百石

濃州大野郡中之元陣屋

西尾 錦三郎

以書附奉言上始末懇願書、

復古記 卷八十五(第五) 明治元年五月十五日

今度 大政御一新ニ付、當春正月東山道鎮撫 御總督御下向、濃州大垣表 御滯陣之砌、私家來同國陣屋詰之者共ヨリ勤  
 王二心無之赤心奉歎願候處、御採用被成下、當分尾藩荒川彌五右衛門へ御取締被 仰付、總テ歎願向右手續へ可申立旨、  
 被 仰渡候趣申越候條、早急用意、二月二日江戸表出立、駿府ニ於テ 大御總督府御印鑑頂戴仕、同十四日尾州表へ著仕、  
 於待賓館勤 王之證書差出、官軍御隨從仕度旨歎願仕、同廿日尾州表出立仕候、然ル處、私舊知行所之儀、水損所多ニテ、舊  
 來疲弊、人數、武器等モ手薄、勞御用途ニ相立候儀ハ、決テ無御座候得共、兵之多少ニ不拘、敢擲身命、奉報 國家無窮之 聖  
 恩度、分家同苗健次郎召連、單騎微兵、晝夜急行、同廿五日午之刻板橋驛、 御轅門へ參上仕、御隨從奉歎願候處、出格之御  
 仁恕ヲ以歸順被 聞食上、何共難有仕合奉存上候間、猶 御軍門ニ陪從罷在度段奉懇願候處、別紙之通蒙 御沙汰、猶御口  
 達之御趣意篤ト奉拜承、強テ歎願仕候モ奉恐入候ニ付、 御沙汰之通空歸邑仕、著邑早々爲 御禮登京可仕奉存候處、尾藩  
 ヨリ當分上京御差留、謹慎被 仰付、昨今ニ至迄御沙汰通相慎罷在候、然ル處、今般 御免被仰付、難有仕合奉存候、依之、爲  
 御禮去ル九日登京仕候儀ニ御座候、方今御多事之折柄、素餐仕罷在候テハ奉恐入候條、何卒隨身之御用途速奉蒙 仰、奉表  
 勤 王之一端且家名相續蒙 仰、采邑依舊取締、尙此上厚 皇化ニ奉伏候様仕度、不願恐奉懇願候、以上。

辰八月十四日

辨事 御役所

○別紙ハ之ヲ略ス。

一高三百石

以書附奉言上始末懇願書、

濃州大野郡之内五ノ里

西尾 健次郎

徳川旗下 元兩番格

西尾 錦三郎

今度 大政御一新ニ付、當春正月東山道鎮撫 御總督御下向、濃州大垣表 御滯陣之砌、私家來同國知行所詰之者共ヨリ、  
 勤 王二心無之赤心奉歎願候處、御採用被成下、當分尾藩荒川彌五右衛門へ御取締被 仰付、總テ歎願向、右手續へ可申立  
 旨被 仰渡候趣申越候條、早急用意、二月二日江戸表出立、駿府ニ於テ 大御總督府御印鑑頂戴仕、同十四日尾州表へ著仕、  
 於待賓館勤 王之證書差出、官軍御隨從仕度旨歎願仕、同廿日尾州表出立仕候、然ル處、私舊知行所小高之上、舊來疲弊水  
 損等ニテ、人數、武器等モ手薄、勞御用途ニ相立候儀ハ、決テ無御座候得共、敢擲身命、奉報 國家無窮之 聖恩度、木家西  
 尾錦三郎同伴、單騎微兵、晝夜急行、同廿五日午ノ刻板橋驛 御轅門へ參上仕、御隨從奉歎願候處、出格之御仁恕ヲ以歸順  
 被 聞食上、何共難有仕合奉存上候間、猶 御軍門ニ陪從罷在度候段奉懇願候處、別紙之通蒙 御沙汰、猶御口達之御趣意  
 篤ト奉拜承、強テ歎願仕候モ奉恐入候ニ付、 御沙汰之通空歸邑仕、著邑早々爲 御禮登京可仕奉存候處、尾藩ヨリ當分上京  
 御差留、謹慎被 仰付、昨今ニ至迄 御沙汰通相慎罷在候、然ル處、今般 御免被仰付、難有仕合奉存候、依之、爲御禮去ル九  
 日登京仕候儀ニ御座候、方今御多事之折柄、素餐仕罷在候而者奉恐入候條、何卒隨身之御用途速奉蒙 仰、奉表勤 王之一  
 端且家名相續蒙 仰、采邑依舊取締、尙此上厚 皇化ニ奉伏候様仕度、不願恐奉懇願候、以上。

辰八月十四日

辨事 御役所

徳川麾下 元兩番格

西尾 健次郎

復古記 卷八十五 第五 終



# 復古記 卷八十五 第六

○ 江戸定府罷在候處、當正月以來不容易御時態ニ立至リ候ニ付、勤 王報國無二念旨奉歎願度段、本家戸田采女正へ申遣置候處、東山道 御總督岩倉様大垣御滯陣之節奉願上、則采女正へ御任セニ相成候段御達有之、冥加至極難有仕合奉存候、依之、三月五日江戸表引拂、東海道旅行仕、府中宿ニテ 大御總督宮様へ奉伺 天機、御印鑑奉願上、御關所通行仕、三月廿日大垣表へ著仕、其後差扣罷在候處、追々被 仰出候厚 御趣意モ拜承仕、感銘之至奉存候、就テハ今般本家へ相尋、依差圖上京仕候、勿論一意方向 御用相勤、國恩之萬一ヲ奉報度志願ニ候間、何卒厚御評議ヲ以 朝臣之列ニ被 仰付被下置候様、偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶謹言。

私儀

徳川 元旗下

戸田 尙之丞

○ 八月十五日 辨事 御役所

私儀

○ 江戸定府罷在候處、當正月以來不容易御時態ニ立至候ニ付、勤 王報國無二念旨可奉歎願候様、領地陣屋詰之家來へ申遣置候處、東山道御總督岩倉様大垣御滯陣之節、證書ヲ以奉願上候處、則本家戸田采女正へ御任セニ相成候段御達有之、冥加至極難有仕合奉存候、依之、三月二日江戸表引拂、木曾路旅行、松井田宿ニテ 御總督様へ奉伺 天機、同月十七日大垣へ著仕、其後差扣罷在候處、追々被 仰出候厚 御趣意モ拜承仕、感銘之至奉存候、然處、於江戸表 大御總督府ヨリ以來 朝臣ニ被 仰付候旨御達御座候段、徳川元寄合肝煎ヨリ廻狀ヲ以相達候趣、彼地ニ殘置候家來ヨリ申越、重疊冥加至極難有仕合奉存候、就テハ今般本家へ相尋、依差圖上京仕候、勿論一意方向 御用相勤、國恩之萬一ヲ奉報度志願ニ候間、何卒厚御評議ヲ以 朝臣之列ニ被 仰付被下置候様、偏奉歎願候、誠恐誠惶。

徳川 元寄合

戸田 三郎四郎

○ 八月十五日 辨事 御役所

奉歎願覺

高三千四拾石餘

徳川元旗下

妻木主計尼介伯父

妻 木 熊 三 郎

私儀妻木主計手前罷在、徳川家へ出役仕居候處、王政復古之儀被 仰出候ニ付、甥主計儀勤 王之志願御座候得共、早春ヨリ病氣ニテ相勝不申候ニ付、歸順勤 王難奉歎願段深心痛仕候ニ付、主計申談之上、私儀不取敢爲主計名代采地へ罷越候ニ付、二月十九日出役辭候、主計采地ハ國々ニ有之、美濃國土岐郡妻木村ニ八百石、同國可兒郡古屋鋪村ニ三百九拾七石五斗餘、淵之上村ニ貳百五拾石九斗餘、瀬田村ニ三百九拾六石五斗餘、相模國愛甲郡小野村、高森村ニ千石、上野國新田郡上田中村貳百石、都合三千四拾石餘御座候、美濃國土岐郡妻木村ハ先祖舊領之儀、格別之采地ニモ御座候故、去ル二月廿二日私儀江戸表出立、妻木村へ罷越候處、美濃國御取締之儀ハ、尾瀨荒川彌五右衛門へ御委任被 仰付候旨、妻木村在任之家來ヨリ申聞候ニ付、則尾州表へ罷出、主計勤 王志願之底意奉歎願候處、東山道鎮撫 御總督府へ罷出可奉歎願、尾州表待賓館ヨリモ添書御渡相成候ニ付、三月九日尾州表出立、東山道鎮撫 御總督府御宿陣武州板橋宿御本陣

へ、三月十八日罷出奉歎願候處、爲國家忠勤仕度趣神妙ニ付、本領可致安堵様 御總督府ヨリ 朝廷へ御奏聞可被爲有御旨之御書附ヲ以被 仰渡、難有御請奉申上、即刻江戸表へ罷越、御沙汰之趣主計へ申聞候處、御沙汰之程厚難有奉存、病氣モ少ク快方ニ付、三月晦日江戸表出立仕、私儀モ同道仕候處、途中ヨリ病發仕候ニ付、無餘儀采地相模國愛甲郡小野村へ罷越、種々藥用手當等仕候得共、早速全快之程モ無覺束、依之、私儀四月十八日小野村出立、同廿六日尾州表へ罷出、東山道鎮撫 御總督府ヨリ御書附ヲ以御沙汰之趣、且主計病氣ニ付途中ヨリ小野村へ罷越、藥用手當罷在候段申上候處、私儀ハ采地へ引取、謹慎可罷在旨御達ニ付、妻木村陣屋へ罷越謹慎罷在候、主計儀病體不宜、小野村ニ罷在候テハ藥用モ行届兼候ニ付、閏四月十三日江戸居屋鋪へ立戻、種々藥用等仕候得共、兎角同篇ニテ江戸表ニ謹慎罷在候然ル處、六月二日徳川家へ歸屬仕候ニ付、私儀妻木村ニ罷在候テハ不宜候間、早々江戸表へ罷歸候様七月二日申越候ニ付、甚當惑仕候、今更東山道鎮撫 候總督府へ奉歎願候赤心ヲ失候ハ、深奉恐縮候ニ付、種々教諭仕、王政復古之御趣意相貫候様仕度奉存候處、去月朔日最早謹慎不及旨尾藩荒川彌五右衛門ヨリ御達御座候ニ付、當月五日尾州表へ罷出、主計ヨリ申越候次第柄委細申上、且私儀去ル三月中ヨリ妻木村ニ謹慎罷在候ニ付、只今ニ至リ江戸へ罷歸、徳川家へ歸屬仕候心底更ニ無御座候、就テハ妻木家名絶候テハ實以歎ケ鋪、何卒私身分相應之御奉公奉懇願度奉存候、依之、今般上京仕度段相伺候處、御聞濟相成候ニ付、同八日尾州表ヨリ直々上京仕候、御一新之折柄重々奉恐縮候得共、何卒妻木之家名私へ被 仰付、身分相應之御奉公被 仰付候様、只管御憐愍之御沙汰謹テ奉懇願候、以上。

辰八月十八日

妻木熊三郎

○ 辦事 御役所

奉歎願候口上之覺、

今般 御一新被 仰出、當二月中井上河内守方ヨリ御達之趣、私竝家來共一同勤 王遵奉仕、三月二日證書ヲ以御請奉

中上、同十四日江戸牛込屋鋪出立、駿河國清水湊與平船へ便船仕、遠江國川崎湊へ著仕、同二十九日駿府表 大總督様へ奉伺御機嫌、四月二日遠江國豊田郡白坂上村陣屋へ著仕、其後三河國吉田表 御裁判所ヨリ御呼出ニ付、五月二十二日罷出御用向奉伺、被 仰出候書類取調奉差上、御用濟相成歸邑仕、七月二十三日出立、去ル四日著御届奉申上、私始家來共素ヨリ勤 王之志願ニ御座候間、乍小身御先鋒中へ御差加奉願度候得共、何分幼年出兵之儀速ニ難調、依之、爲冥加金千五百兩獻納奉願度候間、遠江國天龍川川除御普請へ御差加ニモ相成候ハ、難有仕合ニ奉存候、獻納之儀ハ知行所ニ罷在候家來ヨリ其御筋へ奉獻納度、尤於御當地獻納可仕哉、御沙汰之程奉願候、且上京仕候上ハ家力相應之御用向被 仰付候様、只管奉歎願候、以上。

元 寄合

八月十九日

高木義太郎

○ 辦事 御役所

御届書ヲ以謹奉願上候、

私儀

當春東山道御總督府大垣表御滯陣中、勤 王遵奉赤心奉貫徹度奉願上候處、彌二心無之旨 御聞届之上、拜調被 仰付、其後本知是迄之通被下置候旨 御書付頂戴仕、難有仕合奉存候、就テハ美濃國舊旗下之者、尾州侯御取締ニ相成、總テ指揮ヲ受候様被 仰渡候間、歸邑之上御奉公品等奉願上、舊知行所ニテ御沙汰相待居候處、當月五日美濃地旗下之面々へ、入京之上前段可奉願上旨、尾藩ヨリ被相達候ニ付、則私家來ヲ以同藩掛リ役方へ届之上、舊知行所發足、去十五日入京仕候、依之、此段御届書ヲ以謹奉願上候、以上。

元舊幕旗下 元兩番格 美濃國知行所住居

辰八月十九日

坪内金三郎

辦事御役所

○再請書

謹奉懇願候口上覺、

私儀

當二月中、東山道御總督府御發向之刻、美濃地大垣表ニ於テ勤 王遵奉赤心無二念旨 御聞届之上、拜謁被 仰付、其後本知行是迄之通被下置、難有仕合奉存候、就テハ美濃國舊旗下尾州候御取締ニ相成、總テ指揮ヲ受候様被 仰渡候間、歸邑仕、御奉公品等尾州候へ奉願上置、何分之 御沙汰相待罷在候處、當月五日美濃國舊旗下之面々入京之上、前書可奉願上旨尾藩ヨリ被相達候、依之、直様舊知行所發足、入京著御届仕置候處、右ハ身不肖之私ニ御座候得共、盡力誠忠奉志願候間、相應之御奉公向被 仰付被成下度奉懇願候、且前書於大垣御總督府拜謁、本知行是迄之通被下置候儀ニ御座候間、何卒出格之御仁憐ヲ以、本領安堵之 御沙汰相成候様偏 御執成被成下置度、此段只管書付ヲ以謹奉懇願候、以上。

元舊幕旗下 兩番格 美濃國知行所住居

辰八月廿日

坪内金三郎

辦事御役所

○

今般 王政 御一新被 仰出之趣奉畏候、祖先以來奉戴 天恩候儀ニ付、報國盡力之外他念無御座候、依テ私竝家來共一同、當三月五日江戸出立土著仕、勤 王赤心相立度、於駿府 大御總督宮様へ奉窺 御機嫌、引續上京、可奉窺 天機志願之處、水土不應故歎、病氣引籠罷在候處、先般三河國吉田表 御裁判所 御取建ニ付、彼地へ罷出、御沙汰御座候郷村高調、其外書類等奉差上、相應之 御用向被 仰付被下置候様、精々奉歎願候處、追テ 御沙汰之趣ニ付、一ト先歸

邑仕、猶其後爲御用願家來彼地へ差出候處、最早 御裁判所 御引拂跡へ罷出、空敷歸邑仕候ニ付、不取敢今般上京仕御届奉申上候通、去ル四日當御地著仕候、素ヨリ勤 王實効奉相立度志願ニ御座候間、何成共私相應之 御用向被 仰付被下置候様仕度、此段何卒 御聞届被成下置候様、伏テ奉懇願候、右願之通 御用向被 仰付被下置候ハ、御寛大之 御仁惠ト難有仕合奉存候、以上。

舊幕府旗本高五千石 遠江國豊田郡小山村土著

八月十九日

花房外記

辦事御役所

○

以書付奉言上始末書、

今度 大政御一新ニ付、當正月東山道鎮撫 御總督 御下向濃州大垣表 御滯陣之砌、私家來同國陣屋詰之者ヨリ勤 王二心無之赤心奉歎願之處、御採用被成下、當分尾藩荒川彌五右衛門へ御取締被 仰付、總テ歎願之儀右同人へ可申立旨被 仰付之趣申越候間、早速三月五日江戸表出立同廿三日尾州表於待賓館勤 王之證書差上候處、舊知行所へ引取、謹慎可有之被 仰付奉畏、謹慎罷在候折柄、越後路浮浪之輩騷擾ニ付、於尾藩出兵之蒙 御内命、敢死盡力、乍微力用意奉侍御下知候處、再度之御沙汰可奉待被 仰付、相愼居候處、此度謹慎 御免被 仰付、難有仕合ニ奉存候、爲 御禮本月十六日上京仕候、方今 聖朝之 御仁惠ヲ以相應之 御用途奉蒙 仰、奉報無窮之 御國恩度、依之、伏テ奉懇願候、恐惶謹言。

舊幕府 元兩番

辰八月十九日

大島金三郎

辦事御役所

○

先般從 朝廷被 仰出候御深慮之趣、全 皇朝之仁德、萬民之鴻福深奉於感戴候、然 朝廷御一新之際、政教御多門之處、加之重於征討、是不肖之臣等晝夜不忍於寧居、而勤 王之志願益所於奮激故、何卒微力短才之小臣言雖有於恐懼、願至於此域、相應之御奉公被 仰付、忠勤誠實奉於 命令、願盡於毫毛之力、幾重御用被 仰付被下置候者、鴻恩難盡、奉於身命懷於忠誠、奉報於 朝廷、微臣御沙汰之程偏奉懇願候、恐惶謹言。

德川元旗本

落合 鋪太郎印

慶應四戊辰年八月十九日

辨事 御役所

○本條、往々讀ミ難キモノアリ、一ニ原文ニ從フ。

乍恐奉歎願候口上書

賤臣 直英儀

代々德川附屬旗下ニテ、三州額田郡、駿州富士郡兩所之内ニテ三千石采邑受領仕、祖先數代仕官等仕候ハ、則 朝廷之御恩澤ニ付、舊幕府へ精勤勉勵等仕候儀ハ、全以奉酬 朝恩、勤 王之一端盡忠仕候處、不圖モ今春暴動事件ニ付、殆逆黨ニ陥リ可申ト悲歎仕候折柄、出格之以 御寬典夫々御所置被 仰出候ニ付テハ、再奉酬 朝恩之御時世ニ相成、銘肝難有奉存候、依之上 京仕、從來之素志ヲ奉訴、闕下之御奉公可奉願ト、四月上旬於川崎驛御先鋒橋本、柳原御兩卿へ奉願、上京御印鑑頂戴仕發足、尚於沼津驛 大總督宮御印鑑ト御引替奉願、同月中旬采邑三州土呂村く至著仕候、其前ヨリ持病之脚氣相發、行步難相成、於同所養生中、後四月下旬三州裁判所御總督平松殿御下向ニ付、勤 王志願ニ御座候得共、病中上 京難仕旨申上、大總督宮御印鑑返上仕、其後追々養生、不計モ遲延仕、漸一昨々十九日上 京至著仕候、尤前件奉言上候素々勤 王一途之志願ニ付、短才凡愚之直英、殊ニ病身之儀御座候得共、差向方今御追討御軍事ニ付、御用途御多端之折柄故、

爲御軍役金千兩自采邑取寄貢獻仕度奉願上候、右ハ兼テ勤 王志願之一端ヲ表シ、祖先以來所奉蒙之 朝恩萬分之一ヲ奉酬度奉存候、尚於 闕下相應之御用被爲 仰付被下置候得ハ、望外之大幸、感激奉銘肝候、何卒以出格之 御憐恤、右歎願之旨趣被爲 聞食被下置候得ハ、難有奉感戴候、乍恐此段奉仰願候、誠恐誠懼九拜謹稟。

德川元旗本

山口 内匠

直英印

慶應四年戊辰八月廿二日

辨事 御役所

去二月東山道 御鎮撫被爲在候砌、被 仰渡之趣奉拜承候間、早速勤 王遵奉可仕之處、兄帶刀儀病氣罷在候ニ付、弟茲次郎江戸地ヲ去、二月廿九日出立、三月十三日尾州名古屋待賓館へ罷出、赤心勤 王之證書差上候處、於同所追々御取糺之上、東山道御總督府へ御伺被下、去四月二日ヨリ舊知行所ニテ謹慎可罷在之旨被 仰渡罷在候所、今般謹慎之廉 御免相成候間、早速上京出願仕度旨相願、則尾藩荒川彌五衛門添書ヲ持參登京仕候間、先般差上置候證書之通、少モ二心無御座候間、何卒寬大之以 御所置 朝臣被成下、是迄之通家督相續被 仰付被下置候様偏奉伏願候、以上。

德川元旗下

坪内 鉉次郎

慶應四辰年八月廿二日

辨事 御役所

○私儀先祖式部少輔久壽已來德川麾下之列ニテ、私儀モ慶喜代ニ至迄書院組番頭役相勤候儀モ御座候、尤慶喜叛逆之砌ハ既勤仕竝寄合ニ貶斥、全隱居同様罷成居、關係不仕儀ニハ御座候得共、主家逆謀、實不堪恐懼戰栗之至奉存候、依之、當三月中

浪華地迄罷登、本家淡路守へ申聞、佐土原へ罷下、謹慎仕居候然處、徳川家跡被 召建且麾下之面々追々奉浴 御寛廣之  
朝恩候趣ニ付、淡路守ヨリ進退之儀奉伺候處、私上京之上奉伺候様被 仰出候旨申聞候ニ付、此節京著仕候、乍恐 御大政  
御一新、海内奉浴 朝恩之御時節、仰願各別之以 御寛宥、本領安堵、相應之御奉公被 仰付被成下候へ、富岳之 御鴻恩、  
誠以難有仕合奉存候、此段誠恐誠惶伏テ奉歎願候、以上。

八月

辨事御役所

舊幕府寄合席

島津近江守

舊幕府寄合席

島津近江守

當辰四拾五歲

一高三千石

内

高貳百八拾六石七斗四升六合

高百三拾壹石壹斗壹升七合

高八百九拾五石五斗六升九合

但、號青水方士小村二箇所有之、

高千六百八拾六石五斗六升八合

但、號島之内麓小村二箇所有之麓之内少加、

一陣屋

日向國那珂郡 鹽路御手洗村

同郡之内 山崎村

同郡之内 新名爪村之内

同郡之内 廣原村之内

日向國那珂郡 島之内村

一本家島津淡路守忠寛先祖右馬頭忠興次男、島津主膳久富嫡子又吉郎久壽、延寶四丙辰年八月中、右馬頭忠興孫飛驒守忠  
高末期嫡子萬吉<sup>原註、後淡路守惟久</sup>幼少ニ付、飛驒守遺跡萬吉拾五歲迄之間番代被申付、同六戊午年十二月廿八日任諸大夫式部少  
輔ト改名仕候、元祿三庚午年五月廿九日、依願番代被差免、淡路守依願所領三萬七拾石餘之内、三千石分知仕、舊幕府寄  
合席ニ列、私迄ニ八代ニ相及申候、  
一私家督以後徳川家祥代中與勤仕候、其後家茂代元治元甲子年八月五日小姓組番頭被申付、同代慶應元乙丑年九月十日書  
院組番頭被申付候處、慶喜代相成、同二丙寅年十二月朔日役儀被差免、勤仕並寄合罷成申候、  
右之通奉言上候、以上。

慶應四戊辰年八月廿二日

辨事御役所

舊幕府寄合席

島津近江守

兼々勤 王遵奉之素願貫徹仕度奉存候ニ付、去ル三月中舊知行所駿河國庵原郡西久保村へ土著仕候處、東海道 御先鋒  
御總督様御下向ニ付、沼津驛御宿陣へ參候仕、微衷奉懇願候處、奉蒙御許容、御糧米五百俵獻納仕度段奉願、夫ヨリ駿府  
へ罷出、同月十九日 大御總督宮様奉伺御機嫌、相應之 御用被 仰付候様奉懇願罷在候處、其後大御總督宮様東國御  
下向被爲在、然ル處參遠駿三州爲御取締、參州吉田表へ 御裁判所御取立ニ相成、平松甲斐權介様御下向ニ付、不取敢聞  
四月廿七日知行所出立參候仕、一々奉蒙御正訂候上御暇被下置、於在所調兵可罷在旨被 仰渡、五月五日吉田表出立歸  
郷仕候處、 御裁判所ヨリ以御書付駿城御警衛、土井淡路守へ附屬一小隊出兵被 仰付候ニ付、即日人數繰出、山手閑道  
筋取切、御警衛相勤罷在候、然ル處七月二日駿城之儀、徳川龜之助へ御引渡相成候ニ付、此度上京仕候、右ニ付何卒此上

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

身分相應之 御用奉蒙候様、只管奉懇願候、以上。

元徳川旗下 寄合席

秋山 虎之助

辰 八月廿二日  
辨事 御役所

○ 以始末書奉懇願候、

宇内之御形勢頻年不容易御場合ニ相運、深御痛心被爲遊候ニ付、斷然 太政御一新被 仰出候折柄、當春之暴動何共奉對朝廷奉恐入候御儀ニ付、麾下之者共決心謝絶、上京可仕用意中、已ニ征討御軍馬御差向ニ相成、道路混雜、殊人馬共差支、焦心苦慮仕ナカラ延引、無據在邑家來宮部與三郎ヲ以大垣表御軍門參向爲仕、赤心之程爲奉申上候處、御 間置被下置候哉ニ付、二月九日江戸出立、尾藩表へ上著、早速待賓館へ罷出、懇願書差出、直様上京可仕奉存候處、當分謹慎被申付、空歸邑閉居罷在候儀ニ御座候、然處今般荒川彌五右衛門ヨリ謹慎被相免、上京可仕沙汰、則不取敢上京仕候儀ニ御座候、固是迄些々之實効モ無之ハ、不及奉申上、矧小祿之私共奉補御 國用之萬一候儀ハ、千萬無御座候得共、於勤 王之赤情拘大小候御儀ニモ乍恐有之間敷哉ト奉愚慮、不願 御多事之折柄奉懇願候、何卒此上相當之御用奉蒙 仰、上奉報御 國恩之萬一、下祖先家名無滯相續仕、朝臣之列ニ御加被下置候ハ、生涯之面目不過之、難有仕合奉存上候、依之、不奉憚御譴責之程以書付奉懇願候、以上。

徳川麾下 元兩番格

松波 平右衛門

辰 八月廿二日  
辨事 御役所

○

私儀 朝命違 奉他念無御座候間、赤心奉貫徹度、不取敢當二月廿九日江戸表發足仕、三月十二日尾州名古屋表へ罷出、勤 王之誠意、二念無御座旨之證書並歎願書差出、尾張大納言殿被請取置、其後先々舊知行所之内へ引取、再度之 御沙汰有之候迄、士民 王化ニ服候様盡力可仕旨被相達候ニ付、四月七日舊知行所へ引取謹慎罷在候處、六月廿三日歸順在邑、是迄謹慎、最早不及其儀候間、御沙汰有之候迄、士民 王化ニ服候様精々盡力可仕旨被相達、其後當月五日兼テ歸順、於舊領長々謹慎罷在、既ニ相解候上ハ、上京、太政官へ罷出、直ニ赤心申立可然旨被相達候間、同十二日舊知行所發足、同十五日上京仕候、何卒出格之以 御憐愍 寛大之 御沙汰被 仰出候様、偏ニ奉懇願候、以上。

徳川元旗下 寄合席

坪内 飛驒守

辰 八月廿四日  
辨事 御役所

○ 乍恐奉歎願口上覺、

美濃各務郡三井 舊幕府旗本

坪内 捨太郎

私家元坪内飛驒守儀、當二月在關東中、在所表陣屋詰之者共彼表へ差下、迅速上京可仕様申遣候ニ付、三月上旬在所表へ歸著仕候儀ニ御座候、然所 飛驒守領分之儀被 召上、尾州藩荒川彌五右衛門へ 御預被 仰付、右歸邑延引仕候段不都合之趣ニ付、荒川彌五右衛門ヨリ謹慎被申付、誠ニ以驚入、不一方悲歎之至ニ奉存候、隨テ數月謹慎之實効モ相立候廉ヲ以、先般荒川彌五右衛門ヨリ其儀被差許候趣被申渡、八月十五日上京仕、二條表元城番邸方ニ旅宿仕候、右其後 飛驒守歎願奉言上候、何卒一ヶ之 御用ヲモ奉蒙度次第ニ御座候上ハ、猶又不願不肖私共ヨリモ同様奉歎願候、仰冀出格之以 御憐愍御許容之御沙汰御執達被成降候ハ、深難有仕合ニ奉存候、以上。

明治元年辰九月十五日

坪内捨太郎定致印

辨事 御役所

○

私儀 朝臣奉願候儀ハ、當春三月中勢州稱宜中竝ニ彼地ニ罷在候同姓共ヨリ、急便ヲ以元藤波祭主殿ヨリ江戸在住之同姓共如何可仕哉之御尋有之候旨申越候ニ付、早速同姓一同集會仕、相談之上 朝臣奉願度旨、歎願書竝ニ由緒書相添ヘ、去ル四月中勢州表ヘ相廻置、於江戸表ハ猶又 大總督宮竝鎮撫使橋本少將様ヘモ、同様同姓久志本主水ヲ以、參謀方吉村長兵衛殿、伏屋又左衛門殿ヘ差出候處、御落手被成下、追テ御沙汰可有之旨御達有之候處、其後更ニ御沙汰無之候間、五月廿八日西城ヘ猶又主水ヲ差出シ、參謀方ヘ御面談仕度旨申上候處、御用多之由ニテ井口勘七殿御逢被成下候間、兼々奉願置候歎願之趣相伺候處、關東ニテハ御取扱被成兼候間、京師ヘ可奉願旨御達ニ付、速ニ上京可奉歎願之處、病氣ニ付追々遅延仕、未タ晚ト快氣不仕候得共、押テ上京仕候間、何卒別紙歎願之趣御採用被成下候様仕度、此段偏ニ奉願上候、以上。

元徳川表醫師

久志本式部

慶應四戊辰年八月廿四日

辨事 御役所

○

一高三百石 本國伊勢 生國武藏 伊勢國度會郡磯村之内

元徳川表醫師

久志本式部

私共家筋之儀ハ往古ヨリ伊勢太神宮重代神職ニテ、醫業兼勤勢州ニ罷在候處、天正年中ヨリ徳川家ヘ隨從、關東ヘ罷下リ相勤罷在リ候、然ル處今般 王政御一新ニ付、勤 王一途斷然決心仕、天朝ヘ御奉公被 仰付候様早々上京可奉歎願之處、別紙口上書之通、於江戸表歎願之次第モ有之且病氣ニ付、追々遅延ニ及候段奉恐縮候得共、願之通被 仰付候ハ、何レ之御場所成共相勤、精々奉盡寸志候、心底ニ御座候間、何卒願之通御採用御座候様仕度、此段偏ニ奉懇願候、以上。

元徳川表醫師

久志本式部

慶應四戊辰年八月廿四日

辨事 御役所

○

今般御一新被 仰出候ニ付テハ、御趣意柄深ク奉感戴候、然ル處私家筋之儀ハ秦川勝廣隆之苗裔ニシテ、其先 王家ニ勤仕罷在、其後家運漸ク衰微仕、丹波國ニ罷在、織田家、豊臣家ニ屬シ、引續細川幽齋之以吹學徳川家ヘ隨從仕、川勝近江、川勝鎗太郎等ハ何レモ分知ニ御座候、依之右三蒙元知行所丹波國水上郡、船井郡村々地役人共ヨリ歎願之儀、福知山藩貢士中野齋添書、一同奉差上置候處、御附札ヲ以本人上京、從前勤 王之實効相顯候迄ハ、領地ハ最寄之縣ヘ御預被 仰付置候旨御沙汰ニ付、兄備後事新藏儀、兼々勤 王之志願ニ付速ニ上京可仕之處、是迄徳川氏ニテ重キ役儀モ相勤居、當春以來主家之大事ヲ打捨、上京難仕、遅延仕候段ハ兼テ齋ヨリ添書ヲ以奉申上候儀ニ御座候、然ル處元主家今般之次第ニ立至、新藏儀重キ席末ニ乍罷在、畢竟勤向不行届、元來不調法之儀ト深ク奉恐入罷在、加之病發仕、急々全快之見据モ無御座候ニ付、退役仕、方今龜之助方暇申請、恐縮罷在候儀ニ御座候、私儀ハ從來勤 王正義之御奉公相勤度志願罷在候處、兄新藏退身仕候上ハ、家名斷絶仕、對祖先如何ニモ歎ケ敷次第ニ付、私勤 王之情願御採用被爲在、御寛典之御沙汰被 仰出候上ハ、家名連續仕候儀ニテ、對祖先候テモ莫大之 御仁惠ト雖有奉拜戴、遵奉勤仕可仕候間、何卒出格之御憐恤、寛大之御所置被 仰出候様、偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶頓首謹言。

八月廿五日

德川元旗本

川勝驥之輔

辨事御役所

○ 本家川勝驥之輔奉歎願候通、私家筋之儀ハ、驥之輔祖先備後守繼氏ヨリ分知仕候ヨリ以來、德川家へ隨從仕來候處、今般元知行所地役人共ヨリ、歎願書へ福知山藩貢士中野齋添書、一同奉差上置候處、御附札ヲ以本人上京、從前勤 王之實効相顯候迄ハ、領知之儀ハ、最寄之縣へ御預ケ被 仰付置候旨被 仰出、奉拜承候、私儀ハ兼々勤 王之志願ニテ、既ニ先般德川龜之助方へ 朝臣被 仰付候様願書差出置候處、今般前書之御下知モ御座候ニ付、卑賤短才之身ヲ以奉願候ハ、深ク奉恐縮候得共、何卒私勤 王之情願 御憐察被成下、出格寛大之 御所置被 仰出候様、偏ニ奉歎願候、誠恐誠惶頓首謹言。

德川元旗本

八月廿五日

川勝鎗太郎

辨事御役所

○ 今般私共三家元知行所村々地役人共ヨリ之歎願書へ、福知山藩貢士中野齋添書、一同奉差上候處、本人上京、從前勤 王之實効相顯候迄ハ、領地之儀ハ、最寄之縣へ御預ケ被 仰付置候旨被 仰出候ニ付テハ、分知川勝近江儀、素ヨリ勤 王之志願ニ罷在候得ハ、早速私共一同歎願上京可仕之處、此度 鎮將府ヨリ德川龜之助へ開成所引渡可申旨被 仰出、右用向取扱之儀被申付、開成所建物並書物、器械、其外共御引渡シ申上候處、御請取ニ相成、重テ御沙汰御座候迄近江へ御預ケ被 仰付候旨、鎮將府ヨリ被 仰出候ニ付、御請奉申上且又外國交際之書類並東京表各國宿寺其外居留地等、東久世中將殿へ御引渡方御用取扱罷在、何分上京仕兼、地役人共へ御下知之次第モ御座候上ハ、歎願筋彼是遲延相及ヒ、奉

恐入候段、近江深ク心配罷在候得共、鎮將府御用向モ相勤罷在候得ハ、勤 王無二之赤心實以顯然、包藏無御座情實情願 御憐察被成下、寛大之 御所置被 仰出候ハ、莫大之 御仁惠ト難有拜戴、彌以可抽忠勤候間、何卒御採用之程奉願上度、厚ク私共へ相頼申候、前書近江儀實以勤 王無二之赤心乍罷在、鎮將府御用向相勤罷在候ニ付、上京仕兼、今般私共歎願ニ相漏候ハ如何ニモ歎ケ敷次第ニ付、出格 御仁慈之御沙汰御座候様、於私共一同奉歎願候、右之儀ニ付同人へ御用等被爲在候節ハ、兩人之内ニテ名代相勤可申候間、此段奉言上候、誠恐誠惶頓首謹言。

八月廿五日

德川元旗本 川勝鎗太郎

同 川勝驥之輔

辨事御役所

○ 川勝新藏儀兼々勤 王之志不淺、今般 御一新被 仰出候付テハ、御趣意柄深奉感戴、彌以奮發イタシ、急速上京可仕處、德川氏ニテ重キ役儀相勤居、當春以來之大事ヲ打捨、上京モ相成兼、遲引仕候内、同家此節之次第ニ立至リ、役柄誠不行届之段重疊奉恐入、謹慎仕居候末、病氣差發、當代龜之助へ暇申請、退隱恐懼罷在候、然處舊知行所丹波國冰上、船井兩郡村々地役人共ヨリ歎願之儀、福知山貢士中野齋添書ヲ以、其筋へ差上候處、本人上京、從前勤 王之實効相顯候迄ハ、領知ハ最寄之縣へ御預被 仰付置候旨、御沙汰有之候、然ルニ新藏儀ハ右之仕合ニ付、弟川勝驥之輔儀モ勤 王之素志厚、此節柄抛身命盡忠勤、奉報 皇恩度懇願ニテ、既於東京左京亮へ歎出、右之誠意徹底仕候様萬端依頼イタシ、此節上京仕候儀ニ御座候、摠體川勝家業祖ハ秦川勝廣隆ニテ、朝廷へ勤仕之處、子孫漸沈落、織田氏、豊臣氏ニ隨從罷在候由、其後弊藩先祖細川幽齋へハ、深キ譯筋有之候付、幽齋吹擧ヲ以遂ニ德川氏旗下ニ屬、是迄連綿仕、尤當家ヨリモ今以懇親之通家ニ御座候處、右之通舊家爰ニ斷絶仕候テハ、誠以歎ケ敷次第、殊驥之輔並分家川勝近江、川勝鎗太郎儀、朝命遵奉之誠實聊相違無御座候間、本末共ヨリ一同奉歎願候通、何卒寛典之奉蒙 御沙汰候ハ、廣大之 御仁恤、朝恩如何難



有可奉感佩、於左京亮モ同様之儀御座候間、此段幾重ニモ奉伏願候様、東京表ヨリ申付越候、以上。

長岡左京亮内

八月廿五日

内山又助

○ 辨事御役所

奉歎願候覺、

采地 遠江國引佐郡長上

相模國大住郡之内

高五千四百五拾石餘

元徳川旗下 寄合席

近藤登助

私儀兼々勤

王之心底御座候テ、當二月廿四日東京出立、同三月三日於駿州島田驛從 大總督府宮誘引之儀御座候テ、勤 王遵奉固相守、毛頭二心無御座候段、證書差出、無滯御請取相成申候、右ニ付早々上京可仕處、同月廿四日同國府中驛參謀方御役所ヨリ、家來呼出ニ付差出候處、同廿六日遠州舞坂驛ヨリ掛川驛迄 御親征中、驛々官軍通行之節、兵食取計、宿宿御警衛、人馬繼立世話、渡船場等之儀モ同様相心得可申旨、尤同姓近藤隼人へモ被 仰付候ニ付、右宿々申合可相勤旨、從 大總督府宮被 仰付、冥加至極難有仕合奉存候、且又私知行所金指關門之儀、方今之御時勢ニテ、閏四月中近國賊徒搖動之趣逸傳聞仕候ニ付、一ト際嚴固相心得罷在候得共、萬一右關門橫行之程難計、多人數引請候節ハ小身之儀ニテ難行届、依之、其筋へ申立候處、當五月中同姓近藤隼人、近藤力之助、分家近藤邦太郎へ右關門守衛應援被 仰付、今以嚴重相心得罷在候得共、素ヨリ勤 王之赤心一徹之儀御座候事故、少モ無忘上京仕度御座候得共、前顯之次第、無餘儀延日罷成候、扱又今度東京へ残置候家來之者、其筋ヨリ呼出ニテ、當四月徳川慶喜開城迄ニ勤 王之證書差出候者ハ、自今 朝臣被 仰付旨、

從 大總督府宮御達ニ付、向後私寄合之列除名相成候達御座候段、殘置候家來ヨリ申越、承知之仕難有仕合奉存候、右御禮モ奉申上候、何卒此上共相應之御奉公被 仰付候様御執成之程、偏ニ奉歎願候、恐惶謹言。

○ 慶應四戊辰年八月廿八日

近藤登助

○ 辨事御役所

遠江國城東郡佐倉陣屋 元徳川旗下 元寄合

宮城福之助

高四千石

今般 王政御一新ニ付、私儀勤 王一途相心得候底意御座候折柄、尾張前大納言殿參與附屬之衆ヨリ、田沼玄蕃頭在所重役共ヲ以御誘引之儀モ有之、當三月九日勤 王遵奉因御尋、二心無御座候段證書差出置候通之赤心ニ御座候、依之、當三月廿九日江戸表出立、前四月十日知行所遠江國城東郡佐倉陣屋へ歸邑仕候、右ニ付早速上京仕、分限相應之御用筋ヲモ被仰付候様仕度志願之處、江戸表出立之砌ヨリ痔疾ニテ難罷仕、押テ發足仕候故哉、別テ相勝不申、上京延引仕奉恐入候、然ル處追々快御座候ニ付、當月七日在所佐倉村出立、一昨廿六日御當地へ著仕候、何卒前願之通、格別之御憐愍ヲ以、宜御執成之程奉歎願候、以上。

○ 慶應四年辰八月廿八日

宮城福之助

○ 辨事御役所

願書、

一高千五百石

舊幕府兩番席

堀 順三郎

外高九拾貳石壹斗壹升八合 込高

當正月三日以來奉公相勤不申候、私儀文久三癸亥年家督被申付、元治元甲子年七月十二日兩番へ番入、慶應二丙寅年九月四日奥詰統隊被申付、其後病氣ニテ引籠罷在候處、大政御一新ニ付、尾張大納言殿御附屬參與方遠州表へ御出張相成、井上河内守殿ヨリ知行所遠江國豐田郡竹之内村在役家來呼出ニテ、御主意御書付御渡相成、其節右家來ヨリ勤 王遵奉少モ違背不仕、知行所之者迄無二心盡力御奉公相勤可申旨、證書奉差上候段、右家來ヨリ申越、御主意御書付奉拜戴、私儀病氣ニ付、當三月上旬東都ヨリ家來ヲ以、勤 王之證書井上河内守殿方へ差出申候、病中押テ當三月廿九日東京出立、四月十日知行所へ著仕、引續早々上京可仕之處、兎角同篇相勝不申、引籠罷在候處、當節追々快氣ニ付不取敢上京仕、依之、爲冥加御奉公仕度、何卒相應之御用被 仰付於被爲下置候ハ、無此上難有仕合奉存候、此段偏奉懇願候、誠恐謹言。

八月廿八日

辦事御役所

堀 順三郎

○ 以書付奉歎願候、

大政御一新被 仰出、萬機復古之盛典ヲ被爲學候ニ付テハ、私采邑遠江國西尾隱岐守ヨリ勤 王貳心無之輩、速證書可差出御沙汰之趣、在邑家來共出府爲申聞候、於私固勤 王報國ニ貳心可有之故無之、速證書相認、當三月中同人方へ差出候處、私歸邑之上差出可申旨ニテ被差戻候段、知行所詰家來ヨリ申越候ニ付、則四月九日私竝養父隱居左衛門同道出立、東海道川崎宿迄罷越候處、同宿御園所ニテ安部攝津守家來ヨリ、昨九日限御達有之、武器長持類持越候儀差止被 仰出、參謀方御印鑑無之テハ通行留之御沙汰ニ付、一ト先引返シ候内、大總督宮様池上本門寺 御本營被爲成候條、早速右參謀方へ貳心無之證書奉差上候處、御落手被成下、御印鑑頂戴仕候間、再東京出立、同廿五日遠江國山名郡西島村陣屋へ

著仕、直様西尾隱岐守へ著御届書差出申候、右ニ付不取敢上京可仕ト奉存候得共、洪水ニテ遅々仕候内、三河國 御裁判所ヨリ 御用ニ付可罷出旨御沙汰之處、是又道中川支ニテ延引、五月廿日參著御届奉申上、書類奉差上候、都テ御落手被成下、向後 御總督御支配之趣御達且諸願伺、届等都テ 御裁判所可請御差圖旨被 仰渡、御條目拜聽、願之通歸邑被 仰付候、然ル處當今御多事之御場合、聊ニテモ 御國用之萬一ヲモ相勤申度ト苦心焦慮仕、六月十七日懇願書相認可奉差上ト奉存候内、御裁判所御廢止相成、懇願之道相絶、不取敢上京ト奉存候處、持病差發、不圖意外之延引深奉恐入候、漸此程全快仕候ニ付、道中取急上京仕候、固小給之私共、何等之 御國用ニモ相成兼候儀ハ勿論之御儀御座候得共、只管以報國之赤心、鞠躬盡力、斃而已度奉存候、出格之以 御憐愍願之通御採用被成下置、朝臣之御列ニ御加、家名相續被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段偏奉懇願候、以上。

元徳川旗下 寄合席

菅谷主 税介

慶應四戊辰年八月廿八日

辦事御役所

○ 私儀 大政復古被 仰出候ニ付、勤 王之外他念無御坐候間、不取敢家來之者へ申付、當二月廿七日井上河内守方迄證書差出置、引續知行所表へ引越、御用向奉相勤度、三月六日江戸表出立、同月十三日於駿府表 大總督様へ奉伺御機嫌、通行 御印鑑頂戴仕、同月十五日遠江國豐田郡向笠西村へ歸邑仕、引續 上京仕度志願ニ御坐候處、其後中暑ニテ久々相勝不申、乍不本意延引罷成奉恐入候、漸快方罷成候間、八月七日向笠西村出立、一昨十五日京著仕候間、此段御届申上候、何卒身分相態之 御用被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上。

遠江國豐田郡向笠西村 元寄合

秋 元 一 學

八月十七日

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

辨事 御役所

○再請書

今般 御一新被 仰出候ニ付、兼テ勤 王遵奉之素志以證書申上置候間、當三月十五日歸邑仕、速ニ上京之上、奉願盡力實効相盡申度志願ニ御座候處、其後不圖モ病氣差起難儀仕候間、右療養罷在、追々延引仕、漸快方ニ付、去ル十五日押テ上京仕、著御届奉申上、身分相應之 御用奉願置候處、今般 御出鞆 御東下被 仰出候ニ付テハ、別テ相應之 御用奉懇願度御座候處、小身之私、隨從等奉願候儀不願身分奉恐入候儀ニ付、御道筋天龍川之儀、當夏及切所、不容易御普請之趣承知仕候間、金千五百兩獻納奉願度、乍聊右御普請金之内へ御差加被成下置候ハ、難有仕合奉存候、此段奉懇願候、以上。

徳川元寄合

八月廿九日

秋 元 一 學

辨事 御役所

○

乍恐奉願上候口上書、

當春三月中和州采地詰家來ヲ以、愚父駿河守事溪藏儀、上 京勤 王御用懇願素志之旨ヲ以奉歎願候處、願之旨趣ハ先般 間召届置、何分之儀ハ駿河守歸順實効相立上 京歎願之上可被 仰出旨、以御附札被 仰渡、誠以難有仕合奉存候、依之、溪藏儀速ニ上 京可仕候處、所勞ニ付養生中、重忠ニ相成、急速上 京可仕體ニ無御座、遲延ニ相成候テハ尙更奉恐入候間、退隱仕、賤臣直昭ヲ以宿願之素志繼續仕候様申聞、則別紙寫之通、六月廿八日於東京 大總督府へ奉歎願、尙直昭モ亦同様旨趣奉歎願候處、七月十三日被 間食届候旨被 仰渡候付、采地土著仕候、道中通行 御印鑑頂戴仕、不取敢爲拜謝朝恩、昨十六日上 京到著仕候、尤采地之儀ハ和州山邊郡新莊村、喜殿村、上總村、合場村、平等坊村、岩室村ニテ千九百四十

慶應四年戊辰八月

山口新五郎

辨事 御役所

直昭花押

○別紙ハ之ヲ略ス。

歎願書、

元大和國代官相勤、五條陣屋ニ相詰、職務罷在候處、當正月六日鷲尾殿エリ、王命ニ付陣屋ハ勿論、鄉村金穀共可引渡旨被仰達候ニ付、奉謹承、即刻御引渡申上、陣屋引拂、其後大和國爲鎮撫烏丸殿御巡廻、御旅館へ被召呼、徳川家臣之者嚴科ニ可處處、格別之御憐愍ヲ以御宥免被成下候間、此所ニ謹居、御沙汰可奉待旨御書取ヲ以被仰渡、猶其後久我殿大和國總督被爲蒙 仰、御同殿ヨリ謹居御免被成候ニ付、勝手次第進退可致被仰渡、御仁惠之御沙汰 御聖恩之程難有仕合奉存候、右ニ付私儀素々藏前取ニモ御座候間、關東へ罷歸候所存無之、何レニモ勤 王奉願上度、併進モ御用ニハ相立申間敷候得共、相應之御場所相勤、九牛之一毫奉報度、此段奉歎願候、以上。

舊幕旗本 代官勤

辰 八月

中村勘兵衛

辨事 御役所

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

○ 高五百石 江州甲賀郡森尻村 上田村之内

元小普請

堀田信次郎

私儀

今般 王政御一新、御復古之趣奉拜承候ニ付、速上京、朝廷 御奉公筋可奉願之處、昨年來病氣ニ取合、平臥罷在候ニ付、快方次第押テ上京可仕心得ニテ、當閏四月廿一日家來ヲ以奉歎願置候得共、元來持病之儀ニ御坐候間、抄々敷療養モ難行届、漸當節ニ至快氣ニ趣候ニ付、甚以奉恐入候得共、上京仕度段乍恐東京 御總督様へ奉願上候處願之通一旦歸邑、引續上京可仕様 御印鑑頂戴仕、冥加至極難有仕合奉存候、尤早春來勤 王之志願聊以相違無御坐候、前件病氣之次第ニテ斯迄及遲滯、無是非時情厚御照察被成下置、拔格之 御垂憐ヲ以、相應之御用向被爲 仰付被成下候得ハ、乍恐抽丹誠奉報 天恩度志願ニ御坐候、何分願之通御憐愍之御沙汰、偏ニ奉願上候、以上。

蝦夷地御用

堀田五郎左衛門分知

堀田信次郎

慶應四辰年九月二日

辨事 御役所

○再請書

今般御一新ニ付、大義ヲ存、速ニ上京勤 王實効モ相願度志願ニ御座候處、昨年來病氣ニ付及遲引候段、何共奉恐入候、漸快氣ニ趣、上京仕、過日書取ヲ以相應之御用被 仰付候様奉歎願候得共、元來短才未熟之儀ニ御座候間、何等之御用ニモ難相立ト苦心仕候處、此度 御東行ニ付テハ、右御費用之内へ金三百兩獻納仕度奉懇願候、何卒御採用被 仰下候ハ、冥加至極難有仕合奉存候、偏ニ 御沙汰之程奉願上候、以上。

蝦夷地御用

堀田五郎左衛門分知

堀田信次郎

明治元年辰九月十四日

辨事 御役所

○批紙

願之趣難被及 御沙汰候事。

○奉歎願候覺、

采地

遠江國引佐郡 豐田郡

相模國大住郡

武藏國賀美郡

上野國綠埜郡 之内

高八百貳拾五石餘

元徳川旗下

近藤邦太郎

私儀兼々勤

王之心底御坐候テ、家族竝家來共一同召連、當二月六日東京出立、同月十八日於駿州府中城從 大總督宮誘引之儀御坐候テ、勤 王尊奉固相守、毛頭一心無御坐候段證書差出、無滯御請取相成申候、然ル處旅中ヨリ持病之痢症相發、相勝不申、其後追々快方罷成候ニ付、上京可仕處、當五月中遠州引佐郡金指關門御守衛應援被 仰付候旨、大總督府參謀御兩卿方ヨリ蒙御沙汰、冥加至極難有仕合奉存候、右ニ付早速彼地へ人數差出置、猶非常之節ハ、増人數等差出、時宜ニ寄私儀モ出馬可仕心得ニ罷在、素ヨリ勤 王之赤心一徹之儀御坐候事故、少モ無忘上京仕度奉存候得共、前顯之次第無餘儀延日罷成候、何卒此上共相應之御奉公被 仰付候様、御執成之程偏ニ奉歎願候、恐惶謹言。

慶應四辰辰年九月二日

近藤邦太郎兩判

復古記

卷八十五(第六)

明治元年五月十五日

三六七

辨事御役所

○ 奉懇願候、

一高貳千石

元徳川旗下

宮崎七郎右衛門

兄七郎衛門病氣ニ付 名代

宮崎 敏三郎

乍恐兄七郎右衛門儀、勤 王精忠盡力御奉公奉申上度懇願御坐候處、從來多病ニ御坐候上、殊ニ病中罷在候間、少シニテモ快氣次第上京仕候様手筈申合、共ニ勤 王精忠盡力御奉公奉申上度懇願ニテ、私當三月中旬上京仕候、然處御當地御事柄何分不案内ニテ、少シモ相辨不申、當惑罷在候處、折節西本願寺中へ聊手寄有之ニ付、不取敢彼方へ相頼、則西本願寺御内島田右兵衛少尉取次ニテ、四月廿七日 太政官へ御届申上候、從夫西本願寺末寺佛照寺ニ罷在、日々御沙汰奉待居候處、御沙汰モ無之ニ付、此度再願仕候、最兄七郎右衛門儀病氣快方ニモ趣不申候ニ付テハ、今以上京仕兼候、依之、何卒私へ相應之 御用被 仰付被成下候様偏奉懇願候、恐惶謹言。

七郎右衛門弟

宮崎 敏三郎

九月二日

辨事御役所

○ 前書ハ之ヲ佚ス。

○ 以書付奉言上懇願書、

今般 大政御一新ニ付、當春正月東山道鎮撫 御總督御下向之節、尾藩荒川彌五右衛門へ御取締被 仰付、都テ歎願向、右手續へ可申立旨被 仰出候ニ付、陣屋詰之者共ヨリ勤 王ニ心無之赤心歎願仕候處、歸邑可仕旨被申渡候條申越、依之、閏四月三日江戸表出立、同十九日尾州表へ著仕、於待賓館勤 王之證書差出、相應之御奉公奉願、實効相顯度歎願仕候處、於舊知行所謹慎可罷在旨被 仰付、御沙汰通相慎罷在候處、今般 御免被 仰付難有仕合奉存候、依之、爲御禮一昨二日登京仕候儀ニ御座候、方今御多事之折柄、素餐罷在候ハ奉恐入候付テハ、不肖之身分未熟之至ニ御座候得共、一際勉勵努力仕底心ニ御座候間、何卒身分相應之御用向被 仰付被下置候様、幾重ニモ 御仁慮ヲ以御奉公之品速奉蒙 仰奉表勤 王之一端、且家名相續蒙 仰、采邑依舊取締、尙此上厚 皇化奉伏候様仕度、不願恐奉懇願候、以上。

舊幕府旗下 元席留守居支配

大島 喜八郎

慶應四戊辰年九月四日

辨事御役所

○ 乍恐奉歎願候、

從來徳川之小臣ニハ御座候得共、尊 王之大義聊相辨へ罷在候處、此度 大政御一新奉拜承、不堪欣抔、其砌爲實効本家戸川隼人ヨリ隣國池田備前守殿へ領地相預申候、其節速ニ上京、天恩之萬一ヲ奉報度志願御座候間、其節上京可仕處、昨卯年十二月廿九日 靜寛院宮様非常御立退之節御警衛御供被仰付罷在候、尤當四月十四日 御免被 仰付候得共、父播磨守死去仕、忌中相成、殊ニ持病之痼症ニテ引込罷在、急々快復之目計無御座、追々延引仕深奉恐入候間、依之、私上京仕候、元來微力小身之者ニ御座候得共、本家戸川隼人ヨリ奉願候通、何卒身分相應之御用被爲 仰付被下置候様奉希上候、恐惶謹言。

戸川大隅守儀

元徳川家勤仕竝寄合

大隅守悴

戸川 鏈之丞

慶應四戊辰年九月四日

辨事 御役所

○ 別紙之通土岐侍從ヨリ數願仕候、是迄彼是遅引之儀、誠ニ以無據次第ニモ相聞、先般於東京高家之向 朝臣被 召加、本領安堵被 仰付候場合ニ相漏レ、唯今以在邑進退難仕段悲歎申越候間、速ニ上京、何卒相應之御用被 仰付候様、何分ニモ御憐愍之御沙汰被成下置候様、於私伴々奉歎願候、以上。

中大夫

畠山 侍從

九月五日

辨事 御役所

別紙、

先般東山道 總督府岩倉殿ヨリ濃州本巢郡小彈正村領地家來へ被 仰渡候御儀モ御座候ニ付、病中ニハ御座候得共、押テ當三月廿五日江戸表出立、同廿六日藤澤驛迄罷越候處、先鋒總督府ヨリ御印鑑無之候テハ通行難相成旨、同所關門番士ヨリ承知仕候ニ付、先鋒總督府へ早速以使者相願候處、御印鑑御渡相成、同驛同廿八日出立、夫ヨリ箱根 御關所改之上、猶又於駿府 大總督下參謀ヨリ御印鑑御引替御渡ニ相成、無滯四月九日尾州名古屋表へ到著仕、同十二日待賓館へ出張仕、尾藩荒川彌五右衛門へ面會、勤 王報國盡忠之外別心無御座旨誓書差出候處、舊地へ引取 御再命有之候迄謹慎可仕旨申聞、同十四日領地小彈正村へ引取、則謹慎仕、御所置之程相待、是迄差扣罷在候處、去五月廿四日於江戸表河田相模守ヨリ明廿五日辰刻登營可致旨、大總督府ヨリ被 仰出候段相達候處、私儀當三月廿五日届之上、領地小彈正村へ罷越在邑之旨、留守宅家來ヨリ御届申上置候段、六月十三日申越、竝高家一統朝臣被 仰出、本領安堵被 仰付候ニ付、追々高

家上京御禮申上候趣ニ付、其地ニテモ被 仰出有之候哉、甚以心配仕候段モ申越候ニ付、深心痛仕、同十九日名古屋表迄使者差出、同廿日待賓館へ罷出、荒川彌五右衛門へ右之趣委敷及面談候處、私安堵之儀御取調相成居候得共、未 御用繁ニ付延引ニモ可相成ト相心得候間、御沙汰次第御達可申、最早謹慎ニハ不及、本領安堵可致旨申渡書面壹通相渡、御沙汰次第爲御禮上京可仕旨申達候ニ付、難有奉存差扣罷在候處、同八月十三日笠松裁判所ヨリ御達書拜見仕候處、荒川彌五右衛門御取締之儀被 免候段被相達、同十七日同人ヨリ達書有之、濃州取締之儀被 免候ニ付テハ、向後笠松裁判所ニテ諸事御取扱相成、尤願書等右裁判所へ引渡候段申來候ニ付、八月十八日笠松裁判所へ使者差出、上京之儀伺候處、太政官ヨリ御差圖無之候テハ一切取扱之儀難出來候段被申渡、當惑至極甚以心痛仕候間、不得止事畠山侍從ヲ以奉歎願候、何卒上京私相應之 御用相勤申度萬緒御高察、寛大之御沙汰被成下置候様、此段幾重ニモ奉歎願候、以上。

元高家

土岐 侍從

八月廿八日

○ 御届奉申上候口上覺、

私儀兼テ勤 王素願赤心之次第、不取扱登京 御用之御一端ヲモ相勤申度之志願ニ罷在候得共、先年來宿病起臥進退不自在不任心底、依之、閏四月十七日不得止家來ヲ以奉歎願候ニ付、則中條左衛門督、朽木主計助兩人ヲ以御取調之上、御下ケ紙ニテ上京可仕之條被 仰渡、早速登京可仕之處、前條之通何分重病ニテ一日一日延引相及候段、遲緩之罪深奉恐懼候、漸此節ニ至リ聊順快仕候ニ付、押テ去月十五日東京出立、昨四日御當地到著仕候、何卒素願之次第厚御評察被成下、右願之趣御聞濟被 仰付被下置候様、伏テ奉仰願候、以上。

元旗下

國領 正太郎印

辰 九月五日

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

辨事御役所

○ 先般東山道御總督ヨリ被 仰出候 御新令之趣、舊知濃州本巢郡小彈正村ニ差置候家來ヨリ申越、厚奉拜承候、私儀勤 王盡忠仕度之外素ヨリ別心無御座候間、早速上京歎願可仕之處、兼テ家來ヨリ尾藩荒川彌五右衛門へ届置候通、舊年ヨリ 重病相煩、何分旅行難仕、不得止事悴御之助爲名代、同姓左京大夫同伴ニテ、名古屋表迄罷登歎願仕候次第御座候、其後私病 氣少々快方罷成候ニ付、不取敢東京出立、去ル五月五日名古屋表へ到着、荒川彌五右衛門へ面會歎願之趣申出、誓書差出候 處、追テ 御再命有之候迄、舊知へ罷越居候様被申渡候ニ付、早々歸邑仕居候處、八月七日回文ニテ上京之上歎願可仕旨被 達候ニ付、當二日舊知出立、昨六日京著仕候、何卒微衷之趣以 御垂憐相應之 御用蒙 仰候様奉願候、此段宜御沙汰被成 下度奉歎願候、以上。

元徳川旗下

土岐 鎗吉

辰九月七日

辨事御役所

○ 遠江國城東郡 横地陣屋 徳川元旗下 元勤仕並寄合

本多日向守

高四千貳百六拾石餘

今般 王政御一新ニ付、私儀勤 王一途相心得候底意ニ御座候折柄、尾張大納言殿參與附屬之衆ヨリ田沼玄蕃頭在所重 役共ヲ以御誘引有之、當二月廿八日勤 王遵奉一念無御座候段誓書差上置候通赤心ニ御座候、依之、大總督宮御東下 前聊奉慰勞 王師度、微志金千兩、米五百俵獻納仕度段、願書尾張大納言殿へ差上置、三月十七日江戸表出立、同廿二日 知行所遠江國城東郡横地陣屋へ歸邑仕、同廿九日於駿府 大總督宮並四卿様へ御機嫌奉窺、難有仕合奉存候、引續上京

可仕心底御座候處、持病之脚氣ニテ不相勝罷在候内、五月中旬三州吉田御裁判所へ御呼出之處、病氣同篇ニ付、不取敢家 來ヲ以其段申上置、其後快方ニ付六月七日御裁判所へ罷出、御用相濟、彌上京可仕心底ニ御座候得共、押候故歎、別テ相 勝不申、延引仕候段奉恐入候、追々快方御座候ニ付、去月廿八日在所横地陣屋出立仕、昨六日御當地著仕候、何卒 御憐 愍ヲ以 朝臣之末ニ被差加、相應之御用筋被 仰付、前書金穀獻納之儀モ 御採納被成下候ハ、冥加至極難有仕合奉存 候、此段宜御執成之程奉歎願候、恐惶謹言。

慶應四辰年九月七日

本多日向守印判

辨事御役所

○ 遠江國城東郡 月岡陣屋 徳川元旗下 元寄合

井上志摩守

高四千石

今般 王政御一新ニ付、私儀兼々勤 王之素志奉表度、早速上京可仕處、當春中ヨリ疝疝之症相發、追々及延日候内、去 ル六月中三州吉田御裁判所ヨリ御呼出有之、其節少々快方之折柄ニ付、罷出御用相濟候頃ヨリ腫物甚敷相發、步行著座 等難出來、依之延日仕候處、此程中追々快方、未平愈仕兼候得共、餘リ遅々仕奉恐入候ニ付、押テ上京仕候、尤去月廿二日 遠江國於池田御會計判事岡本健三郎殿ヨリ、天龍川堤御普請御手傳之御沙汰御達有之候ニ付、當春以來別段 御用モ不 相勤候ニ付、爲冥加當年收納米半高上納可仕旨御請申上、同月廿六日右納金之内五百兩御同人方へ相納、難有仕合奉 存候、此後何卒格別之以 御憐愍 朝臣之末ニ被差加、身分相應之 御用被 仰付候ハ、冥加至極難有仕合奉存候、此段 宜御執成之儀偏奉歎願候、以上。

慶應四辰年九月八日

井上志摩守

辨事御役所

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

○ 奉追願候覺、

去月初旬私知行高書上可申旨被 仰出候ニ付、則同月七日高附書上置候儀ニ御座候間、何ト歎御所置モ可被成下御儀ト奉  
存候得共、何分從來勝手向不如意之上、近來打續諸價沸騰之折柄、諸雜費等相嵩、必至難澀ニテ活計之程無覺束場合ニ至、  
當惑心痛仕罷在候、尤私儀ハ格別之以御憐愍、當正月下旬諸組浪人取調掛被 仰付候旨、岩倉殿被 仰渡、其後二月廿五日  
二條城御殿預リ並諸道具等取扱之儀モ、總テ是迄之通被 仰付候旨、二條城於太政官代中御門殿被 仰渡、猶又六月五日二  
條城御預リ被 仰付候旨、於 御所阿野中納言殿被 仰渡、誠ニ以冥加至極難有仕合奉存候、右様當正月以來御役儀被  
仰付被下候廉モ有之、且前顯之通勝手向必至難澀ニテ、活計之程無覺束場合ニ至候儀ニテ、御沙汰ヲ不奉待奉願候儀ハ何  
共恐多儀ニ御座候得共、可相成御儀ニ御座候ハ、宸早收納期限ニモ相成候間、何卒出格之以御評議、早々本領安堵被  
仰付被下候様仕度、依之此段奉追願候、以上。

辰九月十五日

三輪嘉之助

○ 前書ハ之ヲ佚ス。

○ 奉願候口上書、

王政御一新ニ付勤 王遵奉之外ニ念無御座候ニ付テハ、報 國之爲一廉奉盡精忠度候得共、素ヨリ小身微力之儀ニ付、  
井上河内守へ附屬仕、同藩人數之内へ私家來共差加、異變等有之候節出兵仕、勤 王之實効相表度、當二月中河内守ヲ以  
證書奉差上、東海道 御先鋒御兩卿様御通行之砌、采地遠江國敷知郡志都呂村陣屋へ人數用意爲仕置、私儀上京之心得  
ニテ二月晦日東京出立仕、旅行中於駿府 大御總督官様並御四卿様へ奉伺御機嫌、三月十四日一ト先著邑仕候處、不容  
易時態、萬一浮浪脱走之徒潛越可仕哉モ難計、深心痛仕候間、采地最寄同國荒井、氣賀兩御關門之間へ人數差出、巡邏仕、

湖上忍渡等之取締向、粉骨碎身仕度段 大御總督官様へ奉願候處、願之通精々勉勵取締可仕 御沙汰之旨被 仰出、難  
有仕合奉存、無懈怠盡力罷在候、然ル處兼テ上京志願御座候ニ付、巡邏被 仰付中ニハ候得共、右取締之儀ハ家來共へ厚  
申付置、不苦儀御座候ハ、上京仕度旨願書、井上河内守家來伺書相添奉差上候處、上京之儀ハ不苦、巡邏之儀ハ篤家來へ  
申付置、是迄之通可相心得旨被 仰出、難有仕合奉存候、依之、本月七日陣屋許出立、同十四日著京仕候、且今般東京 行  
幸被 仰出候ニ付、天龍川堤切所御普請御手傳之儀、去月廿一日會計御掛岡本健三郎殿ヨリ被 仰渡、重疊難有、迅速奉  
畏、御至急御用途之儀ニモ御座候間、出立前右上金之内不取敢金千七百五拾兩上納仕候、猶精々盡力、追々可奉上納旨、  
在留家來共へ申付置候、就テハ方今萬緒御多端之折柄ニ付、此上相應之御用被 仰付被下置候様、偏奉懇願候、以上。

徳川元寄合

辰九月十七日

五井弘之助

○ 辦事御役所

○ 願書、

一高五百石 外ニ込高等無御座候

舊幕府元兩番席

逸見三之助

辰年卅五

私儀安政二卯年家督被申付、元治元年八月廿日兩番へ番入仕、慶應元五年六月十一日小普請組入仕、其後病氣ニ付引籠  
罷在候處、大政御一新ニ付、尾張大納言附屬參與方大河内刑部大輔ヨリ知行所三州寶飯郡拾石村在役家來呼出シニテ、  
御趣意御書付之趣御申渡ニ相成、其節右家來ヨリ勤 王遵奉少モ違背不仕、知行所之者迄無二心盡力御奉公相勤可申旨、  
證書奉差上候段、右家來ヨリ申越候、私儀右病氣ニ付、當三月上旬東都ヨリ家來ヲ以勤 王證書本多美濃守方へ差出申候、

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

三七五



其後病氣重體ニ付、不取敢爲名代弟銀之助、當四月廿九日東都出立、閏四月十一日知行所へ著仕候、私儀モ追々病氣快氣ニ付、當八月九日出立、同月廿三日知行所へ著仕候、右病氣ニテ延引ニ相成深ク奉恐入候付、早速上京仕候、依之、爲冥加御奉公仕度、何卒相應之御用被 仰付於被爲下置候ハ、此上難有仕合奉存候、此段奉歎願候、以上。

辰 九月十九日

逸見 三之助

○ 辨事 御役所

私儀

從來勤 王之志願罷在候ニ付、速ニ上京仕、相應之 御用奉蒙度存意ニ候處、胸痛ニテ引籠、不得止事當三月十五日東山道御總督中仙道板橋宿御本陣へ、家來共ヲ以歎願書差出候處、尾藩荒川彌五右衛門へ取締申付候間、可得其意旨仰渡候處、胸痛ニテ出立仕兼、猶又家來ヲ以尾藩荒川彌五右衛門へ差出候處、家來ニテハ落手難仕旨被申渡候旨申聞候ニ付、其段御總督へ申上候處、私持參候様被仰渡、押候テ療養手宛仕、五月十九日江戸表出立、同月廿六日尾藩荒川彌五右衛門へ罷出、勤 王之證書可差出旨申聞、則證書差出候上、舊知行所之内へ引取、追テ御再命在之候迄謹慎可被在旨被申渡、其後尾藩御取締被爲 免候旨被申聞、當時笠松縣御役所御支配之旨被仰渡、速ニ上京可仕之處、而體へ腫物出來、未全快不仕候得共、追々延引奉恐入候間、押候テ出立仕度旨濃州笠松縣御役所へ相伺候處、不苦旨被仰渡候ニ付、當月十五日濃州可兒郡洞村出立、去ル十九日京著仕候、何卒 寛大之 御憐愍ヲ以、相應之 御用奉蒙度、此段宜御沙汰奉歎願候、以上。

舊幕府 元奧詰銃隊

津田 猪十郎

辰 九月廿四日

○ 辨事 御役所

奉願上候口上覺、

私儀

大政御一新後引續御用相勤、御役等被 仰付候儀モ御座候間、何卒格別之 御憐愍ヲ以、本領安堵被 仰付被下置候様仕度、高、由緒等之儀、別紙書付相添此段奉願上候、以上。

辰 十月十日

中井 主水 印

○ 別紙ハ之ヲ佚ス。

○ 分知鎮之助身分之儀ニ付添願、

私分知遠藤鎮之助、今般登京仕候テ、是迄之次第委細當人ヨリ奉愁願候得共、本支之間柄ニテ、於私モ深切痛仕候憂苦之程 御憐察被爲成下、非常出格之以御沙汰、私同様分限相應之 御奉公被爲 仰付被下置候得ハ、如何計 朝命難有仕合奉存候、恐懼敬白。

十月

遠藤 但馬 守

○ 辨事 御役所

王政御復古御一新之大運ニ當リ、速ニ馳登、朝命遵奉、何様之 御用モ勤勞仕度候處、永々之病氣ニテ起居不任心底、無據去二月下旬家來爲差登、辨事御役所へ歎願仕候處、御附紙ヲ以快氣之上私儀上京歸順之道可相立旨被 仰付、奉謹承、其後追々病氣快方ニ付、素願之實効可相立心底ニテ勇憤發途、三月下旬尾州名古屋へ到著、尾藩へ證書差出、志念申述候處、追テ東山道 御總督様ヨリ御達有之候迄、舊知行所ニ差扣罷在候様被申渡、無餘儀知行所へ引取申候處、如何

復古記 卷八十五(第六) 明治元年五月十五日

三七七

様共登 京之儀遮テ申立可馳參候處、舊知行所驛立候ニ付、鎮靜方盡力仕居、加之永々之病氣ニテ疲勞強ク、數日ヲ過シ、事宜ヲ取失ヒ、但ニ小心痛苦而已ニテ今更悔悟至極ニ奉存候、萬死所容無御座奉恐入候、舊知行所之儀モ此程笠松縣於御役所御取扱被成下、難有鎮靜仕候ニ付、今般 闕下ニ拜伏必誅之罪條 御宥恕之奉蒙御沙汰度奉懇訴候、何卒出格之御仁恤ヲ以、往者不被爲咎、分限相應 御奉公被仰付被下置候様仕度奉存候、然ル上ハ無量之 天恩ニ奉浴、粉骨勉勵、永ク盛世ニ御奉公可仕儀ト難有仕合奉存候、右奉申上候通 御聞届被成下候様、奉哀訴候、誠恐謹言。

德川元旗下 小普請

遠藤鎮之助

十月十七日  
辨事御役所

○ 奉願上候覺、

先般 王政復古、天下御一新之期ニ至リ、王命ヲ奉シ候ハ勿論之儀ニ御座候處、既ニ歸順相立候者ハ寛大之 御沙汰可被 仰付哉ニ奉待承、素ヨリ私儀奉勤 王度心願ニ御座候ニ付、早速上京可仕候處、久々病氣ニ付何分全快不仕、上京段々延引仕奉恐入候、此程漸々全快仕候ニ付、早速於東京 大總督府様へ奉願上、御印證奉頂戴、當十月七日上京仕候、何卒兼テ心願之通奉勤 王度段奉歡願候、前文之趣意具ニ御聞届被成下、相當之 御奉公被 仰付被下置候様、御執成被成下候ハ、冥加至極、難有仕合奉存候、此段厚以 御仁惠 御沙汰之程、御當地旅宿ニ罷在奉待上候、以上。

高千石 德川旗下

妻木永五郎印

明治元辰年十月廿二日  
辨事御役所

○

伊勢守分知諏訪左源太儀、當春中伊勢守同道、信州高島表へ罷越、岩倉殿御下向之節、御出迎罷出拜調仕、猶又爲何御用御旅館へモ參上、其後尾藩ヨリモ誘引有之、勤 王之證書差出、引續上京仕度、同國筑摩郡采地へ罷越用意仕候内、病氣差發旅行難仕ニ付、無據同所ニ罷在療養仕候處、此節追々快方仕候ニ付、上京仕候間、何卒身分相應之御用筋被 仰付被下置候様、於伊勢守奉懇願候、此段申付越候、以上。

諏訪伊勢守家來

林 魯兵衛

十月廿二日  
辨事御役所

○

諏訪伊勢守分知御座候ニ付、當春中同人同道信州高島表へ罷越、岩倉殿東山道爲鎮撫御下向之節御出迎罷出拜調仕、猶又爲何御用御旅館へモ參上仕、其後尾藩荒川彌五右衛門ヲ以、二月廿八日勤 王之證書差出、辨事局毛受鹿之助殿落手被致候趣、且又一途勤 王志願ニ付、少人數本藩へ差加出兵爲仕、引續早々上京仕度、采地ニテ用意仕候内、脚氣其上胸痛差發、何分長途之旅行難仕、種々療用仕候得共、治療不抄取、押テモ上京仕兼、追々時日押移、誠以奉恐入候、此節快方御座候間、不取敢上京仕候、何卒格別之 御仁恤ヲ以身分相應之御用筋被 仰付被下置候様、偏ニ奉懇願候、此段宜 御沙汰被成下度、伏テ奉願上候、以上。

元徳川旗本 元寄合

諏訪左源太 印花押

明治元辰年十月廿二日  
辨事御役所

復古記 卷八十五 第六 終

# 復古記 卷八十五 第七

○出雲藩、隱岐島民ノ驕傲ナルヲ以テ、兵力ヲ藉リテ之ヲ鎮壓セントス、事聞ス、是日令シテ、其教化ヲ施サスシテ、威武ヲ用フルヲ責メ、刑法官判事土肥實匡ヲ以テ監察使ト爲シ、往キテ之ヲ按問セシム、既ニシテ本藩其情狀ヲ上陳ス。

隱岐國沸騰之義ニ付、此度雲州ヨリ取締之手段相盡候ニ付、兵端ヲ開可申旨、弊藩へ内達仕候處、干戈ヲ動シ候義ハ實以重大之事件且隣國之義、傍觀難仕、右事件ニ付兼テ岩倉殿へ言上仕候趣モ有之候ニ付、此段御届申上候、以上。

因幡中將内

河毛文藏

五月十四日

辨事御役所 行政官記 池田輝知家記

○本日達書

松平出羽守

隱岐國取締之儀、當分其藩へ被 仰付置候處、其以前西園寺中納言山陰道鎮撫出張中、同國公文役方之者上京申付有之ニ付、追々右上京之役方申立候趣モ有之、取調可被 仰付之處、頃日其藩人數隱岐へ渡海致シ、島民取締手段無之由ニテ兵力相用候趣、其藩使者ヲ以因州藩へモ届致シ候由、即今同藩ヨリ隣境兵端相開、不容易儀ヲ以注進候之段、以之外之儀ニ候、王政御一新之御初政、飽迄 皇化ヲ被爲布候旨度々御布告之御趣意、如何相心得候儀ニ有之候哉、干戈ヲ以民ヲ制候儀有之間敷旨 御沙汰ニ候、仍テハ差向上京之公文方御取調之上、監察使早々隱州へ御差向、刑法官判然御取調可有之ニ付、是又相心得在申旨、被 仰出候事。

五月 松平定安家記

○本日達書

土肥謙藏

隱岐國民情不穩旨相聞へ候ニ付、江戸府判事被免、當官ヲ以テ同國監察使被 仰付候、速ニ發向可有之事。土肥實匡履歷書 官中日記

○十八日再達書

土肥謙藏

隱岐國監察使ニテ下向之儀被 仰付置候處、即今其國內兵端相開キ、紛擾之趣相聞へ、全ク不容易儀ニ候間、只今發足、晝夜兼行、何方ヨリニテモ飛船ヲ差立、著島之上速ニ取糺可申旨、更ニ被 仰付候事。土肥實匡履歷書 官中日記

○官中日記、初達ヲ十三日、再達ヲ二十日トナス、今履歷書ニ從フ。

隱州島後土民共沸騰仕、取押方始末之儀ニ付、御達之趣奉恐入、早速國元へ申遣置候處、閏四月中旬ヨリ追々應接仕、種々説諭イタシ候得共聞入不申、終ニ彼ヨリ及發砲候ニ付、無據是ヨリモ少々致砲發、徒黨之者共乍散亂平定イタシ候由、同所へ渡海仕居候モノ不取敢早驅ニテ上京仕、書取ヲ以別紙一冊之通ニ御座候、此段不取敢御届仕候、以上。

出雲少將内

增田健藏

五月廿日 辨事御役所

○別冊

隱州ニテ當春役方之者逐返候荒増之次第、

一當三月十八日、一揆徒黨之者共追々百姓ヲ呼集メ、刀鎗弓鐵ヲ携へ、差渡置候役人之モノ壹人搦捕、土藏へ入置、翌十九

日ハ數百人黨ヲ結ヒ、鐵砲ハ玉込イタシ、兼テ差渡置候役人相詰居候役場へ迫リ、ケ條書ヲ以糺問イタシ、誤リ書差出シ、不立除ニオキテハ、忽兵器ヲ以討取可申旨、強テ及懸合、役場ヲ取圍ミ候之處、何分 天朝之御領ニオキテ相拒候筋ニモ無御座、書面差出引取申候、併此者共一揆之勢ヒニ恐怖致シ、右様之始末ニテ引取候段ハ奉恐入候儀ニ付、國元ニテ謹慎申付置候、

一同廿一日ヨリ島前へ渡海仕、同所之モノ共同腹不致ニオキテハ、直ニ兵力ヲ以討取候段及懸合候由之事、

一同頃雲州廻米積込候船有之候處、其儘奪取り、壯士組ト相唱候者共乘組、脱走仕候事、

一二町ニテ近來雲州ヨリ扶持方遣シ、農兵取立、一島中取締之手助リニ仕度、渡海之人數是カ爲ニ相減シ、都合宜敷御座候處、此者共モ無理ニ壯士組へ引入候事、

隱岐國取締之始末書取、

一閏四月三日、隱州島前へ役方之者上下廿一人渡海仕、島後之様子承合候處、兩島船留ニテ通船不相成由申聞候事、

一同五日、長谷川文柳ト申醫生、元島後産之モノニテ、此度島前迄召連渡海仕候處、親爲對面島後へ罷渡度旨相望候ニ付、任其意島中之模様モ承合候様申合、渡海爲仕候處、島後西郷ト申湊ハ舟留之由ニ付、今津ト申所へ著船上陸仕、船ハ直ニ島前へ歸帆之積ニ御座候處、風合惡布津戸村ト申所ニ碇泊仕居候處、同所モ船留嚴重ニイタシ、船道具等皆々取上ケ候由、尤翌七日罷歸候テモ宜敷旨申聞候由ニ付、右船島前へ歸帆仕候、

一同十三日、長谷川文柳儀島前へ歸帆仕候ニ付、事情相尋候處、文柳逗留中島後之者へ相咄候ニハ、朝廷ヨリ御達之趣モ有之候ニ付、雲州ヨリ人數渡海イタシ候儀モ可有之旨申聞候處、一揆徒黨之モノトモ島中ニテ權ヲ執罷在、一向聞入候氣色ニ無之、尤左様之譯ニ候ハ、士列兩三人モ渡海イタシ候ハ、隨分應接ヲイタシ可申哉ト相尋候由之處、唯兩三人之渡海ニ候ハ、應接モ可致旨申答居候由、

一同十五日衆評仕、何様 朝廷御達之趣ハ早々島後へモ不爲申聞候テハ不相濟次第ト申合、上下拾壹人島後西郷湊へ渡海、

同夜矢尾村唐人屋某ト申者方へ止宿仕候處、壯士隊トカ相唱候テ、若者トモ帶刀イタシ、廿人餘旅宿之廻リニ立番イタシ居候事、

一同十七日、矢尾村莊屋孫市ト申者ヲ以、此度從 朝廷御達之趣有之ニ付、爲應接渡海イタシ候間、イツレ成トモ罷出候様申通サセ候處、人別名前爲知吳候様申聞候ニ付、書付ニイタシ相渡候處、已前同所へ渡海イタシ居候者人別之内ニ有之候處、是ニハ對面難致候間、此者壹人相殘リ、外人別總テ旅宿替イタシ吳候様申出候ニ付、轉宿仕候、尤陸路罷越候テハ如何様之行違出來可致モ難計候間、船ニテ引越候様申聞候ニ付、任其意小船ニ乘組、案内之者ニ附添、目貫村上田屋平七ト申者方へ旅宿替仕候、尤船ニテ轉宿仕候節、壯士組トカ申候モノ廿人計リ、陸路相固メ罷在候、右宿へ差込應接之儀及懸合候處、少々行違有之候間、今日ハ應接不致旨申答候ニ付、其儘差置候事、

一同十八日、公間中之内飯美村武左衛門、荒木村友平、今津村公間代與平太ト申者已上三人應接トシテ旅宿へ罷越候ニ付、先達テ從 朝廷御達之儀有之候ニ付、人數渡海イタシ度候間、旅宿手配イタシ吳候様、且又御達之趣ハ斯之通ニ候間、島中不洩様爲申聞吳候様ニト申、當四月十三日御達書之寫相渡候處、一見仕、如何様粗承知致シ居候得共、當形勢公間中ヨリ申觸候テモ、島中取用不申候間、斷ニ及ヒ度、御達書モ此儘差返度由申答候得共、何分公間中當時上京留守之村々ハ無餘儀候得共、陣屋ニ詰方イタシ居候モノ共へハ、一先ツ取歸リ一見爲致吳候様申聞候處、左候へハ一見爲致可申旨、且旅宿之儀モ相談可致旨ニテ、御達書寫シ取歸申候、

但、此節役方之モノ始テ應接仕候ニ付、聊之酒肴手合仕置差出申候、且又同所舊幕府ヨリ預中ハ、兩島警衛且 後鳥羽 帝山陵爲御守衛、人數貳三百人程ツ、差渡置候ニ付、此度 御一新之廉御達之趣ニ付テ、如舊人數差渡候心得ニ御座候處、島前ハ人氣モ鎮靜仕居候得共、島後ハ當春役方之者逐返シ候一件始メ渡海之者相拒ミ候ニ付テ、右様之始末ニ相移候事、

一同十九日、昨日之爲返答中村公間嘉兵衛津戸村清兵衛、荒木村友平罷出、御達之趣ハ公間中へモ申聞、寫シ取候由ニテ差